

女の子になったら修羅場だった件 - 第四十四話 ラブコメ野郎は許せない件

暑い、暑すぎる。ここ最近の暑さは異常だ。

どうにか扇風機で夏を越えられないかと思っていたけど、さすがにエアコンを使ってしまった。

キャンプは良かったなあ。山は涼しかったもんなあ。やっぱり俺は海よりも山かなあ。

山は水着になる必要も無いし。

それはそうと、キャンプと言えば帰って来てから瞬く間に一週間が過ぎてしまった。

それは同時にお盆が迫っていることを意味している。

うちは父さんが二男で実家を出ているから、お盆になると帰郷する。それは俺が男だった頃の毎年の恒例行事だったけど、女になっても同じようだ。

以前は特に問題が無かった。でも今年は違う。

正直に言おう。俺は父さんの実家に行きたくない。

誰かが苦手だ、とかそう言うわけじゃない。

じゃあ何がそんなに嫌なのかと言うと、父さんの実家の隣に母さんの実家があるからだ。

そう、うちの両親は家が隣り同士の幼馴染みなのだ。

ちなみに父さんは母さんの五歳年上だ。

父さんが小学校の六年生の時、母さんは小学校の一年生。父さんが中学

三年生の時、母さんは小学校の四年生。父さんが高校三年生の時、母さんは中学校の一年生。父さんが大学四年生の時、母さんは高校三年生だったと言うことになる。

それでだ。父さんと母さんは子供の頃から仲が良かったらしい。

父さんが中学生の頃、朝起きるのが苦手で、母さんがよく起こしに行っていたらしい。

中学一年生の男の部屋に、小学二年生の女児が出入りしていたのである。

もっと言うと、高校三年生の思春期真っ盛りの男の部屋に、中学一年生のいたいけな少女が出入りしていたのである。

犯罪臭がプンプンする。

それはともかく、なんなんだこのラブコメも真っ青な環境は。

父さんは俺と似て平凡。一方母さんは凄い美人ってわけじゃないけど、曲がりなりにもありすの母親だ。そしてありすは母親似である。

ありすは突然変異的に可愛く生まれてしまったようだけど、母さんとありすがけっこう似ているのだから、母さんもそこそこ美人と言うことになるだろう。

つまりだ。母さんは学生時代、クラスでも普通よりちょっと可愛いくらいの立ち位置だったと思われる。

そんな女の子が隣りに住んでいて、子供の頃から仲が良く、朝部屋に起こしに来てくれるとか。

とんだラブコメ野郎だ。

父さんめ、のほほんとしているクセに、ちくしょう。

でも俺が男だった頃はまだよかった。俺はぼっちだったけど、彼女ができる可能性がゼロだったわけじゃない。

まともに話せる女友達なんて、ぼっちなんだからいるはずもないし、告白なんて一度もされたことがない。

でも可能性はゼロじゃないだろ。

通学路を歩いていたら、曲がり角から女の子がひょっこりと現れ、正面衝突して始まる恋だってあったかもしれない。

だからとんだラブコメ野郎の父さんをギリギリ許容できた。

だがしかし、今の俺は女だ。

それが意味する所。

彼女ができる可能性がゼロになってしまったのだ。

高梨さん、砂庭さん、夜乃宮さん、百合園さん、そしてイリスさん。

今の俺の周りは美少女だらけ。俺が男のままだったら父さんを鼻で笑えるレベルのハーレム野郎だった。

だがしかし、現在の状況は俺が女だから成立しているのであって、男の俺はぼっちである。

そして俺が女である以上、周りにどれほど美少女がいても、彼女になってはもらえないのだ。

こんな状態で父さんの実家に行ったらどうなるか。

まずは家が隣り同士という現実をまざまざと突き付けられる。

二人とも部屋が二階で、窓を開けてよく話をしていたと言っていた。

自分の部屋の窓を開けると、いつだって好きな女の子と話ができるんだぞ。

なんだよその羨ましい環境は。

そして実家に帰れば昔を思い出す。

本人達に悪気はまったく無いだろうけど、そう言えば部屋の窓辺でこんな話をしたね、なんて思い出話に浸るわけだ。

他にも実家の周囲には思い出がいっぱいである。

帰省してホッとした父さんが、父さんのお兄さんとお酒を飲む。するといつも以上に饒舌になるわけだ。

実家を継いでいる父さんのお兄さんの奥さんも、割と近場の出身だから、思い出話にも花が咲く。

彼女ができる可能性がゼロになってしまった俺の前で、とんだ青春話に花を咲かせられたりしたら……。

お兄ちゃん耐えられなくて泣いちゃうかもしれない。

だから父さんの実家に行きたくないのである。

とはいえ、断れる話でもないしなあ。

エアコンが効いた涼しい室内。ベッドに座っている俺は、いつもの如くありすに抱き着かれ、スリスリと頬擦りをされながら、とんだラブコメ野郎の父さんを妬むのであった。

女の子になったら修羅場だった件 - 第四十五話 裸エプロンはやるものじゃなくて見るものな件

父さんの実家に行くことを忘れるため、つまり現実逃避するために、みんなを家に呼ぶことにした。

ふふん、俺だって女の子をたくさん呼べるんだ。しかもみんな美少女だからな。

へっへーん、父さんめ、どうだ羨ましいか。

「でも彼女ができる可能性はゼロだけどね……」

クッキーの生地を捏ねりながら呟いた俺は、その場に崩れ落ちそうになった。

泣いてない。俺は泣いてなんかいない。でもこのままだとクッキーがしょっぱくなっちゃいそうだ。

挫けそうになりながらも、形を整えたクッキーの生地にジャムを塗り込む。そして焼き上がったパウンドケーキと入れ替わりにクッキーを焼く。

クッキーも焼き上がり、時計を見て、そろそろみんなが来る頃だと思った。

「普通にうまい」

試しにジャムを塗り込んだクッキーを食べてみたら、甘くてサクサクで普通に美味しかった。

いつもなら楽しい気分になるはずなのに、はあ、気が重い。

なぜ俺には可愛い幼馴染みがいなかったのか。

父さんもその辺を考慮して家を建ててくれればよかったのに。

お、あの新婚さんはそろそろ子供ができそうだ。しかもきっと可愛い女の子が生まれるぞ。ならこれから生まれてくる息子のためにもあの新婚さんの家の隣に家を建てよう、みたいな。

そうすれば俺にも可愛い幼馴染みができたのに。

もっとも、ありすがいるから隣の家に美少女がいても仲良くなれた可能性は低いし、そもそも今の俺は女だ。

何がどうなろうと彼女ができる可能性はゼロなのである。

「……うう」

いけない。クッキーがしょっぱくなってしまう。

もう考えるな。そろそろみんなが来るだろうし、美味しい紅茶でも淹れよう。

そう自分に言い聞かせていたらインターホンが鳴った。

どうやら来たようだ。

「おねーちゃん、凜ちゃんズが来たよー」

ありすの声が聞こえ、焦って目元を拭った。

俺が泣いていたことをありすに知られるわけにはいかない。

目元をしっかりと拭って深呼吸をした俺は、にっこりと笑った。

ほどなくしてキッチンの扉が開き、ありすが顔を覗かせる。

「いい香りだねえ……え？」

キッチンに漂う甘い香りに頬を染めたありすだけど、なぜか目が点になった。

まさか泣いていたのがバレたのか？ 涙はちゃんと拭いたはずだけど。

まぶたが赤くなっているのだろうか。

「お、お姉ちゃん……」

笑顔だったありすの顔が強張り、みるみる真っ赤になってゆく。

「ダメ！ みんな来ちゃダメ！ 今のお姉ちゃんを見ていいのはありすだけだから！」

バタンと勢いよくキッチンの扉を締めたありすが廊下で叫んでいる。

やっぱりバレちゃったのか。ありすに悪いことしちゃったな。

そう思いながらキッチンにある鏡で顔を確認したけど、特に目元が腫れているわけでもない。

見た目じゃなくて雰囲気とかでバレちゃったんだろうか。

「あまねがどうかしたの！？」

廊下の方から聞こえる高梨さんの声。次いでキッチンの扉が勢いよく開き、ありすが駆け込んできた。そして勢いよく扉を締めた。

「お、おねーちゃん！ 早く服を着てよ！」

扉を背で押さえながら声を張り上げるありす。

服？ 服ならちゃんと着てるけど。

そう思って首を傾げた。

「は、はは、裸エプロンだなんて！ そう言うのはありすと二人きりの時だけじゃないとダメでしょ！」

「はい？」

燃えるように真っ赤な顔で叫ぶありすに再度首を傾げた。そして視線を下げて自分の体を見た。

ああ、そう言うことか。

俺は今エプロンを着けているけど、その下に着ているのは部屋にあった薄手のキャミソールと短パンだ。

俺がお菓子作りを始めた時、キッチンはエアコンが点いていなかったから暑かったんだ。だから薄着をしてその上からエプロンを着けた。

ちゃんと服は着ているんだけど、着ている服がエプロンに隠れてしまい、正面から見ると裸にエプロンを着けているように見えるんだ。

「あはは、ありす、勘違いだよ。お姉ちゃんはちゃんと服を着て——」

ありすに説明しようとしたら、ドンドンドンッとキッチンの扉が激しくノックされた。

「は、裸エプロン！？ あまねの裸エプロン！？ ありす、ここを開けなさい！開けなさいと言っているの！」

扉の向こうから聞こえてくる高梨さんの鬼気迫ったような叫び。

「ダメええええ！ お姉ちゃんの裸エプロンはありすだけのものなのおおおお！ありすだって初めて見たんだからああああああああ！」

扉を背で押さえながら叫ぶありす。

だ、だから裸じゃないってば。

「ありす！ ねえありす！ 私達友達よね！？ 親友よね！？ 見るだけならいいじゃない！ 見ても減らないわよ！ ね！？ だからここを開けなさい！」

けたたましく鳴り響くノックと、聞こえる鬼気迫る叫び。

あ、あの……高梨さんはなんでそんなに必死なんですかね。そんなに俺の裸エプロンが見たいの？

見て笑いたいんだろうか。

それにしても必至すぎる気も……。

ジト目でそんなことを思いつつ、エプロンを外した。

「……あ」

エプロンを外した俺を見て、微かに声を上げるありす。

俺が服を着ていると知って気が抜けたのか、ありすが押さえていたキッチンの扉が開いた。

扉に押されて前につんのめるありすと、凄い勢いでキッチンに入って来た高梨さん。

「あまねの裸エプロンんんんんんんん！」

叫びながら俺を見る高梨さん。そんな高梨さんをジト目で見ながらピースをした。

燃えるように真っ赤な顔で息を荒らげている高梨さんは、俺を凝視し、そして――。

「服着てるじゃない！」

そう叫ぶと勢いよく床を踏み付けた。

だから着てるって言ったのに。

ていうか、俺の裸エプロン姿を見てどうする気だったんだ。一緒に温泉に入ってお互いの裸を見たのに、今さらな裸エプロンとかどうでもいいような気がするんだけど。

「ぷぷ、凜ちゃんのエッチ」

ひょこっと顔を出した砂庭さんが、左手で口元を押さえながらぷぷぷと噴き出し、右手で高梨さんの肩をポンポンと叩いた。

ただでさえ真っ赤だった高梨さんの顔がボンツとさらに真っ赤になった。

「私って最低だよおおおおおお！ ありすごめええええええええええええええええん！」

茹でダコのように真っ赤になっている高梨さんは、悲鳴染みた叫びを上げてあ

りすに謝り、逃げるようにキッチンから出て行ってしまった。

「り、凜ちゃん逃げなくていいから！ 気持ちはわかるからあああああああああ
あ！」

逃げた高梨さんを追いかけて走ってキッチンを出てゆくありす。

なんだこれ。

「凜ちゃんってああ見えてけっこうムツリなの」

キッチンに入って来た砂庭さんが、そう言って手で口元を押さたままぷぷぷと
笑った。

ムツリって、それどういう意味ですか。

心はどうあれ俺の体は女だし、女の子同士ならムツリも何も無いように思え
るんだけど、違うの？

「裸エプロンってなんだ？」

トコトコとキッチンに入って来た夜乃宮さんが声を上げた。

夜乃宮さんは裸エプロンがなんなのか知らないようだ。

夜乃宮さんはそのままいて欲しい。

しかし――。

「あのありすが高梨さんを追いかけるなんて……」

ありすは俺の裸エプロン姿を誰にも見せず、自分だけで独占しようとしていた。

今までのありすだったら、俺の裸エプロン姿を見ようとしてキッチンに入って来た
高梨さんを怒ったはずだ。それなのに怒るところか高梨さんを気づかうようなことを
言っていた。

高梨さんも謝っていたから許せた、と言うのもあるかもしれないけど、以前のあ
りすとは明らかに違うと思う。

「ありすちゃん、キャンプに行く前とちょっと違うよね？ 良い意味でね」

まるで俺の心を読んだかのように呟く砂庭さん。

この人、本当に人の心が読めるんじゃないのか。

「でも変わったのはありすちゃんだけじゃないよね」

「そうなのか？」

クスクスと笑いながら呟く砂庭さんに、夜乃宮さんが首を傾げながら声を上げた。

「以前の凜ちゃんなら、あまねちゃんの裸エプロンが見たい、なんて本音は絶対に言わなかったと思うよ」

本音って。俺の裸エプロンを見たいって言うのが本音って、ちょっとどうかと思う。

高梨さんや砂庭さんの裸エプロンなら見たいけど。

ん？ だとするとおかしくもないのか？

いやいや、俺の心が男だってことは誰も知らないわけで、男の俺が美少女の裸エプロン姿を見たいと思うのは普通のことだけど、女の子が女の子の裸エプロン姿を見たいと思うのは.....どうなんだ、普通なのか、普通じゃないのか。

女の子についてあんまり詳しくないからよくわからないな。

でもまあ、ありすは見たがるだろうし、なら普通なのかもしれない。

「裸エプロンってそんなに良いモノなのか？」

そう呟いた夜乃宮さんは、着ているTシャツの裾を両手で掴み、グイッと捲り上げた。

「なら私も裸エプロンをやってみる！」

「わー！ ダメダメダメ！」

とんでもないことを言い出した夜乃宮さんを必死に止めた。

ある意味夜乃宮さんの裸エプロンが一番ヤバいからな。

いや、ここはやはり砂庭さんが一番ヤバいか。

いやいや、見た目がツンデレの高梨さんが一番ヤバいかもしれない。

いやいやいや、裸エプロン自体ヤバいだろ。

女の子になったら修羅場だった件 - 第四十六話 現実逃避のはずが余計に追い詰められてゆく件

百合園さんとイリスさんが来て、ありすが高梨さんを連れ戻し、どうにかお茶会が始まった。

相変わらず茹でダコのように真っ赤になっている高梨さんが、俺から顔をそらしながらチビチビと紅茶を飲んでいる。

「べ、別にそういうんじゃないから！」

何を思ったのか俺を見た高梨さんが声を張り上げ、ふんっと顔をそらした。

わあ、ツンデレ凜ちゃんだ。可愛いなあ。やっぱり高梨さんはツンデレがよく似合うなあ。

「り、凜ちゃん落ち着いて。たぶんお姉ちゃんはまったく気にしてないから。そういう人だから」

高梨さんの隣に座っているありすが、高梨さんの背中を優しく擦りながら声をかけた。

「うう、ありすごめんなさい。出来心だったの……」

震える声で謝った高梨さんは、ありすの肩に顔を埋めてプルプルと震えている。

「大丈夫、わかってる。見たくて当然なんだよ。私だって見たいし。それに凜ちゃんなら見る以上のことはしないってわかってるから。どっかのバカと違って信じてるもん……」

高梨さんを優しく抱き締め、優しい声で語りかけるありす。

そんな二人を見てクスクスと笑っている砂庭さんと、不思議そうに首を傾げている夜乃宮さん。

なんだか感動的な感じになっているけど、俺の裸エプロンが原因っていう.....。

「どっかのバカって誰ですか？」

それまで黙って話を聞いていた百合園さんが声を上げた。

「お前だバカ」

ジト目になったありすは、高梨さんを抱き締めつつ、百合園さんを冷たくあしらった。

ありすに冷たくあしらわれ、プクッと頬を膨らませる百合園さん。

まあ、うん。百合園さんの前で裸エプロン姿になるのは確かに危ないな。

何をされるかわかったもんじゃない。



高梨さんもだいぶ落ち着き、いつもの如くありすと百合園さんが口論をしたり頬を掴り合ったり。

そんな二人を見て笑い合いながらみんなとお喋りをして、お菓子を食べたり紅茶を飲んだり。

みんなお菓子も紅茶も美味しいって言ってきて、お兄ちゃん満足だ。

とそこでトイレに行きたくなって席を立った。

リビングから出て廊下を歩き、トイレの扉を開けようとしたら、背後に何か気配を感じて振り返った。そして視界に映った人物に思わずビクッと震えてしまった。

「お姉ちゃん、裸エプロンってなんですか？」

血のように赤い神秘的な瞳で俺を見つめ、微笑みを浮かべて問いかけてきた

イリスさんは、ゆっくりと俺に詰め寄って来る。

後ろに下がろうとしたけど、トイレの扉に背中が当たってしまった。

ヤバ、逃げ場が——。

「お姉ちゃんが見たいって言うのなら、私、喜んで裸エプロンになりますよ？ 見ますか？」

さらに詰め寄って来たイリスさんが、俺の耳元に顔を寄せ、そう囁いてクスッと笑った。

イリスさんの裸エプロン！ 見たい！ ぜひとも見たい！ でも見たらヤバいことになりそうで正直怖い！

「冗談です」

そう言って俺の耳元から顔を離れたイリスさんは、ムツとしたように俺を睨んだ。

「みんなに裸エプロン姿を見せたんですよ？ ありすさんほど大切にしなくてもいいって言いましたけど、ちゃんと私も可愛がって欲しいです」

ムツとしたまま上目使いで俺を見ながら声を上げるイリスさん。

いや、裸エプロン姿なんて見せてないですよ。ただの勘違いですって。

それはともかく、可愛がって欲しいって言われても、年上の女性をどう可愛がれって言うんですか。

ていうか、イリスさんってもっと弱々しい感じじゃなかったか？ なんだか妙に強気になったような気がするんだけど。

「裸エプロンの件は忘れてあげます。かわりに今度デートしてください。約束ですよ？」

「え？ あ、はい」

上目使いのまま問いかけられ、頷くしかなかった。

「じゃあ、イリスを抱き締めてください。今回はそれで許してあげます」

そう言ってイリスさんは俺に倒れ込むように全てを預けてきた。

とっさにイリスさんを抱き留め、次いで心臓が破裂しそうなほどに鼓動を刻み、息が苦しくなった。

大人びた甘い香りと繊細で柔らかな感触。

「お姉ちゃん困ってますよね？ わかっています。わかっている、お姉ちゃんを困らせたいんです」

俺に全てを預けたまま、俺の耳元で囁くイリスさん。

わかっている困らせたいとか……。

この人、やっぱり百合園さんよりタチが悪い。



みんながリビングのソファに座って俺に注目している。

俺はというと、右手にエプロンを持って立っている。

百合園さんが裸エプロンの話を聞き、見てない人は不公平だとか言い出したのだ。

裸エプロンじゃなくて服の上からエプロンを着けて、中の服が隠れたせいで裸エプロンのように見えただけ、と説明したら、それを見たいと言い出した。

さらに、中に服を着ているなら見せても恥ずかしくないですよ？ と言われ、断れない状況になってしまった。

ま、まあ、別にいいけど、でもみんなから注目されると恥ずかしいんですけど。

そんなことを思って溜息を漏らしつつ、エプロンを着けた。

「ほ、本当です！ 裸にエプロンを着けてるみたいです！ たまりません！」

頬を染めて声を張り上げる百合園さん。

なんで興奮しているんだお前は。お前の方があらゆる意味で可愛いだろ。

「そそるねえ」

頬に手を当てて呟く砂庭さん。

そそるってなんですか。そそるのはあなただ。

「あ、あまねの……エッチ」

顔を両手で覆い、でも指の隙間から俺を見ている高梨さんが震える声を上げた。

高梨さんには後でちょっと言いたいことがあります。

「はい終わり！ 終了！ これ以上はダメだよ！」

燃えるように真っ赤な顔で声を張り上げたありますが、俺に駆け寄ると無理やりエプロンを剥ぎ取った。

ありますが止めてくれて助かった。羞恥地獄がいつまで続くのかと思って泣きそうになっていたんだ。

「なら次は私が裸エプロンになるか！」

そう言って立ち上がった夜乃宮さんが、着ているTシャツの裾を両手で掴み、グイッと捲り上げた。

「ダメダメダメ！ ダメだってばあ！」

焦って夜乃宮さんに駆け寄り、夜乃宮さんを止めた。

しっかり者の夜乃宮さんだけど、こう言うことはまるでわかっていないから危険だ。

それはそうと、特に何も言わずに澄ました顔で紅茶を飲んでいるイリスさんが不気味すぎる。

ていうか、裸エプロンを見ていないかわりにデートをするって話だったけど、今見ましたよね？

まさか、だからこっちを見ていないんですか？ 見ていないからデートする、みたいな？

父さんの実家に行くのだけでも気が重かったのに、イリスさんとデートだなんて。

現実逃避のためのお茶会だったのに、なんだか余計に追い詰められてしまったような気がする。

女の子になったら修羅場だった件 - 第四十七話 黄色いアヒルに弱い件

「ついたー！」

駅に降り立ったありすが声を張り上げ、次いで両手を組んで上へと伸ばし、うーんと背伸びをした。

「お疲れさま」

ありすの頭を撫でながらそう声をかける。

「もう、私の面倒を見てるお姉ちゃんの方がお疲れでしょ？」

そう俺に返したありすは、ムギョツと俺に抱き着いてきた。

いや、割と真面目に疲れていないけどな。新幹線に乗っていたのは一時間ちょっとだし、ありすはお利口だったし。

「ねえ、今お姉ちゃんって言ったよ。似てないけど姉妹なのかな？ 義理の姉妹とか？」

「あの妹ちゃん、新幹線の中でも見かけたけど、お姉ちゃんが大好きみたいで超可愛かった」

「落ち着いた姉と美少女な妹ってなんか良いよね」

俺達とは別の車両に乗っていたらしい女の子のグループが、俺達を見て黄色い声を上げている。

ああいう女の子だけのグループは安全だからいいんだよ。たまに声をかけてきたりするけど、だからって問題が起きることもない。

問題なのは男だけのグループだ。しかも夏休みだからな。チャライのが多い。でもだからこそわかりやすいから対処しやすくてある意味助かる。

あの男だけのグループは声をかけてきそうだな、と思ったら近寄らないようにできるし、付いて来そうだな、と思ったら人気の無い所に行かないようにできるし。

それでも声をかけてくるヤツはいるけど、新幹線の中は静かで、騒ぎが起きると目立つからか、どの男もすんなり引いてくれた。

てなことで、新幹線で一時間と少し。ありすと二人で父さんと母さんの地元に来て来た。

ちなみに父さんは急な仕事で来るのが遅くなるらしい。母さんも父さんと一緒に来ることになった。

俺達は新幹線のチケットを取っちゃったし、せっかくだから先に行って楽しんでいなさい、と母さんから言われた。

母さんが言った“楽しむ”の意味。

父さんと母さんの実家にはそれぞれ子供がいる。

父さんの実家の子供は兄妹。お兄ちゃんかなでの奏くんは俺より三歳年上で大学一年生。妹の伊織ちゃんいおりは俺やありすと同年。

母さんの実家は姉妹。お姉ちゃんみずきの瑞希ちゃんは中学三年生で、妹の瑞穂ちゃんみずほは小学六年だったと思う。

俺が男だった頃、同性である奏くんは、ぼっちだった俺の唯一の友人と呼べる人だった。

父さんの実家の跡取りだから、さすがの暴君ありすも下手なことはできなかったようで、俺が奏くんと遊んでいても文句を言ってこなかった。

まあ、年に一回会うだけだったし、黙認してくれていたんだと思う。

それと奏くんはありすをチャホヤしない珍しいタイプの人でもある。

平凡な俺とは違い、奏くんは父さんの家系の良質な遺伝子を受け継いだようで、かなりのイケメンだ。

本人の口から一度も聞いたことはないけど、相当モテると思う。

要するに奏くんはありす側の人だ。

だからありすを必要以上にチャホヤせず、普通に接してくれたのかもしれない。

ありすが黙認してくれていたのは、その辺りにも理由があったのかもな。

そんな奏くんは俺の唯一の友人であると同時に、優しくてカッコいいお兄ちゃんでもあった。

奏くんと遊ぶのは本当に楽しくて、毎年お盆が楽しみだったなあ。

今年はラブコメ野郎の父さんの思い出話を聞きたくなくて憂鬱だったけど、遅れて来るから気分爽快だ。

そして今回、今年の春に車を買った奏くんが、俺達をドライブに連れて行ってくれることになっている。

ちなみに妹の伊織ちゃんも同行予定だ。

母さんの実家の子供である瑞希ちゃんと瑞穂ちゃんも同行したがっていらしいけど、お姉ちゃんの瑞希ちゃんは現在中学三年で受験勉強の真っ最中だから、残念ながら今回は同行できないとのことだった。

妹の瑞穂ちゃんは受験とは関係無いけど、お姉ちゃんに気を使ったんだと思う。

あの姉妹は本当に仲が良いからな。

夜に少しだけ顔を出すって言っていたようだ。

それはそうと、唯一の友人である奏くんに会えるのは嬉しいけど、今の俺は女だ。男だった頃とは関係性が異なっている可能性が高く、そこが気がかりだ。



エスカレーターに乗り、改札口を抜けると女の子が駆け寄って来た。

「あまねちゃん！」

声を上げて両手を振りながら走るその女の子は、黒髪黒目で普通に可愛い。

そう、普通。父さんの家系特有の平凡さ。

伊織ちゃんだ。

ある意味今の俺と似ているかもしれない。

いや、俺よりは可愛いかな。

「あまねちゃん久しぶり！」

俺の前で立ち止まった伊織ちゃんは、息を荒らげながら挨拶をすると笑みを浮かべた。

やはり普通に可愛い。

「伊織ちゃん、お久しぶり」

笑みを浮かべて伊織ちゃんに挨拶を返した。

ペシッと微かに響く音。

俺の背後からニュツと伸びた手が、伊織ちゃんの腕をペシペシと叩いている。

まるで物陰に隠れた猫が隠れたまま猫パンチを繰り返しているようだ。

「えいえい！」

俺の背後から繰り返される猫パンチに対抗し、伊織ちゃんも猫パンチで応戦する。

「久しぶり、ありすちゃん」

猫パンチの応酬のあと、にっこりと笑った伊織ちゃんがありすに挨拶をした。

伊織ちゃんがお兄ちゃんと呼ぶ人物は一人しかいない。

奏くんだ。

楽しみと不安が入り混じる中、伊織ちゃんが見ている方に視線を向けた。

「伊織、お前も高校二年生なんだから落ち着きなさい。そんなんじゃあいつまで経ってもあまねのようにはなれないぞ」

静かに、でもよく通る声。

こっちに向かって歩いてくる長身の美男子。

一年前よりまた少し背が高くなったようだ。

伊織ちゃんの横で立ち止まった奏くんは、伊織ちゃんの頭をポンポンと軽く叩き、俺を見てにっこりと笑った。

父さんによく似た穏やかな雰囲気と、父さんの家系だとすぐにわかる造形。だけど父さんの家系特有の平凡さが無い。

まるで父さんの家系の良い所だけを集めたようなイケメンである。

「やあ、あまね。一年見ない間にまた一段と綺麗になったね。まさか彼氏ができたなんて言わないだろうね。お兄ちゃんにだって心の準備ってものが要だからね」

にっこりと笑ったままそう言った奏くんは、ハッとすると顔を青ざめさせた。

「ま、まさかもう彼氏がいるとか言うんじゃないだろうな！ お兄ちゃん後出しジャンケンが好きじゃないぞ！」

青ざめた顔でワナワナと震えながら声を上げる奏くんは、ジト目の伊織ちゃんがゲシツと蹴りを入れた。

このとぼけた感じ。以前の奏くんのままだ。

彼氏がどうのと言うのは奏くんなりのジョークのようなものだろう。

「ああ、あまね、これをあげよう。黄色いアヒルさんだよ」

伊織ちゃんからゲシゲシと足を蹴られているのに全く気にしていない様子の奏くんが、手に持っていた紙袋から黄色いアヒルのぬいぐるみを取り出し、俺に差し出した。

「ふああああ」

アヒルだ。しかも黄色い。最高じゃないか。

震える手でアヒルのぬいぐるみを受け取った俺は、そのぬいぐるみをギュウツと両手で抱き締めた。

抱き心地も良い。完璧だ。このアヒル、完璧だ。

「あまね、嬉しいかい？ ならお兄ちゃんと約束だ。彼氏ができそうになったらちゃんと言うんだぞ。できてから言うんじゃないで、できそうになったら言うんだ。お兄ちゃんが会って見極めてあげるから」

聞こえる奏くんの声。抱き締めているアヒルがたまらなくてよくわからないけど、とりあえずコクコクと頷いた。

「良い子だ、良い子だあまね。そんな良い子なあまねにはアヒルさんをもう一つあげよう」

アヒルをもう一つ。その言葉を聞いて顔を上げると、目の前に黄色いアヒルがいた。

「やあ、あまねちゃん。僕はあまねちゃんに会うためにアヒルの国からやって来たアヒルさんグワ。僕のこと可愛がってグワグワ」

「ふあああああああああああ！」

ダミ声で喋る黄色いアヒルのあまりの愛らしさに、サッとアヒルを掴んだ俺は、二羽のアヒルを一緒に抱き締めた。

一羽でもたまらなかったのに、二羽をいっぺんに抱き締めるこの満足感。

「あ、ありすちゃん！ うちのバカ兄貴があまねちゃんを落としにかかっている！ やっつけないと！」

「う、うん！」

聞こえた声にハッとして顔を上げると、いつの間にか俺の背後から出ていたありますが、伊織ちゃんと一緒に奏くんを叩いたり蹴ったりしている。

「おお、ありす、去年より可愛くなったな。さすがあまねの妹だ。そんなお前には飴をあげよう。さっきそこで買った飴だ」

殴られたり蹴られたりしているのに全く気にしていない様子の奏くんは、ポケットに手を突っ込むと飴を取り出した。

「なんでお姉ちゃんには凄く高そうなアヒルのぬいぐるみを二つもあげたのに、私には飴一つなのよ！」

「なんでって、お子様は甘い物が好きだろう？」

怒りの叫びを上げるありすと、笑いながら返す奏くん。

「だ、誰がお子様だ！ 相変わらずムカツク！」

真っ赤になって怒りの叫びを上げたありますが、ビシビシと連続で猫パンチを繰り出した。

ああ、なるほど、そう言うことか。

「ありす、どうして奏くんがアヒルを二つくれたのか、わからない？」

そうありすに問いかけると、ハッとしたありますが俺を見た。

奏くんがくれた二羽のアヒル。そして俺達は双子。

一羽はありすの分ってことだ。

「はい、ありす」

そう言ってアヒルを一羽ありすに差し出した。

カーッと真っ赤になったありすは、キッと奏くんを睨み、フンツと顔をそらした。そして俺が差し出しているアヒルに手を伸ばした。

ありすの手がアヒルに届きそうになった瞬間、ヒョイツとアヒルが持ち上げられた。

見ると奏くんがアヒルを掴んでいた。

「違う。このアヒルはどっちもあまねのアヒルです。ありすは飴で十分だ。普段あまねを独占しているんだから、飴で十分なんだ」

ムツとしたような顔でそんなことを言った奏くんは、掴んでいるアヒルを俺の頭にポムツと置いた。

真っ赤な顔でブルブルと震えるありす。

「伊織ちゃん！ コイツブツ殺していい！？」

「ありすちゃん！ 力を貸すよ！」

お互いに声をかけ合ったありすと伊織ちゃんが、奏くんを殴ったり蹴ったりしている。

でも百八十センチをゆうに超える奏くんには全く効いていないようだ。

「グワグワ」

真顔でダミ声を上げる奏くん。次いで――。

「ふあああああああああああああ！」

奏くんが持っている紙袋の中から三羽目のアヒルが現れた。

「あまねちゃん、おいでおいで、黄色いアヒルさんグッズをたくさん揃えている雑貨屋さんを知っているんだ」

「黄色いアヒルさんグッズ！？」

「マグカップとかキーホルダーとかストラップとかもあったよ」

「ほ、欲しい！」

「じゃあ、おいでおいで、こっちにおいで」

「行く！」

俺にアヒルのぬいぐるみを見せながらダミ声で話す奏くんが歩き出し、その奏くんを追いかけて歩き出した。

「マズい！ お姉ちゃんがさらわれる！」

「ほんとゴメン！ うちのバカ兄貴がバカでほんとゴメン！」

奏くんは攻撃を続けながら会話を交わすありすと伊織ちゃん。

「グワグワ、あまねちゃん、こっちグワよ」

ありすと伊織ちゃんから攻撃を受け続けているのに、全く気にせずダミ声を上げる奏くん。

黄色いアヒルのマグカップ。

そんな素敵なマグカップでコーヒーを飲んだら、どんなに心が安らぐだろう。

二羽のアヒルのぬいぐるみを抱き締めている俺は、先に行く三羽目を追いかけた。

女の子になったら修羅場だった件 - 第四十八話 いらぬ物はいらぬ件

今年の春に買ったらしい車を運転する奏くん。

奏くんの車は落ち着きのある銀色の普通の乗用車だった。

車内はシンプルで落ち着きのある感じなんだけど――。

『グワッ、グワッ、グワッ、グワッ』

左折するために奏くんがウィンカーを上げたら、ウィンカーの点滅に合わせてアヒルが鳴いている。

「こざかしい！」

こめかみに血管を浮き上がらせて怒声を上げるありす。そしてあははと乾いた笑い声を上げる伊織ちゃん。

ありすが怒るから黙っておくけど、ウィンカーを上げるとアヒルが鳴くとか、とてもいいと思う。

それと、奏くんは俺に助手席に乗るように言ったんだけど、ありすが許さなかったため、伊織ちゃんとありすと俺と三人で後部座席に座っている。

『グワッ、グワッ、グワッ、グワッ』

奏くんがウィンカーを上げ、またもやアヒルが鳴き始めた。

可愛い。

「何日か前から車を弄ってたけど、まさかこんな小細工を施していたなんて……」

ジト目で呟く伊織ちゃん。

奏くん、俺のためにわざわざウインターの音をアヒルの鳴き声にしてくれたのか。

子供の頃、奏くんは色んな物を作って俺を待っていてくれた。

竹とんぼとか竹馬とか。

他にも木を削って作った剣とか、ベニヤ板を使って作った盾とか。

俺が女になったことで関係性が変わっているかもしれない、と思って不安だったけど、奏くんは奏くんのままのようであんまり安心した。

「ムカつくけど、お姉ちゃんが明らかに喜んでるから怒るに怒れない。それがまたムカつく」

不機嫌そうに唇を尖らせてブツブツと呟いているありす。

俺が喜んでるから怒るに怒れない、か。

「ありすは良い子だね」

そう言ってありすの頭を撫でると、一瞬にして真っ赤になったありすがチラッと横目で俺を見た。

へらっと笑ったありすは、コテンと俺の肩に頭を預け、スリスリと頬擦りをしている。

今の今まで不機嫌だったのに、頭を撫でただけでご機嫌になってしまった。

「ねえありすちゃん、うちのお兄ちゃんとあまねちゃんを取り替えっこしない？」

「ヤダ」

伊織ちゃんの呟きにありすが即答し、うう、と呻きを上げる伊織ちゃん。

何を言っているんだか。奏くんほど良いお兄ちゃんなんて滅多にいないのに。

まあ、あれだな。伊織ちゃんも本当は奏くんのことが大好きだけど、思春期だから素直になれないのだろう。

うんうん、よくあるよくある。



『グワッ、グワッ、グワッ、グワッ』

アヒルが鳴いて車が曲がる。

「アヒルが鳴くとお姉ちゃんの頬がポッと色付くのが気に喰わない」

そしてアヒルが鳴くたびに愚痴をこぼすあります。

でも頭を撫でるとへらっと笑う。それがまた可愛い。

「お兄ちゃんとあまねちゃんを取り替えっこするのがダメなら、私とありすちゃんを取り替えっこするのはどうだろうか」

「却下」

伊織ちゃんの眩きにありすが即答し、うう、と呻きを上げる伊織ちゃん。

「着いたぞ」

それまで黙って運転していた奏くんが声を上げ、車が停車した。

「あ！」

窓から外を見て、視界に映った物に思わず声を上げてしまった。

黒地の看板に黄色いアヒルの顔が大きく描かれている。

アヒルのグッズも扱っている雑貨屋さんかと思っていたけど、看板を見るにアヒルグッズの専門店のような。

そんな素敵な店があったなんて。

逸る気持ちを抑えられず、急いでドアを開けようとしたらドアが勝手に開いた。

すでに車から降りた奏くんがドアを開けてくれたのだ。

「ありがとう、奏くん」

お礼を言いながら車から降りる。

「あまね、嬉しそうだね」

にっこり笑ってそう言った奏くんはボタンとドアを閉めた。

「ちょ、閉めるな！ まだ私が降りてない！」

車の中でありすが叫んでいる。その叫びを聞いてハッとした奏くんが車のドアを開けた。

「すまんありす、お前の存在をすっかり忘れていた」

「それワザとよりム力つくんだけど！」

謝る奏くとプンと怒りながら車から降りるありす。

「ぷぷっ」

笑っちゃいけないと思いつつ、我慢できずに嘔き出してしまった。

「お姉ちゃん？」

俺の腕に抱き着いてきたありすが、不思議そうに首を傾げている。

「ありすの存在を忘れるなんて、奏くんくらいしかないよね、って思ったらおかしくて」

必死に笑いをこらえながらそうありすに答えた。

誰からも可愛いと持て囃され、うちの学校の二大美少女の一人としてその名を馳せているありす。

そんなありすを忘れるとか。

「まあ、奏くんと一緒にいると気が楽だけどね。それに何を言っても怒らないし」

俺の腕に抱き着いたまま、耳まで真っ赤にしながら顔をそらしたありすが呟いた。

なんだかんだ言って、ありすも奏くんが好きなんだね。

「わーい！　じゃあ今日からあまねちゃんは私のお姉ちゃんだね！」

車から降りた伊織ちゃんが瞳を輝かせながら声を張り上げ、両手を上げて俺に向かって飛びかかってきた。

「そ、そう言う意味じゃない！　お姉ちゃんはありすだけのお姉ちゃんだなの！」

叫んだありすが俺の前に立ち塞がって両手を広げた。

「なんちゃって！　ありすちゃんを捕獲するための罠なのでした！」

そう言ってありすに抱き着いた伊織ちゃんが、ありすの頬にスリスリと頬擦りをしている。

「ううっ、ハメられた……」

まんまと捕獲されたありすが真っ赤な顔で呻きを漏らした。

さすが伊織ちゃん。なんだかんだで奏くんの妹だな。



「うわあ！」

店内に入り、見渡す限りのアヒルグッズに声を上げずにはいられなかった。

「あ！　アヒルの歯ブラシだ！」

アヒルの歯ブラシを見つけ、駆け寄って手に取った。

今使っているアヒルの歯ブラシは、黄色い柄に白いアヒルが描かれている。でもこれは黄色い柄に濃い黄色でアヒルが描かれている。

これ以上ないと言うほどの完璧さだ。

十本くらい買っておこう。

「ああ！ アヒルのハンカチだ！」

そばにアヒルのハンカチを見つけて手に取った。

このハンカチがあれば手を拭くのも楽しくなる。

「高梨さん達のお土産に買っていこうかな」

値段も手頃だし、みんなでアヒルのハンカチを使うのはきっと楽しい。

あ、でも高梨さんは俺はヒヨコ好きだと思っているんだよな。

「と思ったらヒヨコもある！」

アヒルのハンカチの隣にヒヨコのハンカチを見つけ、急いで手に取った。そしてヒヨコのハンカチを胸に抱えながら店内を見回してみた。

アヒルの歯ブラシに気を取られて気付かなかったけど、この店は黄色いアヒルがメインで、他にヒヨコも扱っているようだ。

姉妹ブランドみたいなものなのかもしれない。

「お姉ちゃんが子供みたいになってる……」

聞こえた声にギクツとした。

そーっと振り返ると、ありすがジト目で俺を見ていた。

「あ、あはは……」

あまりにも嬉しくてつい我を忘れてしまっていた。

「お姉ちゃん」

声を上げたありすは、そばにあった丸いアヒルを手に取り、その丸いアヒルを俺に見せ、ムギムギと掴んだ。

や、柔らかいのか。あの丸くて黄色いアヒルはムギユムギユできるのか。

ふらふらと吸い寄せられるようにありすに近付くと、ムギユッとありすが俺に抱き着いてきた。

「このアヒル買った！」

そして俺の胸に顔を埋めながら声を張り上げた。

ありす、お前、そのムギユムギユなアヒルで俺を釣るつもりなのか。

「あまね、欲しい物はこのカゴに入れるといい」

聞こえた声に視線を向けると、奏くんが俺に向かってカゴを差し出していた。

「ふあああああああああ！」

この店の買い物カゴだろうか。小さ目のそのカゴは黄色く、側面にアヒルの顔が貼ってある。そして取っ手はオレンジ。

なんて可愛くてオシャレなカゴなんだ。そのカゴも欲しい。

そんなことを思いながらカゴを受け取り、えへへと笑った。

「くっ」

奏くんを睨んだありすが悔しそうに声を上げた。

「べー！」

そして奏くんに向かって舌を出し、ふんっと顔をそらす。

どうやらありすは奏くんに対抗意識を燃やしているらしい。

ありすよ、相手は百合園さんほど甘くないよ。なんたってお兄ちゃんのお兄ちゃんだからね。

「時間はたっぷりあるから、ゆっくり見て回るといい」

ありすに挑発されてもまるで気にしていない様子の奏くんが、にっこりと笑いながら声を上げた。

横目でジロツと奏くんを睨んだありすは、ふんつとそっぽを向き、俺の手を引いて歩き出した。

けっこう広い店内には所狭しとアヒルグッズやヒヨコグッズが並んでいて、俺にとってまさに天国だ。自然と顔が笑ってしまう。

ありすと一緒に店内を周り、アヒルグッズやヒヨコグッズをカゴの中に入れてゆく。

「ぬいぐるみだ」

とそこでアヒルのぬいぐるみに目が止まった。

奏くんからもらったぬいぐるみと違う。他にもぬいぐるみがあるけど、どれも奏くんからもらった物と違った。

てっきりここで買ったのかと思ったけど、別の場所を買ったのだろうか。それとも売り切れて無くなっちゃったとか。

歯ブラシやコップやハンカチ、それにマグカップやスプーンやお箸や弁当箱。あとエプロンやTシャツなんかもカゴに入れてしまった。

ついでにありすが持っていたムギユムギユボールもカゴに入れた。

全部欲しいけど、お金がちょっと心配だな。

残念だけどTシャツやエプロンは諦めた方がいいか。

「お金の心配ならしなくていい、なんて言ってもあまねは気にするだろうな。あまねはそういう子だからな」

不意に聞こえた声に視線を向けると、困ったような笑みを浮かべた奏くんが俺を見ていた。

「お兄ちゃんはアルバイトを始めたから財布に余裕があるんだ。どうだろう、年に一度だ。今日くらいはお兄ちゃんに存分に甘えてみないか？ その方がお兄ちゃん

は嬉しいんだが」

その奏くんの言葉に困ってしまった。

俺が欲しい物を全部合わせると、けっこうな金額になる。それを全部支払ってもらうなんて奏くんに悪い。

「あまねちゃん、ちょっとトイレ行こうよ」

ひょこっと現れた伊織ちゃんが、俺の手を取ってそんなことを言った。

「ありすちゃん、ちょっとだけあまねちゃんを貸してもらえる？ お願い」

そしてヒソヒソ声でそうありすに問いかけた。

しばし悩んだありすは、伊織ちゃんを見てコクンと頷いた。

「ありがとう、ありすちゃん」

そう言って片目を閉じた伊織ちゃんは、俺が持っていた買い物カゴをありすに手渡し、俺の手を引いて店内にあるトイレに向かった。

トイレの中に入った伊織ちゃんは、振り返ると俺を見た。

「絶対に言うなって言われてたんだけど、怒られるの覚悟で言うよ」

いつも笑顔の伊織ちゃんが、真顔で俺を見つめながら声を上げる。

「お兄ちゃん、あまねちゃんのこと凄く心配してたんだよ」

「え？」

心配していた？ 俺を？ どうして？

「去年家^{うち}に来た時、あまねちゃん元気無かったでしょ。明るく振る舞ってはいたけど、いつものあまねちゃんじゃなかった」

去年。女版の俺のことか。

そうか、去年は元気が無かったんだな。

きっと悩んでいたんだと思う。

「お兄ちゃん、女の子の悩みには不用意に首を突っ込んじゃいけない、って。でもね、待ってたんだと思うよ。あまねちゃんが相談してくれるのを……」

待っていたと思う。その伊織ちゃんの手が胸に突き刺さった。

「お兄ちゃん、あまねちゃんのことを大好きだから、ずっと心配してたの。でも今年のあまねちゃんはいつも以上に元気で、明るくて、可愛くて、お兄ちゃん本当に安心したと思う」

そっか、奏くんはずっと心配してくれていたんだな。

だからアヒルのぬいぐるみを用意したり、車のウインカーの音をアヒルの鳴き声にしたり、アヒル専門店を探してくれたりしたんだ。

俺が男だろうが女だろうが、奏くんはやっぱり俺のお兄ちゃんなんだなあ。

「だから、だからね、あまねちゃんにお願いがあるの。今年のうちのお兄ちゃんに甘えてあげて。それが一番嬉しいんだから、あの人は」

そう言って拝むように両手を合わせる伊織ちゃん。

『今日くらいはお兄ちゃんに存分に甘えてみないか？ その方がお兄ちゃんは嬉しいんだが』

奏くんの言葉と、そして困ったような笑みが脳裏を過る。

奏くんが悪い。そう思って甘えなかったら、きっと奏くんは悲しむ。

甘えてばかりじゃダメだけど、でも相手の気持ちを素直に受け入れるのも大切なことだ。

それがちゃんとできていれば、暴君ありすの本心にもっと早く気付いてあげられたかもしれない。

「うん」

視界が滲み、指で目元を拭いながら頷いた。

「ありがとう」

そしてお礼を言うと、伊織ちゃんがニカッと笑ってピースをした。

なんだかんだ言って奏くんの思いをしっかりと理解し、奏くんに叱られるのを覚悟で行動に出た伊織ちゃん。

俺に似て平凡そうだけど、やっぱり奏くんの妹なんだなあ。

父さんの家系の中で俺が一番ダメな気がしてくるよ。

「あ、そうそう、あとお兄ちゃんがあげたぬいぐるみ、あれ手作りだから」

「……え？」

なんて？ 今なんて言った？

「半年くらい前から一人でチクチクやってたよ。今回持ってきたヤツは完成品で、失敗したヤツは、女の子はぬいぐるみが好きだろう、とか言っては私に押し付けるものだから、お陰で私の部屋がアヒルのぬいぐるみだらけになっちゃってね。初期作品とかホラーだよ。呪いのぬいぐるみかっての」

ジト目でそう言った伊織ちゃんが溜息交じりに肩をすくめた。

あのぬいぐるみ、手作りだったのか。

あまね
『周、竹とんぼを作ってみただけど、ゲームの方がよかったかな』

そう言って手作りの竹とんぼを俺にくれた奏くん。

『これは竹馬って言って昔の遊び道具なんだ。お兄ちゃんは楽しいと思うんだけど、周も遊んでみないか』

竹馬も作ってくれたなあ。

『剣と盾を作ってみただけど、勇者ごっこをしないか。お兄ちゃんが魔王をやるから、周は勇者をやるといい。よし、いくぞ。ぐあああああ、やられたああああああ』

あ！』

俺よりずっと強いウセに、必ず負けてくれたっけ。

年に一度しか会わなかったけど、奏くんはいつだって俺のお兄ちゃんだった。

「あまねちゃん……」

聞こえた声にハッとした。

気が付くと頬を熱いものが伝っていた。

「奏くんにはお世話になりっぱなしだね」

目元を拭いながらそう呟き、あははと笑った。

声が震えてしまうのが恥ずかしい。

「いいんだよ別に。うちのお兄ちゃんはあまねちゃんのことを大好きなんだから。あまねちゃんから甘えて欲しがってるんだよ」

その伊織ちゃんの手が心に沁みた。

俺は人に甘えるのが苦手だった。イリスさんと同じだ。

頼れる最強のお兄ちゃんがいたのに、俺は全部一人でやろうとした。

男だった頃、ありすのことを奏くんにご相談していれば、ありすは笑顔を失わずに済んだかもしれないなあ。

「お兄ちゃんには甘えておけばいいの。それより問題なのはぬいぐるみの失敗作だよ。捨てるに捨てれないし、どうしろって言うのよ」

ジト目で愚痴りながら溜息を吐いている伊織ちゃんを見て、思わず笑ってしまった。

捨てるに捨てれないんじゃないかと、捨てる気が無いのでは？

「え？ なに？ なんでニヤニヤしてるの？」

「なんでもないよ」

伊織ちゃんに問いかけられ、視線をそらして答えた。

「えー？ なにそれ。気になるなあ？」

訝しむような顔で呟く伊織ちゃん。

伊織ちゃんって実はけっこうブラコンだよな、とか言ったら絶対に怒られるから言わないでおこう。



トイレから出ると奏くんの元へと向かった。

そして――。

奏くんの前に立ち、大きく息を吸い込むと、意を決して奏くんを見上げた。

困ったような笑みを浮かべて首を傾げている奏くん。

「奏くん、今日だけ……奏くんに甘えてもいい？」

そう奏くんに問いかけると、奏くんが目を見開いた。

「ああ、ああもちろんだ。あまね、もちろんだよ。だってお兄ちゃんはおまねのお兄ちゃんなんだから」

そう言って何度も頷いた奏くんは、大きな手で俺の頭を撫でてくれた。

聞こえる舌打ち。

見ると、唇を尖らせているありすが耳まで真っ赤にしてそばを向いていた。

俺が奏くんに甘えたいと言ったのが気に喰わないのだろう。でも何も言っこない。

ありすは女版の俺と誰よりもそばで接してきたからな。

そして女版の俺の変化に気付き、女版の俺の心が離れていると感じ取り、その心を必死に繋ぎ止めようとしていた。

だからありすは何も言わないんだと思う。

俺にも甘える人が必要だって、そう思ってくれているんだと思う。

不服そうではあるけど。

「お兄ちゃんはあるすのことも大好きだぞ。ほら飴をあげよう」

そう言って、奏くんはあるすの頭に飴をちょんと乗せた。

か、奏くん。そんなことをしたらありすが怒るって。

案の定、ビキッとありすのこめかみに血管が浮き上がり、伊織ちゃんがジト目で溜息を漏らした。

そして――。

「お前やっぱりブツ殺す！」

キレたありすが奏くんの腹を目がけて正拳突きを繰り出し、バスッと当たった。

「ほらあまね、いる物もいない物も全部買おう」

ありすの攻撃をものもしない奏くんが、カゴの中に適当に商品を入れてゆく。

あ、いや、奏くん。いない物はいないよ。

女の子になったら修羅場だった件 - 第四十九話 夏の終わりが近づいている件

夕方の四時過ぎに奏くんの家に到着し、おじさんとおばさんに挨拶をすると仏壇にお参りをした。

お墓参りはもう少し涼しくなってから行こう、と言うことで、六時頃に行くことになり、それまで涼しいリビングで待機することになった。

ちなみに父さんと母さんは七時頃に到着するらしい。

ラブコメ野郎の思い出話は聞きたくないから、できるだけ遅くなってくれと助かる。

「あまね、ほら提灯だ」

ふらっといなくなったと思っていた奏くんが、提灯を持ってリビングに戻って来た。

まさかまた手作りか。

「提灯はさすがに買ったみたいだよ」

俺の心を読んだのか伊織ちゃんが声を上げる。

砂庭さんもだけど、俺の心を読むのはやめて欲しい。

「花火もあるぞ」

俺達に提灯を見せていた奏くんが、続いて花火を見せた。

本当に色々と準備してくれていたんだな。

「ありがとう、お兄ちゃん」

笑みを浮かべてお礼を言うと、真顔でピースをする奏くん。

「くっ」

俺の隣に座っているありすが悔しそうに呻きを上げた。

ありすに睨まれている奏くんは、全く気にする様子もなく提灯と花火を床に置いた。そしてリビングから出て行ってしまった。と思ったらすぐに戻って来た。

額に振じり鉢巻きを付け、青いハッピを着ている奏くんは、テーブルの上に機械を置いた。

それは手動式のかき氷機だった。

またもやリビングから出て行った奏くんは、今度は板氷を持ってきた。そしてその氷を機械にセットすると、テーブルの上に色とりどりのシロップを並べ、カランカランと鐘を鳴らした。

「かき氷屋さんです」

キリッと表情を引き締めて声を上げる奏くと、溜息を漏らす伊織ちゃん。

「じゃあまずはお子様のありすからだな。ありすはお子様だからイチゴ味だろう」

そう言っかき氷機のハンドルを回し、シャクシャクと氷を削る奏くん。

真っ赤になったありすがプルプルと震えている。

「私はお子様じゃない！ でもイチゴ味でいい！」

叫びながら奏くんを睨むありす。

お子様ではないけどイチゴ味がいいんだな。

「はいよ、毎度あり」

氷を削り終わり、イチゴシロップをかけた奏くんが、ありすにかき氷を差し出した。

「……あ、ありがと」

奏くんから顔をそらし、唇を尖らせて小声でお礼を言ったありすがかき氷を受け取った。

奏くんに対抗意識を燃やしているありすだけど、ちゃんとお礼を言えたのは偉い。

そう思ってありすの頭を撫でると、へらっと笑ったありすがかき氷を食べ始めた。

嬉しそうにかき氷を食べているありすを見てうんうんと頷いた奏くんは、伊織ちゃんを見た。

「伊織は抹茶金時にバニラアイスをトッピングした伊織スペシャルだな」

その奏くんの言葉にありすの目が点になった。

頬を染めて顔をそらした伊織ちゃんは、指で頬を搔いた。

「ま、まあ……うん」

そして頷いた。

へえ、伊織スペシャルねえ。

伊織ちゃん、いつもお兄ちゃんからかき氷を作ってもらってるんですか？

そんなことを思いつつ、ニヤニヤしながら伊織ちゃんを見たら、チラッと俺を見た伊織ちゃんの顔がカーッと真っ赤になった。そして俯いてモジモジしている。

俺の思いを理解して恥ずかしがっているようだ。

恥ずかしがるってことは凶星ってことだ。

「ちょ、ちょっと待って！ 私もバニラアイス欲しいんだけど！」

目が点になっていたありすが批難の声を上げた。

「はいよ」

ありすが文句を言ってくるのを予想していたのか、奏くんはありすのかき氷の上にバニラアイスに乗せた。

「あは！」

瞳を輝かせて笑みを浮かべるありす。

そんなありすを見てうんうんと頷く奏くん。

ありすよ、完全に遊ばれてるぞ。

伊織ちゃんの伊織スペシャルを作った奏くんは、それを伊織ちゃんに差し出すと俺を見た。

俺はブルーハワイがいいな。

ブルーハワイって夏のお祭りって感じがして好きなんだよね。

何も言わずに氷を削り始めた奏くんは、削り終わると何も言わずにブルーハワイのシロップを手にとった。

女版の俺もブルーハワイが好きだったみたいだな。

「あまねの分だ」

そう言って俺にブルーハワイを差し出す奏くん。

「ありがとう」

お礼を言って受け取ると、その名の通り南海のように青く染まったかき氷をスプーンで掬い、口に運んだ。

口内に広がる冷たさと甘さ。

これぞ夏って感じだ。

「くうっ」

「つつう」

夏の味に浸っていたら、ありすと伊織ちゃんが顔をしかめて呻きを上げた。

二人とも手で額を押さえている。

一気に食べ過ぎて頭が痛くなったようだ。

「よくある」

そんな二人を見て声を上げた奏くんがうんうんと頷いた。

そうだね、よくあるよくある。



日も暮れてだいぶ涼しくなり、お墓参りに行くことにした。

奏くんが用意してくれた提灯を持ち、お寺へと向かう。

みんな涼しくなるのを待っていたのか、大勢の人が歩いている。

浴衣を着ている子供もいて微笑ましい。

そして聞こえるひぐらしゼミの鳴き声。

まだまだ夏真っ盛りだけど、その物悲しい鳴き声を聞くと夏の終わりを感ずる。

お寺に到着すると本堂にお参りをして、そしてお墓に向かった。

伊織ちゃんが持ってきたお供え物をお墓に捧げ、奏くんが墓石に水をかけ、線香に火を点けた。そして目を閉じて手を合わせてお参りをした。

「さて、ご先祖様は誰に付いて行くのかな」

真顔でそんなことを呟いた奏くんが、お墓に立てた蠟燭から提灯の蠟燭へと火を移した。

「お姉ちゃんに付いて行きそう」

「うん、それが一番間違いないもんね」

奏くんから提灯を受け取ったありすと伊織ちゃんが、俺を見ながら会話を交わしている。

いやちょっと怖いんだけど。

そんなことを思いながら奏くんから提灯を受け取った。



奏くんの家に到着し、提灯の火を仏壇の蠟燭に移した。

ご先祖様はちゃんと仏壇に入っただろうか。そのまま俺に付いて来たりしないよね。

いやまあ、父さんの家系だから怖くはないと思うけど。

でもちょっと怖い。

しばらくして父さんと母さんが到着し、宴会が始まった。

ついにラブコメ野郎の思い出話を聞かされる時が来てしまったか。

と思ったけど、軽く挨拶をした後、これから花火をするからと奏くんが言い、俺達を連れ出してくれた。

ほんと助かった。ありがとう奏くん。

庭で花火を始めたらおばさんがスイカを持って来てくれて、ちょうどそこに瑞希ちゃんと瑞穂ちゃんがやって来た。

手を繋いで来た二人。相変わらず仲が良い姉妹だ。

母さんの家系、つまりありすの血統なだけあって、二人ともかなり可愛い。

瑞穂ちゃんはまだ小学生だから幼いけど。

「瑞希ちゃん、受験勉強ははかどってる？」

そう瑞希ちゃんに問いかけると、瑞希ちゃんがジト目になった。

その話題には触れないで、と無言で言っているようだ。

ふふふ、瑞希ちゃんが嫌がりそうな話題にあえて触れたのには理由がある。

夏休みの課題を早々に終わらせてしまった俺は、基本的に暇なのだ。

ということで、高校受験の対策をノートに纏めてきたのだ。

ありすに勉強を教えるために、様々な纏めを作ってきた俺は、こう言うことが得意なのである。

「よかったらこれ使って」

そう言って、家から持って来た紙袋を瑞希ちゃんに渡した。

紙袋からノートを取り出し、ペラペラとページを捲った瑞希ちゃんは――。

「なにこれ凄い！ 参考書よりぜんぜんわかりやすいんだけど！ しかも全教科分あるし！」

ワナワナと震えながら声を張り上げた。

どうやら気に入ってもらえたみたいだ。

「あまねちゃんありがとう！ 受験が上手くいったらお礼に私達を遊びに連れてってね！」

「え？ あ、うん」

お礼に遊びに連れて行って？ あれ？ それなんかおかしくない？

「瑞穂！ このあまねノートがあれば、お姉ちゃんはきっとイケる！」

「がんばれ」

「うん！ お姉ちゃん頑張るね！」

「ふぁいと」

「合格したらあまねちゃんから遊びに連れて行ってもらおうね！」

「うん」

やたらとテンションが高い瑞希ちゃんと、幼い見た目の割に落ち着いている瑞穂ちゃん。

瑞穂ちゃんは感情の起伏があまり無いように見えるけど、お姉ちゃん思いのとっても優しい子だ。

夜乃宮さんと気が合うかもしれないな。

その後、一瞬でいいから夏を満喫したいと言った瑞希ちゃんが、瑞穂ちゃんと一緒に急いでスイカを食べて急いで花火を楽しみ、勉強してくると言って帰ってしまった。

合格したら遊びに連れて行ってね、という捨て台詞を残して。

俺が遊びに連れてゆくのは決定なんですか。



去年までは男だったけど、今年は女。でも奏くんも伊織ちゃんも変わってなくて、それが嬉しくて心強い。

何か問題が起きたら、今度こそ奏くんに相談しよう。

俺に抱き着いてスヤスヤと寝息を立てているありすの頭を撫でながら、そう自分に言い聞かせた俺は目を閉じた。

チリンと風鈴が鳴り、ひんやりとした風が室内に吹き込んできて心地良い。

日中はまだまだ暑いけど、夏の終わりが近づいているのを感じる。

こうして一年振りの、いや、女になって初めてのお盆も終わりを迎えた。

女の子になったら修羅場だった件 - 第五十話 男と交際なんてするわけがない件

父さんの実家から帰って来た翌日、みんなにお土産を渡そうと思って連絡をした。

高梨さんと砂庭さんはすぐにでも俺の家に来れるとのことだったけど、夜乃宮さんはお父さんの実家に帰省中で、百合園姉妹は日本にいなかった。

夜乃宮さんは二日後に帰って来るとのこと。

百合園姉妹はご両親に会うために海外で待ち合わせをしているらしく、三日後に帰る予定だとイリスさんが言っていた。

ご両親は忙しい人達で、世界中を飛び回っているって言っていたけど、会うために海外で待ち合わせってスケールが大き過ぎる。

百合園家って想像以上に凄い家なのかもしれない。

とにかく、三日後にはみんなが揃う。

でも帰って来てすぐに集まるのも大変だ。特に百合園姉妹は時差ボケとかあるかもしれないし。

と言うことで、五日後に俺の家に来ることになった。



「えーと、これは高梨さんで、こっちは砂庭さん。あとイリスさんとアリスちゃん」

リビングのテーブルの上にお土産を並べる。

俺が好きなのはアヒルだけど、高梨さんが勘違いをしているから、みんなにはヒ

ヨコのハンカチを買ってきた。

「あのお店の店長さんはよくわかってる人だったなあ」

店長さんが言っていたのだ。うちのヒヨコは成長してもヒヨコのままですから、って。

ヒヨコの可愛さは最強だ。でも成長すると鶏になってしまう。けどもし成長してもヒヨコのままだったら、ヒヨコが最強だ。

でもやっぱりアヒルも可愛い。

「おねーちゃん！」

リビングの扉が開き、ありすが入って来た。

「えへへ、どう？」

照れたように笑ったありすがその場でクルリと回る。

「可愛い！」

思わず叫んでしまった。

ありすが着ている黒いTシャツには、黄色いアヒルの顔が描かれている。

アヒル専門店で奏くんから買ってもらったTシャツだ。

「おいで！ ありすこっちにおいで！」

立ち上がった俺は、声を張り上げながら両手を広げた。

「このTシャツ買ってもらってよかったー！」

叫びながら駆け出したありすが、そのままボフンと俺に抱き着いてきた。そんなありすをギュッと強く抱き締めた。

アヒルのTシャツを着ているありすが可愛すぎる。

「幸せえ」

「幸せだねえ」

「うん、幸せだよお」

「幸せだよねえ」

「奏くんありがとお」

「奏くんに感謝しないとねえ」

俺に抱き着きながら呟くありすと、そのありすに答える俺。

奏くんと一緒にいた時は対抗意識を燃やしていたありすだけど、帰って来てからは奏くんに感謝しているようなことをよく言っている。

まったく、このツンデレめ。

とそこでインターホンが鳴った。

高梨さん達が来たようだ。

「私が行ってくる！」

そう言って俺から離れたありすが玄関に向かって駆けて行った。

はあ、アヒルのTシャツを着たありすは最強すぎる。



リビングに入って来るありす。続いて高梨さんが入って来た。

「あ、あまねだ、本物のあまねだ……」

俺を見るなり瞳をうるうるさせて呟く高梨さん。

本物って、え？ 偽物でもいたの？

「凜ちゃん、久しぶりにあまねちゃんに会って感動してるんだよお」

リビングに入って来た砂庭さんが、にこにこ笑いながら声を上げた。

ああ、偽物がいたんじゃないのか。

「おーっす！」

続いてリビングに入って来た夜乃宮さんが、夜乃宮さんらしく元気に挨拶をした。

「ええ！？」

思わず声を上げてしまった。

色白のはずの夜乃宮さんが、こんがりと褐色に日焼けしていたのだ。

「くうちゃんがギャル化した！？」

なんてことだ。グループの中でももっとも純粹で純真な夜乃宮さんがギャル化してしまうなんて。

これが夏休みの魔力か。

でもギャル化した夜乃宮さんもこれはこれで可愛い。

「くうちゃんのお父さんの実家は港町なんだよ。それで日焼けしたみたい」

「ナマコを握るとビュビュッとなんか出て楽しかった！」

砂庭さんが声を上げ、続いて夜乃宮さんも声を上げる。

ああ、海で遊んでいたから日焼けしたのか。しかもナマコで遊んでいたようだ。

ギャル化したんじゃないかってよかった。

「こんにちは」

挨拶をしながらイリスさんがリビングに入って来た。続いて――。

「あれ？」

続いて入って来るはずの百合園さんが入って来ない。

「アリスちゃんは？」

そうイリスさんに問いかけると、イリスさんが困ったような笑みを浮かべた。

「それが……」

笑ってはいるけど深刻そうな面持ちのイリスさん。

百合園さんの身に何か起きたのか。

「あまねさんに会うのが楽しみすぎて、昨日一睡もできなかったようで……熱を出して寝込んでしまいました」

困り顔で話すイリスさんに思わずジト目になった。

楽しみ過ぎて眠れなくて熱を出した、って遠足の前日の小学生か。

「なので、すみませんが早めに帰ろうと思います」

そう言って、俺に近寄ったイリスさんは、手に持っていた紙袋を俺に差し出した。

「つまらない物ですが、お土産です」

つまらない物。その言葉に嫌な予感がした。

いやいや、妹なら本当につまらない物を持ってきそうだけど、姉は大丈夫だろう。

そう思いながら袋に入っている物を取り出した。

それは黒いTシャツだった。そのTシャツには白い文字で「裸エプロン」とデカデカと書いてある。

外国の人が好きそうな日本語Tシャツ。

だがなぜ裸エプロンを選んだ。

そしてこれをどうしろって言うんだ。

こんな物、着れるわけないだろ。

「軽いジョークです」

一同がジト目になっている中、うふふと笑いながら声を上げるイリスさん。

ああ、この人、やっぱり百合園さんのお姉さんなんだな。

「こっちが本当のお土産です」

そう言ってイリスさんは別の紙袋を俺に差し出した。

警戒しながらその紙袋を受け取った俺は、そーっと中を覗き込んだ。

「チョコレートですよ」

クスクスと笑いながら声を上げたイリスさんは、みんなにも同様の紙袋を渡した。

この中身は本当にチョコレートなんだろうな。

実は日本語Tシャツで、チョコレート、とか書いてあるとか。

それでも裸エプロンよりはマシだな。

熱を出して寝込んでいる百合園さんが心配だからと言うことで、イリスさんは来て早々帰ることになってしまった。

みんなもお土産を用意していたようで、イリスさんにお土産を渡し、俺もヒヨコのハンカチを二枚渡した。

イリスさんはみんなからお土産をもらって大喜びだった。



約束したわけでもないのに、みんなお土産を持って来てくれるなんて。

と言うことで、イリスさんは帰ってしまったけど、みんなでお土産の交換をした。

高梨さんは今住んでいる家が本家らしく、特にどこにも行っていないようだ。でも雑貨屋巡りをして可愛い物を買って、それを持って来てくれた。

ヘアピンとか髪を結うためのヘアゴムとか手鏡とか。

夜乃宮さんはたくさんの貝殻と、あとナマコの酢の物。

貝殻は海で拾ってきたようだけど、ナマコの酢の物って……。

食べるのがちょっと怖い。

そして砂庭さんだけど——。

砂庭さんが持ってきたのはプリンだった。

ただし、ただのプリンじゃない。おっぱいの形をしたプリンだったのだ。

明らかにウケを狙っているけど、突っ込みたくても突っ込めない。

砂庭さんと言ったらおっぱいだよね！ あはは！

とか言えないだろ。

「わあ、ヒヨコだ！ 可愛い！」

俺とありすのお土産として渡したヒヨコのハンカチを見つめ、頬を染めて嬉しそうに声を上げる高梨さん。

「可愛いねえ」

高梨さんの言葉に頷きながら声を上げる砂庭さん。

そして一人ソワソワしている夜乃宮さん。

夜乃宮さんにはハンカチを渡していないのだ。

なぜかと言うと、夜乃宮さんには特別なお土産があるからだ。

夜乃宮さんは昆虫が好きだから、何か昆虫に関係した物はないか探していたんだけど、残念ながら見つからなかった。

ところが、父さんの実家から帰る間際、奏くんが俺にある物を渡してくれた。

それはデフォルメされたオオクワガタのアップリケが付いた帽子と、クワガタやカブトムシを模したピンバッチだった。

奏くんが通っている大学には、小物や装飾品を作るサークルがあるらしい。

それで俺が昆虫関係の物を探していると知り、そのサークルに入っている知り合いにお願いしたようなのだ。

そして出来上がったのが帽子とピンバッチ。

帰り際にそれを渡してくれたんだ。

奏くんには感謝してもしきれない。それと帽子とピンバッチを作ってくれた人にも。

と言うことで――。

「はい、くうちゃんにお土産」

自分だけお土産がもらえなくてソワソワしていた夜乃宮さんに、帽子とピンバッチを渡した。

キョトンとしていた夜乃宮さんは――。

「うわあああああああああ！」

一瞬で真っ赤になり、叫びを上げながら帽子とピンバッチを抱き締めた。

「凄い！ これがあれば、私はプロの昆虫ハンターだ！ ありがとう、あまねとありす！」

泣きそうになって、いや、もうほとんど泣いている夜乃宮さんが俺とありすにお礼を言った。

喜んでもらえて嬉しいけど、その帽子もピンバッチも俺が作った物じゃない。ハンカチだって俺が買った物じゃない。

奏くんからは、自分で買ったって言いなさい、って言われたけど、やっぱり黙っているのは心苦しい。

「実はそれ、親戚のお兄ちゃんの友達が作ってくれたんだ」

そう夜乃宮さんに説明した。

「あとハンカチもね、その親戚のお兄ちゃんが買ってくれたんだ」

続けて高梨さんと砂庭さんに説明した。

「親戚の……“お兄ちゃん”」

ピクンと震えた高梨さんが声を上げた。

「奏くんって言うんだけど、とっても優しくて頼りになるお兄ちゃんなんだ」

そう説明すると、なぜか高梨さんの顔が陰しくなり、砂庭さんの頬を汗が伝ってゆく。

あれ？ なんだか高梨さんが怒っているような……？

もしかして何か勘違いをしてるんじゃ？

「凄いお兄ちゃんだな！ 会ってお礼を言いたいぞ！」

帽子とピンバッチを抱き締めている夜乃宮さんが、瞳を輝かせながら声を上げた。

夜乃宮さんは俺の言葉を素直に受け入れてくれたようだ。

問題なのは――。

ジーツと俺を睨んでいる高梨さんと、瞳を揺らして引き攣った笑みを浮かべている砂庭さん。

明らかに勘違いをしている。

「凜ちゃん、心配しなくても奏くんはそう言うんじゃないから」

それまで黙っていたありすが高梨さんに語りかけた。

「ふーん、まあ、ありすがそう言うんなら心配ないと思うけど」

ジト目で呟く高梨さん。

心配ってなんですか。何が心配なんですか。

高梨さんは俺と奏くんの関係を疑っているんだな。

今の俺は一応女だけど、相手は親戚だよ。

「ねえありす、その奏くんって人の写真とかある？」

「あ、いや、それはちょっと……」

高梨さんの問いかけに、ありすが口ごもった。

「見せられないの？」

「見せられなくはないけど、見ない方がいいと思うよ」

高梨さんの問いかけに、顔をそらしたありすが呟いた。

ありす、そういう言い方をすると余計に疑われちゃうだろ。

「写真ならあるよ。スマホの待ち受けにしてるから」

そう言って高梨さんにスマホを差し出した。

「あ、お姉ちゃんダメ——」

ありすが俺からスマホを奪おうとして、でもそれより先に高梨さんが俺のスマホをサッと奪い取った。

ありすは何をそんなに焦っているんだ。

「……ま、待ち受け？」

呟いた高梨さんが俺のスマホの画面を見た。砂庭さんも横から覗き込んでい
る。

奏くんの家で花火をした時、奏くんと伊織ちゃん、それと瑞希ちゃんと瑞穂ちゃ
ん、そして俺とありすの六人で撮った画像を待ち受けにしているのだ。

「……ひっ」

スマホの画面を見つめていた高梨さんが微かに声を上げ、砂庭さんが顔を引
き攣らせた。

「ひゃあああああああああ！ あまねに彼氏ができちゃったあああああああ
あ！」

泣きながら悲鳴を上げる高梨さんと、パタンと倒れる砂庭さん。

「だから見ない方がいいって言ったのに……」

ジト目で呟いたありすが溜息を漏らしている。

「おお、彼氏ができたのか！ おめでとうあまね！ あまねが選んだ男なら何も
心配ないな！」

高梨さんの悲鳴が響く中、俺を祝福する夜乃宮さん。

いやだから親戚なんだってば。

その後、高梨さんは泣きやまないし、砂庭さんは魂が抜けちゃったみたいにな
ってるしで大変だった。

まったく、俺が彼氏なんて作るわけないのに。なんたって心は男ですから。

女の子になったら修羅場だった件 - 第五十二話 過激な服は危ない件

俺は今、みんなとショッピングモールに来ている。

夏休み最後のイベントである夏祭りと花火大会。

せっかくだからみんなで浴衣を買おうという話になったのだ。

しかし凄い人だ。

社会人のお盆休みは終わったと思うけど、今日は休日だからかショッピングモールが大勢の人でごった返している。

「ふんっ」

俺の腕に抱き着いているありすが、真っ赤な顔でプイツと顔をそらす。

「あ、ありすが怒ってる……」

「ちょ、ちょっとやりすぎちゃったかなあ……」

ヒソヒソと会話を交わしながらチラチラとこっちを見ている高梨さんと砂庭さん。

先日ありすを尋問した一件で、ありすのご機嫌が斜めなのだ。

いったいどんな尋問をされたのか。

聞きたいけど怖くて聞けない。

でも二人を見る限り誤解は解けたようで、それはよかった。

「なにかあったのか？」

俺と手を繋いでチョコチョコと歩いている夜乃宮さんが、高梨さんや砂庭さん、それに俺の腕に抱き着いているありすを見ながら不思議そうに呟いた。

カーツとありすの顔が真っ赤になり、ふんっと顔をそらす。そしてギュウツと俺の腕に強く抱き着いた。

「あ、あはは……」

「あ、ありすちゃんを怒らせちゃったみたいで。ごめんねえ」

乾いた笑い声を上げる高梨さんと、ありすに謝る砂庭さん。

怒っているように見えるありすだけど、たぶん恥ずかしがっているだけだから、そのうち機嫌も直ると思う。

それはともかく、オオクワガタのアップリケが付いた黒い帽子を被っている夜乃宮さん。その帽子の横には昆虫を象ったピンバッチが付いている。

それと黒いTシャツにデカデカと書かれた「昆虫」の文字。

どうやらイリスさんはみんなにも日本語Tシャツを配っていたようだ。

イリスさんが買ってきた日本語Tシャツを着こなせるのは夜乃宮さんくらいだな。

そして履いているのは短パン。

とっても愛らしい夜乃宮さんが少年のような格好をしていると、なんだか余計に愛らしく思える。

肌が褐色に日焼けしているものだからなおさらだ。

「浴衣って着たことないです」

黄色いヒヨコの顔が描かれた黒いTシャツを着ている百合園さんが呟いた。

遠足の前日の小学生のように熱を出して寝込んでいた百合園さんだけど、回復したようだ。

そんな百合園さんが来ているTシャツは、アヒル専門店で奏くんから買ってもらったものだ。

俺はあげていない。

と言うことは――。

チラッとありすを見ると、俺から顔をそらして口をへの字にしているありすが、真っ赤な顔でプルプルと震えている。

百合園さんにTシャツをあげたんだ、なんて聞いたらありすは恥ずかしさをごまかすために怒り出してしまおうだろう。

だからそっとしておこう。



大勢の人が行き交っているけど、俺達の周りだけ空間ができています。

みんな百合園姉妹を見るとギョツとして躲してゆくのだ。

百合園さんだけなら「あの銀髪の娘、超可愛い」で済むんだろうけど、姉のイリスさんが一緒にいるとインパクトが凄まじい。

可愛いと注目されるけど、可愛すぎたり綺麗すぎたりすると引いてしまうんだらうな。

そんなわけで、特に問題も起きずに浴衣売り場に到着し、みんなそれぞれ好みの浴衣を探し始めた。

ズラリと並んでいる色とりどりの浴衣。こんなにたくさんあると決めるのも大変だ。

「クワガタの浴衣はないかなあ」

俺と手を繋いでいる夜乃宮さんが、呟きながらキョロキョロと辺りを見回している。

さすがにクワガタの浴衣は無いと思うよ。

「お姉ちゃん、ありすはどんな浴衣が似合うと思う？」

ご機嫌斜めだったありすだけど、だいぶ機嫌が直ったようだ。恥ずかしそうにモジモジしながら上目使いで問いかけてきた。

「ありすはこれなんか似合うんじゃないかな」

そう言って浴衣を一つ手に取った。

それはピンクの生地に赤い金魚が描かれた浴衣。

ありすはピンクがよく似合うからな。それに金魚が夏祭りらしくて凄くいい。

「し、試着してみる！」

声を張り上げて俺から浴衣を受け取ったありすは、試着室に向かって駆けて行った。

「くうちゃんはこれなんかどう？」

浴衣を手に取り、それを夜乃宮さんに見せた。

色とりどりの朝顔が描かれた黄色い浴衣。

元気な夜乃宮さんにピッタリだと思う。

「着てみる！ 選んでくれてありがとう、あまね！」

俺にお礼を言いながら浴衣を受け取った夜乃宮さんが、ありすに続いて試着室へと駆けて行った。

俺は……紺色の無難なヤツがいいな。

と言うことで、なるべく地味な浴衣を探し、見つけると手に取って試着室に向かった。



「ねえちょっとあれ見て！」

「銀髪の姉妹！？」

「か、可愛い！」

「綺麗！」

試着室の前はちょっとした騒ぎになっていた。

原因は――。

「あまねさん！ これどうですか！？」

青い浴衣を着た百合園さんが、カランコロンと下駄を鳴らしながら駆け寄って来た。

似合っている。とてもよく似合っている。

けど――。

俺の前で立ち止まり、その場でクルンと回る百合園さん。

その百合園さんが着ている青い浴衣は、丈が異常に短かった。

ミニスカートバージョンの浴衣だ。

「ど、どうだろう……」

似合っているけど、似合っているなんて言ったら確実にそれを買うだろう。

夏祭りでミニスカ浴衣を着て歩き回るのはちょっと不安だ。

「今はこう言うのが流行りなんですね」

聞こえた声に視線を向け――。

「ぶっ」

思わず嘔き出してしまった。

色っぽい薄紫の浴衣を着ているイリスさん。その浴衣の丈が百合園さんと同様に異常に短かった。

百合園さんでもかなりヤバいと思ったけど、イリスさんはもっとヤバい。

「お姉ちゃんは流行に後れてますからね」

そう言って得意気にふふんと鼻を鳴らす百合園さん。

「うん、そうだね。お姉ちゃんに流行の最先端を教えてくれてありがとう、アリスちゃん」

にっこりと笑って百合園さんにお礼を言うイリスさん。

いやいや、流行の最先端っていうか、そう言うのはギャルしか着ないと思う。

「ゆ、浴衣は普通のヤツの方が可愛いと思うよ」

その俺の言葉に百合園さんがしゅんとしてしまった。

せっかく気に入っているのに可哀想だけど、露出の激しい過激な服は危ないからな。

「あ、あまね、どうかな？」

聞こえた声に視線を向けると、黒い浴衣を着た高梨さんがモジモジしながら上目使いで俺を見ていた。

「可愛い」

つい本音が漏れてしまった。

黒髪黒目の高梨さんは黒がよく似合う。

「こ、これにする！」

ボンッと真っ赤になった高梨さんが声を張り上げた。

「この辺りが無難かな……」

試着室から出て来て呟く砂庭さん。

着ているのはオーソドックスな白い浴衣。

涼しげで清楚な雰囲気がとてもいい。だけど帯で腰を締め付けているせいで、大きな胸がさらに強調され、清楚な雰囲気を破壊してしまっている。

その後、ありすと夜乃宮さんも試着して、みんなで浴衣を買うことにした。

百合園姉妹は普通の浴衣を選び直したようだけど、ミニスカ浴衣も買っていた。

あれを買ってどうする気なのか。

とにもかくにも浴衣を買い終え、夏祭りに向けての準備が整った。

みんな凄く楽しみにしているようだし、俺も楽しみだ。

女の子になったら修羅場だった件 - 第五十三話 夏祭りが始まる件

待ちに待った夏祭りとお花火大会の日がやって来た。

俺はお祭りに行ったことがほとんど無い。

ありすが家から出たがらなくなる前に、両親とありすと四人で何度か行ったことはある。

でも幼稚園頃の話だ。

小学生になってからお祭りに行った記憶は無い。

お祭りだけでなく、海も山も。

どこにも行きたがらなかったありすだけど、庭にビニールプールを出して泳いだり、家の中で浴衣を着たりしていた。

ありすも海や山やお祭りに行きたかったんだらうか。

無理にでも連れ出すべきだったんだらうか。

そんなことを思いながらありすの浴衣の帯を締める。

「よし、できた」

帯をしっかりと締め、そう声を上げた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

その場でクルリと回り、俺を見てにっこりと笑いながらお礼を言うありす。

普段は素直に降ろしている金色の髪を結い上げているありすは、赤い金魚が描かれたピンクの浴衣を着ている。

「ありす、可愛いよ」

にっこりと笑いながらそう言うと、ポツと頬を染めたありすが上目使いで俺を見て、恥じらうようにはにかんだ笑みを浮かべた。

「ありすはお祭りが楽しみ？」

「うん！」

恥じらっていたありすだけど、俺の問いかけに満面の笑みを浮かべて頷いた。

「あ、でも、お祭りは楽しみだけど、それはお姉ちゃんが一緒だからだよ？」

頬を染めたありすが、上目使いで俺を見ながら甘えるような声を上げる。

俺が一緒だから、か。

「お姉ちゃんが一緒だったら、ありすはずっと家の中にもいても楽しい？」

そう問いかけるとありすがキョトンとした。

そして――。

「うん、楽しいよ！」

満面の笑みを浮かべたありすが大きく頷いた。

ありすにそう言ってもらえると心が救われる。

家から出ず、家の中で水着を着たり、浴衣を着たりしていたありすだけど、それなりに楽しかったのかな。

でもやっぱり、俺が連れ出してあげるべきだったんだろうな。



自分で浴衣を着た俺は、手ぐしで適当に髪を整え、ありすから怒られた。

「もう、お姉ちゃんは本当に自分のことは適当なんだから！」

ポンポンと怒りながら俺の髪にブラシを通すありす。

「ご、ごめん……」

謝りつつ、髪を優しく梳かすブラシの感触に目を閉じた。

「せっかく凜ちゃんから色々もらったんだから使ってみようよ」

「……うん」

心地良さに眠気を覚えつつ、聞こえたありすの声に頷いた。

「はい、できたよ」

まどろみ
微睡の中、肩を叩かれてハッとした俺は、目を開けた。

正面に見える髪を結い上げた女。

……え？

ブラシで髪を梳かしてもらっていたはずなのに、いつの間にか髪が結い上げられていた。しかも前髪が横分けにされていて、可愛いヘアピンで留められている。

「お姉ちゃん、とっても可愛いですよ？」

俺の肩先から顔を出し、鏡に映る俺を見つめるありすが、そう言ってにっこりと笑った。

不覚にも、確かにちょっと可愛いかもしれない、と思ってしまい、カーッと顔が燃えるように熱くなった。

「恥ずかしがるお姉ちゃん、可愛いよ」

そう甘い声で囁いたありすが、俺の頬にチュッとキスをした。

「お、お姉ちゃんをからかってはいけません」

恥ずかしさをこらえつつ、そう言ってありすの頭をコツンと叩いた。

「えへへ」

照れたように笑ったありすがペロツと舌を出した。

自分を可愛いとってしまうなんて、穴があったら入りたい気分だ。



お祭りは街のメイン通りを車両通行止めにしておこなわれる。

文字通りメイン通りがお祭りのメインで、多くの屋台が建ち並び、夕方の六時くらいからお神輿が練り歩く。

当然ながら大勢の人が集まって来て、文字通りお祭り騒ぎだ。

そこから少し離れた場所に神社があるんだけど、そこにも多くの屋台が建ち並び、知る人ぞ知る穴場になっている。しかもその神社は小さな丘の中腹にあるため、花火を見ることもできる。

穴場と言ってもかなりの数の人が集まって来るようだけど、メイン通りよりはだいぶマシだ。

と砂庭さんが教えてくれた。

そんなわけで、メイン通りは大勢の人でごった返しているから、穴場の神社に集まろう、ということになった。

時刻は夕方の五時過ぎ。

待ち合わせの時刻は六時。

メイン通りは歩いて十五分ほど。そこから神社までは十分ほどで着くと思う。

余裕で間に合うだろう。

俺と手を繋ぎ、カランコロンと下駄を鳴らして歩くありす。

風に揺れる金色の前髪と、澄み切った空のような青い瞳。

夕暮れのオレンジ色がそんなありすを優しく照らし、道路を行き交う人達が皆一様にありすに見惚れている。

高梨さんのグループに自然と溶け込んでいるありすだけど、俺と二人だけだとありすが目立ちすぎてしまうな。

百合園姉妹のインパクトがどれだけ凄いのがよくわかる。

そんなことを思いつつ、メイン通りを躲しながら神社に向かって歩くこと三十分ほど。

平坦だった道路が坂道になり、木々が目立ってきた。

さらに五分ほど歩き、赤い鳥居が見えてきた。

待ち合わせ場所の神社だ。

「あまねさんが来ましたよ！」

響き渡る声。

鳥居のそばに立っている銀髪の少女がピョンピョンと飛び跳ねているのが見えた。その隣には同じく銀髪の女性が立っていて、こっちに向かって手を振っている。

待ち合わせの時刻にはまだ余裕があるのに、百合園姉妹はすでに来ていたようだ。

「あまね！」

背後から聞こえた声に振り返ると、黄色い浴衣を着た小さな少女がタカタカと走って来るのが見えた。

浴衣を着ているのにクワガタのアップリケが付いた帽子を被っている夜乃宮さん。

浴衣に帽子はちょっとアンバランスだけど、夜乃宮さんだから何をどうしても愛らしくなってしまう。

その背後には高梨さんと砂庭さんの姿。

二人ともこっちに向かって手を振っている。

六時集合だったのに、予定より早くみんな集まってしまったようだ。

それだけみんな楽しみにしていたんだな。

そんなこんなで、夏休み最後のイベントである夏祭りが始まった。

女の子になったら修羅場だった件 - 第五十四話 食い合わせは考えた方がいい件

赤い鳥居の先に見える長い石段。

鬱蒼と生い茂る木々に挟まれたその石段は、等間隔に設置された灯籠とうろうによって幻想的に照らされている。

そんな石段をみんなで上り始めた。

メイン通りほどではないにしろ、かなりの人が石段を上ってゆく。

花火は河川敷でおこなわれるため、時間になったらメイン通りから河川敷の方に人が移動するだろう。そして神社が花火を見るための穴場だと知っている人はこっちに流れてくると思う。

そうなる前に屋台を見て回り、花火が見える場所を取っておいた方がいいだろうな。

そんなことを考えていたら、石段の先から祭囃子が聞こえてきた。

石段の先、神社の境内で鳴らしているんだろう。

思わず心が浮足立ってしまう。

『お兄ちゃん！ 早く早く！』

忘れかけていた遠い記憶の中に、ありすが石段を駆け上がってゆく姿が見えた。

「お姉ちゃん！ 早く早く！」

俺の手を引いて石段を上るありす。

遠い記憶の中のありすと今のありすが重なり、やっぱりありすはありすなのだと
思った。

「ありすね、リンゴ飴が食べたいの！」

俺の手を引きながら、振り返って満面の笑みを浮かべ、声を張り上げるあり
す。

「わかったからそんなに焦っちゃだめだよ。石段で転ぶと怪我をしちゃうから」

笑みを浮かべながらそうありすに言い聞かせた。

「妹の特権だね……」

「そりゃあ世界でただ一人の双子の妹だもんねえ」

聞こえた声に振り返ると、高梨さんがジト目でこっちを見ていて、砂庭さんがク
スクスと笑っていた。

え？ 何か変ですか？ そんなにベタベタしていないと思うけど。

「うおおおおおおおおおおお！」

声が響き、夜乃宮さんがタカタカと石段を駆け上がってゆく。

「プロの昆虫ハンターはこんな石段などものともしない！」

そう叫んで石段を必死に駆け上がっている夜乃宮さんだけど、駆け上がる速
度があんまり速くないのがまた愛らしい。

「お姉ちゃんはおっとりしてますから、転ばないように注意してください」

「うん、そうだね、お姉ちゃんはおっとりしてるからね。心配してくれてありがとう、ア
リスちゃん」

そして二人並んで石段を上っている百合園姉妹が会話を交わしている。

「別にお姉ちゃんを心配してるんじゃないです。お姉ちゃんが怪我をしたら帰らな
くちゃならなくなるからです」

頬を染め、そう言ってプイツと顔をそらす百合園さん。

ツンデレだ。ツンデレがいる。

「うん、そうだね。お姉ちゃん気をつけるね」

百合園さんのツンデレ発言を素直に受け止め、にっこりと笑って答えるイリスさん。その言葉を聞いて顔をそらしたまま口をへの字にする百合園さん。

本当はお姉ちゃんを心配したのにね。

キャンプに行く前はお姉ちゃんに無関心な素振りを見せていたのに、ずいぶんと変わったみたいだ。

百合園姉妹を見ながらそんなことを思っていたら、不意に俺を見たイリスさんがにっこりと笑って手を振ってきた。

笑みを浮かべて手を振り返しつつ、本当に綺麗な人だと思った。

いや、初めて会った時に感じた弱々しさが薄れ、以前にも増して綺麗になったような気がする。



どんどん近くなってくる祭囃子。

石段を上り切ると神社の境内が視界に映った。

普段は閑散としているであろう石畳の境内は、両端にズラリと屋台が建ち並び、たくさんの提灯が辺りを照らしている。

そして、そんな境内を行き交う大勢の人々。

「うわあ！」

全力で石段を駆け上がっていたはずなのに、なぜか俺達と同時に石段を上り切った夜乃宮さんが、息を荒らげながら声を張り上げた。

「いかっぽっぽおおおおおおおおお！」

イカ焼きが食べたいのか、叫びながら駆け出そうとした夜乃宮さんだけど、その手をガシッと掴んだ。

「あまね？」

俺から手を掴まれ、振り返って声を上げる夜乃宮さん。

「くうちゃんをあまねお姉ちゃんと手を繋いでください」

そう夜乃宮さんに言い聞かせた。

ただでさえ小さいのにチョロチョロ動き回られたら確実に迷子になるからな。

「あまねに言われたら聞くしかないな！」

そう言ってニカッと笑った夜乃宮さんは、俺の手をしっかりと握り締めた。

褐色に日焼けしてギャルっぽいのに、中身はいつもの夜乃宮さんなのがたまらなく愛らしい。

守らなければ、この子を。

「私も子供みたいに駆け出したら捕まえてもらえるかな……」

「凜ちゃんがそれをやったら呆れられるんじゃない？」

呟いた高梨さんが砂庭さんに突っ込まれ、しゅんとした。

ま、まあ、確かに、しっかり者の高梨さんが夜乃宮さんみたいに「いかぼっぽおおおおお！」とか叫びながら駆け出したら、別の意味で心配になると思う。

ていうか、子供扱いされている夜乃宮さんだけど、俺達の同級生なんだけどね。

「お姉ちゃんはお祭りで何がしたいですか？」

「わたあめって浮きますか？」

百合園さんがイリスさんに問いかけ、イリスさんが百合園さんに問い返す。

「質問を質問で返さないでください。あとわたあめは浮きません」

ジト目になった百合園さんがボヤキ、イリスさんがえへへと笑っている。

なんだかんだ言って、百合園さんはお姉ちゃんの面倒を見る気のようなのだ。

百合園さんはお姉ちゃんを守りたかったんだもんね。

とそこで、イリスさんが百合園さんに謝っていないような気がした。

会話を全部聞いていたわけじゃないけど、少なくとも俺が聞いた限りではイリスさんは謝っていないと思う。

「お姉ちゃん、ありすはリンゴ飴が食べたい！」

「あまね！ いかぼっぽが食べたい！」

俺の腕に抱き着いているありすと、俺と手を繋いでいる夜乃宮さんが声を張り上げた。

「はいはい、じゃあリンゴ飴といかぼっぽを買おうね」

「お姉ちゃんに半分あげるね！」

「あまねに半分やるぞ！」

俺の言葉に声を上げる二人。

リンゴ飴が半分といかぼっぽが半分。

食い合わせもへったくれもないな。

ジト目でそんなことを思いつつ、二人と一緒に歩き出した。

女の子になったら修羅場だった件 - 第五十五話 お兄ちゃんの見解を聞いて欲しい件

神社の境内に設置された仮設のテーブル。

屋台で買った物をゆっくりと食べられるように、お祭りの関係者が設置してくれたんだろう。

来る時間が早かったからか場所を取ることができた。

周りには家族連れが多く、制服を着た警備員さんも何人かいるため、安心してゆっくりできそうだ。

念のため警備員さんに「お疲れさまです」って言いながら冷えたジュースをあげた。

うちのグループは俺以外レベルが異常に高いからな。もしもの時に警備員さんから助けてもらえるよう、賄賂を贈っておくことにしたのだ。

賄賂の意味もあるけど、みんなのために遅くまで大変だな、っていう思いもあった。

俺からジュースをもらった警備員さんは、一瞬キョトンとして、でもすぐに顔を引き締めてビシッと敬礼した。そして「任せてください！」と声を張り上げて言ってくれた。

そんなわけで、ありすと夜乃宮さんのリクエストであるリンゴ飴といかぼっぼを買い、さっそく食べることにした。

俺の膝の上に座り、嬉しそうに足をパタパタさせながら割り箸を握り締めている夜乃宮さん。その正面のテーブルには、器に入った焼き立てほやほやのいかぼっぼ焼きが置いてあり、食欲をそそる香ばしいイカの匂いが辺りに漂っている。

「いただきます！」

礼儀正しく手を合わせて挨拶をした夜乃宮さんが、器を手にとると、いかぼっぼ焼きをパクパクと食べ始めた。

「うまい！」

モグモグしていた夜乃宮さんは、ゴクンと喉を鳴らし、嬉しそうに声を張り上げ両手をパタパタさせている。

はあ、可愛い。

夜乃宮さんの愛らしさにへらっと笑いつつ、その頭を撫でた。

俺に頭を撫でられながら、いかぼっぼをパクパクと夢中で食べる夜乃宮さん。

「お姉ちゃん」

隣に座り、ピッタリと身を寄せているありすが、ひと口齧ったリンゴ飴を俺に差し出した。

俺に食べろと言っているのだろう。

リンゴ飴に顔を寄せ、ありすが齧った所とは別の所を齧ろうとしたら、クイツとリンゴ飴が動き、ありすが齧った部分が俺に向けられた。

「お姉ちゃんは、ありすが食べた所を食べるのは嫌なの？」

ムツとしたような顔で声を上げるありす。

「そんなことはないよ」

やれやれと内心で溜息を漏らしつつ、そう言ってにっこりと笑った俺は、ありすが齧った部分に重なるように、リンゴ飴を小さく齧った。

飴のパリッとした食感と甘さ。そしてリンゴのシャリシャリとした食感と酸っぱさが同時に口内に広がる。

「美味しいね」

そう声を上げると、頬を染めたありすが嬉しそうにえへへと笑った。そして俺が齧った部分をペロペロと舌で舐めている。

俺が齧った部分をペロペロするのはちょっとどうかと思うけど、ありすだし、まあいっか。

「り、リンゴ飴買ったなあ！ 私もなあ！」

ワザとらしく声を上げながら、テーブルを挟んだ俺の対面に座る高梨さん。

「ひ、一人じゃ食べきれないかもなあ！ あまねが手伝ってくれたら助かるんだけどなあ！」

ワザとらしく声を上げる高梨さんが、チラチラと俺を見ている。

そんな高梨さんの隣に、チョコバナナを持った砂庭さんが座った。

「一人で食べきれなかったら、江奈ちゃんに手伝ってもらえば？」

ツンとした態度で声を上げるありす。その言葉を聞いた高梨さんは、うるうと瞳を潤ませて、まるで叱られた仔犬のようにしゅんとしてしまった。

もし高梨さんの頭に犬耳が生えていたら、ペタンと垂れてしまっているだろう。

それほどわかりやすく落ち込んでいる。

「もう、わかったよ。でも特別なんだからね？ 凜ちゃんだから特別に許してあげるんだから」

そのありすの言葉に、高梨さんの顔にパアッと満面の笑みが浮かんだ。

ねえ二人とも、俺の意見を聞く気は無いんですか？

「はい、あーん」

不意に声が響き、視線を向けると目の前に黒い物体が見えた。

それはチョコが塗られたバナナ、いわゆるチョコバナナだった。

目の前に差し出されたものだから、ついパクッとひと口食べてしまった。

「わーい」

嬉しそうに声を上げた砂庭さんが、俺が齧ったチョコバナナをパクッと食べ、もぐもぐしながらにこにここと笑っている。

そんな砂庭さんをジト目で見つめるありすと高梨さん。

「あまねちゃんが食べたチョコバナナは、あまねちゃんの味がするねえ」

モグモグしていた砂庭さんが、コクンと喉を鳴らし、ふうと溜息を漏らしながら甘い声で囁いた。

「お、お姉ちゃんの味？」

「あ、あまねの味？」

同時にコクリと喉を鳴らした二人が、同時に真剣な表情で呟いた。

「とっても甘くて、そしてどこまでも優しい味でした」

満面の笑みを浮かべてそんなことを言う砂庭さん。

砂庭さん、それは俺の味じゃなくてチョコバナナの味だと思いますよ。

ていうか、齧っただけで俺の味に移るはず無いだろ。

そんな俺の思いとは裏腹に、真剣な表情でコクコクと頷いている二人。

なに納得してんだお前ら。

「はい、あーん」

納得している二人をよそに、チョコバナナを俺に差し出す砂庭さん。

もうその手には乗らんぞ。

「ちょちょちょちょ！」

「え、江奈！ あんただけズルいよ！」

俺はもう食べる気は無いんだけど、焦った二人が砂庭さんに突っ込みを入れた。

二人に突っ込まれ、えへっと悪びれなく笑う砂庭さん。

とそこに――。

「……え？」

思わず声を上げてしまった。

戦隊モノのお面を被って焼きとうもろこしを持った怪しい人物がニョツと現れたのだ。その隣にはこれまた戦隊モノのお面を被ってわたあめを持った怪しい人物が立っている。

二人ともお面のせいで顔は見えないけど、長い銀色の髪が見えている。

「アリスちゃん、わたあめを水に浸けたらどうなりますか？」

「そんなに気になるなら水に浸けてみればいいと思います」

お面越しにふがふがと声を上げて会話を交わす二人と、そんな二人をジト目で見つめるありすと高梨さん。そしてぷぷつと噴き出す砂庭さん。

二人とも、笑ってくれる砂庭さんに感謝しなさいね。

それはそうと、焼きとうもろこしとわたあめを買いに行った二人だけど、なかなか戻って来ないと思ったらお面を買っていたのか。

しかもお面に気を取られて気付かなかったけど、二人は手を繋いでいた。

お面を買ったのは、もしかして照れ隠しかな。

「カッコいいな！」

それまで足をパタパタさせながら夢中でいかぼっぽをはぐはぐしていた夜乃宮さんが、瞳を輝かせて声を張り上げた。

「あは！」

「うふふ」

夜乃宮さんから褒められ、嬉しそうに声を上げる二人。

褒めてもらえてよかったね。

とそこで、夜乃宮さんの口の周りが汚れていることに気が付いた。

夢中でいかぼっぼを食べていたせいで、タレが口の周りに付いてしまったようだ。

「くうちゃん、ちょっと動かないでね」

ポケットティッシュを取り出しながらそう言った俺は、ティッシュで夜乃宮さんの口の周りを拭いた。

俺に言われた通り、目を閉じてジッとしている夜乃宮さん。

はあ、可愛い。

「あまね、ありがと——」

拭き終わると、振り返った夜乃宮さんが俺を見上げてお礼を言おうとした。けど、その言葉が途中で途切れた。

どうしたのかと思って首を傾げたら、不意に夜乃宮さんの顔が近づいた。

そして——。

「っ！？」

俺の唇をペロツと舐めた夜乃宮さんに、思わずビクツと震えてしまった。

「唇にリンゴ飴のカケラがついてた」

そう言ってニカッと笑う夜乃宮さん。

「そ、そっか。ありがとう、くうちゃん……」

なんとか笑顔でお礼を言ったものの、内心ドキドキだった。

だって夜乃宮さんが俺の唇を舌で舐めたんだぞ。それって唇同士でキスをする
ことと同じようなものだ。

もっとも、夜乃宮さんのことだから、特に何も考えていないんだろうけど。

そう思いながら顔を上げ、思わずギョツとした。

燃えるように真っ赤になっているみんなが、ジーツと俺を見ていたのだ。

お面を被っていた百合園姉妹も、お面をズラして俺を凝視している。

こ、怖いんだけど……。

「あまね、いかぼっぼ食べ？」

聞こえた声にハツとして視線を下げると、器を持った夜乃宮さんが俺を見上げていた。

「う、うん！ もらっちゃおうかな！」

みんなから凝視されて居た堪れなかった俺は、夜乃宮さんの厚意に飛び付いた。

「あまねにはいつもお世話になってるから、食べさせてやるぞ！」

そう言って割り箸でいかぼっぼを挟んだ夜乃宮さんが、そのいかぼっぼを持ち上げると俺の顔に寄せた。

「あ、ありがとう」

お礼を言って口を開け、いかぼっぼに喰い付こうとした。

「あっ」

ところが、夜乃宮さんの手がブレてしまい、いかぼっぼが俺の唇の端に当たって

しまった。

「ご、ごめん！」

謝った夜乃宮さんは、いかぼっぼをいったん器に戻し、そして――。

「っ！？」

俺の膝の上で身を振り、俺の両肩に手を乗せて背伸びをした夜乃宮さんが、俺の唇を舌でペロペロと舐めたのだ。

「よ、汚しちゃってごめん。でも舐めれば大丈夫だから」

そう言って、さらにペロペロする夜乃宮さん。

夜乃宮さんの舌の感触が唇から伝わってくる。

止めたいけど、夜乃宮さんとしては悪気なんて全く無いだろうし、止めるに止められない。

「綺麗になった」

俺の唇をしばらくペロペロしていた夜乃宮さんが、そう言ってニカッと笑った。

「あ、ありがとう……」

心臓が破裂しそうなほどドキドキと高鳴る中、どうにか夜乃宮さんにお礼を言った。

「ぼっぼ……」

微かに聞こえた声。

「いかぼっぼだ！ いかぼっぼがあれば事故を装ってあまねの唇をペロペロできる！」

声を張り上げた高梨さんが勢いよく立ち上がり、風のように駆けて行った。

「もう、凜ちゃんったら」

口元に手を添えてうふふと笑いながらそう言った砂庭さんが、カッと目を見開いて勢いよく立ち上がり、高梨さんを追って駆け出した。

「ちょ！？ だ、ダメなんだから！ ダメなんだからあ！」

ハッとしたありすが声を張り上げ、泣きそうになりながら二人を追って駆けてゆく。

そんな三人をジト目で見ていたら、肩をポンポンと叩かれた。

振り返ると――。

「っ！？」

目の前に、触れそうなほどの距離に百合園さんの顔があり、とっさに身を引こうとした。でもそれより速くそのままチュッと俺の唇にキスをしてきた。

「キスしたいならこうして堂々とやればいいんです」

頬を染めている百合園さんは、そう言ってペロリと自分の唇を舐めた。

お、お前……。

いいんです、じゃないよ！ よくないよ！ バカなのかこの子は！

あ、そう言えばおバカさんだった。

「そ、そうなんですか。したかったらやっちゃえばいいってことですか」

「そうです」

真っ赤な顔で赤い瞳を揺らしながら呟くイリスさんに、百合園さんが迷わず頷く。

だから、そうです、じゃないだろ！ 俺の意志を無視しちゃダメでしょ！

「不意打ちだと成功する確率が上がりますが、あまねさんがちょっと怒ると思います。でもあまねさんはだいたい許してくれますから、ちょっと怒られるのと引き換えにキスができると思えば安いものです」

「くっ」

淡々と語る百合園さんに、呻きを漏らさずにはいられなかった。

コイツ、確信犯だ。

「あ、あまねさんからちょっと怒られるのと引き換えにキスができる。裏を返すとキスをしてもちよっとしか怒られない。た、確かに美味しい話です。むしろ叱られたい私としては、キスができるうえにちょっと叱ってもらえると最高です」

明らかに興奮しているイリスさんが、はあはあと息を荒らげながら口早に呟いている。そんなイリスさんの言葉を聞いてうんうんと頷いている百合園さん。

イリスさんがおバカさんのせいで壊れかかっているように見える。

次不意打ちでキスをしてきたら、俺だってちょっと怒るからね？

しかし、みんながいない時でよかった。夜乃宮さんは特に気にしていないようだし。

その後、ありすと高梨さんと砂庭さんがいかぼっぽを買ってきて、俺に少し食べるように勧めてきたけど、俺は決して食べなかった。

そんな見え透いたトラップに引っかかるわけないだろ、まったく。

と思ったけど、俺から断られた高梨さんが泣いてしまい、仕方なく少しだけいかぼっぽを食べた。

「く、口が、口の周りが汚れたから、あの、私が、その、舐めて綺麗に……」

燃えるように真っ赤になってモジモジしながら震える声を上げる高梨さん。

結局高梨さんは俺の唇をペロペロできず、両手で顔を覆って一人啜り泣いた。

「これだから凜ちゃんは安心できる」

「だよねえ」

咽び泣いている高梨さんを優しい瞳で見つめて呟くありすと砂庭さん。

なんだか俺が悪いみたいな感じになっちゃってるんですけど、俺は悪くないよね？

女の子になったら修羅場だった件 - 第五十六話 日に焼けた夜乃宮さんの褐色の肌は焼けていない部分が真っ白な件

空気を振動させる破裂音。

夏祭りのメインイベントである花火が始まった。

「けっこうよく見えるね！」

「綺麗だねえ」

並んで立っている高梨さんと砂庭さんが、花火を見ながら会話を交わしている。

「見えづらいですね」

「そうですね」

こちらも並んで立っている百合園姉妹は、被っているお面のせいで声がフガフガしている。

見えづらいのはお面のせいだろ。外せばいいだろそれ。

と心の中で突っ込みを入れつつ、手を繋いでいる百合園姉妹を見て、お面はやっぱり照れ隠しなんだろうな、と思った。

「お、音が鳴ると空気がビリビリしてちょっと怖い……」

俺の浴衣の袖を握っているありますが、怯えたようにプルプルと震えながら俺に身を寄せている。

ありすは怖がりだなあ。

そう思いながらありすの頭を撫でると、俺を見たありすが頬を染めてえへっと笑った。

はい可愛い。

丘の中腹にある神社は花火を見る穴場スポットだ。でも木々が生い茂っているため、花火が見える場所は限られている。

穴場はあくまでも穴場ってことだ。

砂庭さんの情報のお陰で最初からそれを知っていた俺達は、屋台巡りを早めに切り上げ、花火が見える場所へと移動した。お陰で無事場所を確保することができた。

「うー！ うー！」

悔しそうに呻きを上げながらぴょんぴょんと飛び跳ねている夜乃宮さん。

俺達がいるのは鬱蒼と生い茂る木々の一部が開けた場所だ。開けていると言っても完全に木が無いわけじゃない。

打ち上げ花火なら見えるだろうけど、地上で噴き出すタイプの花火は背が低い夜乃宮さんには見えづらいようだ。

そんな夜乃宮さんをひょいっと持ち上げる。

「あ！ 見えた！ ありがとうあまね！」

俺に持ち上げられたことで花火が見えたのか、嬉しそうに声を上げてお礼を言う夜乃宮さん。

夜乃宮さんのためを思って持ち上げたんだけど、指から伝わってくる感触に顔が熱くなる。

夜乃宮さんの左右の腋の下に手を差し入れて持ち上げたため、指がプニプニしたモノに食い込んでしまっているのだ。

忘れていた。夜乃宮さんの胸がありすより大きいことを。

それと腕がプルプルと震えている。

夜乃宮さんは体重が軽いけど、ずっと持ち上げているのはかなりキツイ。

持って五分といった所か。

「あは！ きれーだなあ！」

嬉しそうに声を上げる夜乃宮さん。

今さら降ろすわけにもいかないよなあ。

そう思いつつも、腕の震えがどんどん激しくなってゆく。

五分どころか三分持たないかもしれない。

「わあ！ あはは！ ドーン！ ドーン！ きれー！」

腕の振るえが激しくなっていくけど、喜んでいる夜乃宮さんを降ろすわけにはいかない。

だって俺はお兄ちゃんだから。

限界なんて超えてやる。

そんな俺の意志とは裏腹に、腕が徐々に下がっていつてしまっている。

花火大会は四十分くらいだろうか。

……やっぱ無理かなあ。四十分はちょっと無理だよなあ。

「あはは！ お父さん花火がよく見えるよ！」

聞こえた声に視線を向けると、父親らしき男性が幼い女の子を肩車していた。

そうか、あれだ！ 肩車だ！

肩車なら腕が疲れないし、夜乃宮さんの視線も高くなってもっと花火が見えやすくなるだろう。

ありがとう、名も知らぬお父さんと娘さん。

「く、くうちゃん、肩車しよっか。もっと花火がよく見えると思うよ」

プルプルしながらそう夜乃宮さんに問いかけた。

「肩車！？ うん！ 肩車して欲しい！」

夜乃宮さんの了承を得てホッとした俺は、夜乃宮さんをいったん降ろした。

危なかった。腕がもげるかと思った。

「肩車……」

腕を回していたらポツリと呟く声が聞こえた。

見ると高梨さんがジーンと俺を見ていた。

「あはは、凜ちゃんがあまねちゃんの肩に乗ったら、あまねちゃんが潰れちゃうよお」

その砂庭さんの突っ込みに高梨さんの顔が一瞬で真っ赤になった。

「わ、私そんなに重くないもん！」

真っ赤な顔に涙目で声を張り上げる高梨さん。

「そんなの知ってるよお。凜ちゃんスタイルいいもん。でも凜ちゃんはあまねちゃんより身長が高いじゃない。それであまねちゃんの肩に乗ったら可哀想だよお」

「うっ、確かに」

にこにこしながら的確な突っ込みをした砂庭さんに、高梨さんが呻きを上げた。

「あまね、準備できたぞ！」

夜乃宮さんの声が聞こえて視線を下げ、そして視界に映った光景にギョツとした。

嬉しそうに笑っている夜乃宮さんが、浴衣のを裾をたくし上げていたのだ。

かなり危うい所まで露わになってしまっている太もも。

そうか、浴衣で肩車をするなら裾をたくし上げないといけないのか。しかも夜乃宮さんの生の太ももが俺の顔を挟むことになる。

なんてこった。これはヤバいぞ。でも今さらやっぱり止めようなんて言えないし、腕で持ち上げるのはもう無理だし。

こうなったら開き直ってやるしかない。

そう自分に言い聞かせ、口をへの字にして頷いた俺は、その場にしゃがんだ。

「あまね、大変だと思うけどよろしくな！ この恩は絶対に忘れない！ コクワの時の恩もキャンプの時の恩も忘れてないからな！ いつか百倍にして返すから！」

満面の笑みを浮かべて声を張り上げた夜乃宮さんは、浴衣の裾をギリギリまでたくし上げた状態で俺の前に立った。

日焼けをした時、短パンを履いていたのだろう。褐色に日焼けした太ももが、付け根の辺りから真っ白だ。

それが見えてしまうほど浴衣がたくし上げられている。

思わずゴクリと唾を呑み込み、ハツとして首を横に振った。

俺のバカ野郎。純粹で純真な夜乃宮さんに欲情するとか最低だ。

「じゃああまね、よろしくな！」

そう言って夜乃宮さんはその場でクルリと回り、俺に背を向けた。

情けない自分を叱咤しつつ、夜乃宮さんの両脇を掴んで持ち上げる。そして肩車をすると立ち上がった。

体重が軽いから楽ちんだけど、予想通り、夜乃宮さんのひんやりとした生の太ももが俺の顔を挟み、頬に当たっている。

しかも首裏から感じるプニプニとした感触。

夜乃宮さんの股の奥が俺の首裏に押し付けられているのだ。

くっ、温泉で全裸を見てしまったものだから、夜乃宮さんの股の奥がどうなっているのか想像できてしまい、気を抜くと鼻血を出してしまいそうだ。

「うわっ」

夜乃宮さんがグラリと揺れ、声を上げながら俺の頭を手で押さえた。俺もとっさに――。

「ぬっ！？」

夜乃宮さんの太ももを両手でガシッと掴み、その手から伝わる柔らかくも張りのある感触に思わず呻きを上げてしまった。

太ももに顔を挟まれ、股の奥が首裏に押し付けられていて、しかも両手で太ももを掴んでしまっている。

女の子同士なら気にしないのかもしれないけど……。

花火どころじゃない。はっきり言って花火どころじゃない。

「くうちゃんよかったね」

俺の隣に立っているありすが、夜乃宮さんを見上げながら笑みを浮かべて声を上げた。

俺の内心など知る由も無いありすの純粋な笑顔。

「うん！」

ありすの問いかけに嬉しそうに返事をする夜乃宮さん。

俺の内心など知る由も無い純粋な反応。

そんなわけで、俺は罪悪感と戦うのでいっぱいばいで、結局ほとんど花火を見ることができなかった。



屋台で買ったよく冷えたジュースをグビグビと飲み、ぷはっと息を吐く。

花火が終わり、喉がカラカラになってしまった俺は、急いで屋台でジュースを買い、急いで喉を潤した。

両頬と両手に残る夜乃宮さんの太ももの感触と、首裏に残るプニプニとした感触。

幼い夜乃宮さんの肌は、その見た目通りとってもスベスベで、温泉で全裸を見るよりも精神的にクルものがあった。

「あまね、ありがとうな！ 花火とってもきれいだった！」

俺の浴衣の袖を握っている夜乃宮さんが、俺を見上げながら満面の笑みを浮かべてお礼を言う。

はあ、夜乃宮さんは純粹で純真なのに、俺ってヤツは……。

夜乃宮さんの太ももと股の奥の感触に興奮してしまった自分が情けなくて泣けてくる。

「花火綺麗だったね」

「そうだねえ」

楽しそうに会話を交わしている高梨さんと砂庭さん。

「花火よく見えませんでした」

「お面の穴を大きくするとよく見えたかもしれませんね」

仮面を被ったままの二人がフガフガと会話を交わしている。

「もう終わりかぁ」

俺の隣に立っているありすが、笑顔ながらもどこか寂しそうに呟いた。

そうだね、夏休み最後のイベントも終わっちゃったね。



花火も終わったことだし、帰ることになった。

お祭りは楽しいけど、祭囃子が徐々に遠くなってゆくのは凄く寂しい。

みんなそばにいるのに、無性に寂しくてたまらない。

そんな思いに駆られる中、百合園姉妹が俺達と別れ、高梨さん達とも別れ、俺とありすだけになった。

俺と手を繋いで歩いているありすは、やや俯き、ギュッと強く俺の手を握っている。

等間隔に設置された外灯。

建ち並ぶ家屋の灯り。

俺達と同じようにお祭りから帰る人達が大勢歩いている。

寂しくないはずなのに、でもやっぱり寂しい。

「凄く楽しかったのに、凄く寂しい……」

ありすがポツリと呟いた。

「そうだね……」

ありすも同じ思いなんだな、と思いながら言葉を返した。

「来年もこようね」

「うん」

俺の問いかけに間を置かずに頷いたありすは、涙ぐんだ瞳で俺を見るとえへっ

と笑った。

そのありすの少し寂しげな笑みは、なんだか大人びていた。



家に到着し、ありすと一緒にお風呂に入り、ありすとお互いに髪を乾かし、二人で二階に上がった。

お祭りの終わりの寂しさのせいかな、俺にべったりのありす。そして疲れていたのか、ベッドに横になるなり俺に抱き着きながら眠ってしまった。

そんなありすの頭を撫でつつ、寝る前にスマホを確認しておこうと思い、枕元に置いておいたスマホを手を取った。

——帰る途中、江奈が泣いちゃって大変だったよ。

——帰る途中、凜ちゃんが泣いちゃって大変だったよお。

高梨さんと砂庭さんから別々に送られてきたメッセージが同じ内容で、思わず噴き出してしまった。

要するに二人とも泣いてたってことね。

——あまね、大好きだぞ！ 今日もありがとう！ おやすみなさい！

夜乃宮さんから送られてきたメッセージは夜乃宮さんらしくどこまでも純粹で、胸が苦しくなった。

太ももで興奮して本当にごめんなさい。

——ちゅうちゅう、ちゅうちゅうちゅう♡

どうやらネズミからメッセージが届いたようだ。

俺はネズミ語はわからない。

ジト目でそんなことを思いつつ、次のメッセージを表示した。

——約束、覚えてますよね？

そのメッセージを目にしてドキッとした。

送り主はイリスさん。

約束って……。

『今度デートしてくださいね？ 約束ですよ？』

上目使いで俺を見ながら甘えた声でそう言ったイリスさん。その姿が脳裏を過った。

忘れていた。すっかり忘れていた。そう言えばイリスさんとデートするって約束しちゃったんだ。

イリスさんと二人きりでデート。

みんなが一緒なら問題無いただろうけど、二人っきりって……。

ドキドキと高鳴る鼓動。

大人の女性と二人きりでデート。しかも相手は絶世の美貌を持つイリスさん。

だ、大丈夫だよ。デートって言っても遊んで食事をするくらいだろうし。

そう自分に言い聞かせつつ、本当にそれで終わるのか、という不安が脳裏を過った。

おバカな妹から余計なことを吹き込まれていないか心配だ。

女の子になったら修羅場だった件 - 第五十七話 お姉ちゃんズと妹ズな件

イリスさんとのデートをどうするか。

ありすに言えば、付いて来ると言うだろう。でもデートは二人きりという約束だ。ならありすに黙って行くしかないけど、それは嫌だ。

ありすに嘘を吐くなんて、そんなことはできない。

ならありすに言うしかないけど、そうするとイリスさんとの約束を破ることになってしまう。

どうしたらいいのか答えが見つからず、時間だけが過ぎていった。

そうしてイリスさんとのデートの日が来てしまった。

もう時間は無い。こうなったらイリスさんとのデートを断わるしかない。

ありすに嘘を吐くことだけは絶対にできないから。

「お姉ちゃん」

イリスさんに断わりの連絡を入れよう。そう思ってスマホを手にとったら、ありすが部屋に入って来た。

「ちょっと出かけてくるよ」

腕を組んだありすが、不機嫌そうにそう言った。

出かけてくる？ 一人で？

とそこで、ありすが妙におめかしをしていることに気が付いた。

「バカから呼び出しを受けちゃって」

そう言ってありすは俺に紙を見せた。

その紙には“果たし状”と書いてある。

「果し合いをする前に、まずは腹ごしらえに食事をして、食後に果し合いをする
と健康に悪いから最近流行っている恋愛映画を観ながら休憩して、その後準備
運動として公園を散歩して、そして果し合いをする、って書いてあった」

不機嫌そうながらも、ほんのりと頬を染めているありすが果たし状の内容を説明した。

一緒に食事をして、一緒に恋愛映画を観て、一緒に公園を散歩って、それ
デートのお誘いじゃないか。

「まったくあのバカは素直じゃないんだから。私と遊びたいならそう言えばいいの
に」

唇を尖らせてブツブツと呟いているありすだけど、果たし状がデートのお誘いで
あることに気付いているようだ。そしてまんざらでもないようだ。

しかし、イリスさんとのデートの日に、百合園さんがありすをデートに誘うなん
て。

これは絶対に偶然じゃないな。

俺とありすを引き離す作戦か。

でもイリスさんが百合園さんに頼むとも思えないし、そうなると百合園さんが考
えた作戦ってことか。

いや、そもそも作戦なのか。

イリスさんが俺とデートするから自分もデートしなくなり、ありすを誘っただけかも
しれない。

百合園さんって俺に好き好き言っている割に、ありすにちょっかいをかけまくって
いるからな。そしてありすからどれだけボコボコにされても反撃しないし。

なんだかんだ言って、百合園さんはありすのことがかなり好きだと思う。

「じゃあちよつと行ってくるよ」

そう言ってありすは部屋から出て行った。

百合園さんと仲良くなるのは良いことだけど、あの二人を放っておいて大丈夫だろうか。

正直不安だ。

俺が男だった頃のありすは男に言い寄られた経験がほとんど無かったけど、こっちのありすも同じようだし、もし男に言い寄られたら対処できるかどうか。

一緒にいるのが百合園さんって言うのもな。

言い寄って来た男を煽って状況を悪化させるような気がしてならない。

やっぱりイリスさんとのデートは断って、ありすの後を追った方がいいか。

そう思っていたらスマホが鳴った。

確認するとイリスさんからの着信だった。



イリスさんとのデートは予定が変更になった。

『うちのアリスちゃんがそちらのありすさんをデートに誘ったようでして』

困ったような声でそう言っていたイリスさん。

イリスさんは俺とデートすることを百合園さんに話したらしい。それを聞いた百合園さんは、なら自分は水無月妹に果し合いを挑むと言い出したようだ。

果し合いと言うか、デートだと思うけど。

要するに、俺の予想通りの展開ってことだ。

それはともかく、イリスさんが言うに百合園さんの様子がおかしいと言う。

妙に自信に満ちあふれていると言うか、冷静な判断力を失っているように思えると言うか。

とにかく心配だとイリスさんは言っていた。

俺もありすのことが心配だったし、イリスさんと意見が合い、なら二人を陰ながら見守ろうと言う話になった。

ようは尾行である。

いくら双子の妹とはいえ、ありすのプライベートに首を突っ込むのはどうかと思う。

でも、もしものことがあったら。

世の中には女を食い物にする非道な男がわんさかいるからな。

そんなわけで、イリスさんと一緒にありすと百合園さんを尾行することにした。



急いで家を出た俺は、イリスさんとの待ち合わせ場所である駅へと向かった。

二人は駅で待ち合わせをして電車を使うため、車で追うのは難しいとのことだった。

百合園さんのデートコースはイリスさんが把握しているようで助かった。

駅に到着すると、イリスさんがすでに待っていた。

初めて会った時と同じ純白のワンピース姿。

シンプルだけど、だからこそイリスさんのたぐい稀なる美貌が際立っていた。

行き交う人達は皆イリスさんを意識しているようだけど、イリスさんの周りにはポツカリと空間ができていた。

あまりに美しすぎて近寄り難いんだと思う。

「イリスさん！」

声を張り上げながらイリスさんに駆け寄った。

「あ、あまねさん！」

俺に気付いて満面の笑みを浮かべたイリスさんが、俺に向かって駆けて来る。

「あっ」

焦ったせいか、イリスさんがコケた。

幸いイリスさんのすぐそばまで駆け寄っていたため、イリスさんを抱き留めることができた。

「あ、ありがとうございます」

俺にしがみ付き、申し訳なさそうにお礼を言うイリスさん。

「イリスさん、変わりましたね」

イリスさんを立たせながらそう呟いた。

「え？」

不思議そうに首を傾げるイリスさん。

自分では気付いていないんだろうな。

「なんでもないです」

そう言って笑うとイリスさんがキョトンとした。

イリスさんは初めて会った頃、すぐに謝っていた。

百合園さんから謝らないで欲しいと言われても、それでも謝ってしまっていた。

でもキャンプから帰って来てから、イリスさんは謝らなくなった。

それはとても良い変化だと思う。

そして本人が気付いていないのなら、言わない方がいいだろう。

言えば意識してしまうかもしれないから。

「あまねさん、私が変わったってどう言うことですか？」

なんでもないって言ったのに、イリスさんが突っ込んできた。

変にごまかすと余計に突っ込まれそうだな。

なら――。

「初めて会った時から綺麗だと思ってましたけど、ますます綺麗になったような気がしたので」

そう言うと、イリスさんの顔が一瞬で真っ赤になった。

嘘は言っていない。ただでさえ綺麗だったイリスさんがますます綺麗になったのは本当だ。

「あ、あまねさんったら、もう」

燃えるように真っ赤な顔で声を上げたイリスさんは、俺の腕をペシペシと叩いてきた。

百合園さんと違って落ち着いた雰囲気のあるイリスさんだけど、俺の腕をペシペシ叩いている姿なんか百合園さんにそっくりで、やっぱり姉妹なんだなあと考えた。

「イリスさん、二人が乗る電車の発車時刻とかわかります？」

ジト目でそう問いかけると、ハッとしたイリスさんが肩から斜めに掛けているポシェットから手帳のような物を取り出した。そしてペラペラとページを捲る。

「発車まであと五分ほどです！」

「じゃ、じゃあ急がないと！」

「そ、そうですね！」

イリスさんと会話を交わし、お互いに頷き合うと改札口に向かって駆け出した。

「あっ」

声が聞こえたと同時にサッと手を伸ばす。そしてコケそうになっていたイリスさんを抱き留めた。

「あ、ありがとうございます」

俺にしがみ付いてお礼を言うイリスさん。

「気にしないでください」

そうイリスさんに答えつつ、考えるよりも先にイリスさんがコケたのだと理解してしまった自分に内心で苦笑いを浮かべた。

「い、急ぎましょう！」

再度駆け出そうとするイリスさんの手を掴む。

「え？」

俺から手を掴まれて驚いたのか、イリスさんが振り返った。

「二人のことも心配ですけど、イリスさんが怪我をするのは困ります」

そう言ってイリスさんの手をしっかりと握った。

「は、はあい。気をつけまあす」

俺の手を握り返してきたイリスさんが、ススッと俺に身を寄せ、コテツと俺の肩に頭を預けてきた。

いや、気をつけるのはいいけど、急ぐ必要もあるんだよ。

「さ、さあ行きましょう！」

そう声を張り上げると、イリスさんの手を引いて駆け出した。

「わ、わかりましたお姉ちゃん！ イリス急ぎます！」

声を張り上げたイリスさんが、俺に手を引かれて駆け出した。

絶対に声に出して言えないけど、俺一人の方が楽な気がしてきた。

女の子になったら修羅場だった件 - 第五十八話 年上の妹の扱いに困る件

結局ありす達が乗った電車には間に合わず、一本遅れて後を追いかけることになった。

ありすは大丈夫だろうか。

お盆に新幹線に乗った時、大学生くらいの男達に何度か声をかけられたからな。

高校生だと気後れしてありすに声をかけられなくても、大学生だと声をかけてくるかもしれない。

しかも夏休み中で浮かれ気分だとなおさらだ。

高梨さんと砂庭さんが一緒だとまだ安心なんだけど、一緒にいるのが百合園さんだからなあ。

「心配ですか？」

聞こえた声にハッとした。

見ると俺と向かい合って立っているイリスさんが、上目使いで俺を見ていた。

「こんなに落ち着きの無いあまねさんを見るのは初めてです」

言われて初めて俺は落ち着きがなくなっているのかと思った。

思えばありすと離れたことってあんまり無いからな。

男だった頃も女になってからも、ほとんどありすと一緒にいる。

「私はありすちゃんを一番に考えるあまねさんが好きです」

上目使いでそう言ったイリスさんが、そっと俺の手を握ってきた。

ひんやりしていて、細く柔らかなイリスさんの指の感触。

「ねえ見て見て！ あまねさんがいる！」

「え！？ うそ！ あ、ほんとだ！ あまねさんだ！」

「一緒にいるのって百合園さん？ あれ？ 百合園さんってあんなに大人っぽかったっけ？」

聞こえた声にハツとして視線を向けると、数人の女の子がこっちを見ていた。そして俺と目が合うと頬を染めてキャーキャーと黄色い声を上げ、俺に向かって手を振っている。

同じ学校の子達かな。たぶんそうだろう。

笑みを浮かべて控え目に手を振り返すと、女の子達が嬉しそうにはしゃいだ。

電車の中だからあんまり騒がれると困るけど、女の子達も一応は気にしているようだ。

「え！？」

女の子の中の一人がスマホを見ながら声を上げた。

「あまねさんと百合園さんが同じ電車に乗ってるよ、って杏子に教えてあげたら、こっちの電車にはありすちゃんと百合園さんがいるよって杏子から返ってきた。こっちに百合園さんがいるのに、あっちにも百合園さんがいるの？ ええ？ どう言うこと？」

目を白黒させて呟く女の子。

女の子の知り合いが一本前の電車に乗っていて、俺達がいるってその知り合いに教えたら、その知り合いの近くにはありすと百合園さんがいるってことか。

そうか、ここは地元だし、うちの学校の生徒がそこら中に散らばっているんだ。そしてありすと百合園さんはうちの学校の二大美少女。うちの学校の生徒ならほとんど知っているだろう。

つまり、二人にもしものことがあっても、うちの学校の生徒が見ている可能性があるってことだ。

そう考えると少し安心だな。

「あまねさん、あまねさん」

俺を呼ぶイリスさん。

「あの子達、私をアリスちゃんだと思ってるみたいですね」

俺の手を握ったまま身を寄せてきたイリスさんが、俺の耳元に唇を寄せて囁くと、クスッと笑った。

鼻を掠める大人びた甘い匂いと、身を寄せているせいで感じるイリスさんの感触。

「きゃあっ」

ガタンと電車が大きく揺れ、バランスを崩したイリスさんが小さな悲鳴を上げた。

壁側に立っていた俺は、壁に背を押し付けてバランスを取りつつイリスさんを抱き締めた。

イリスさんの胸が俺の胸にムニユリと押し付けられる。

「大丈夫ですか？」

ドキドキしながらそうイリスさんに問いかけた。

「あ、ありがとうございます」

俺に片手で抱き着き、ギュッと強く俺の手を握っているイリスさんが、申し訳なさそうにお礼を言った。

以前のイリスさんなら「ごめんなさい」と謝っていただろう。

咄嗟の状況で出てきたのが謝罪ではなくお礼。

イリスさんは本当に変わったんだなと思った。

そして人は短時間でも変わるものなんだなと思った。

なら俺だって変わるんじゃないかな。

「あの二人の周りだけキラキラ輝いて見える……」

「百合園さんってあんなに綺麗だっけ。もっとバカっぽかったような気がするんだけど……？」

「杏子も百合園さんがそばにいるって言ってるんだけど、もしかして百合園さんは分裂するの……？」

俺達の方を見ていた女の子達が、バランスを崩して抱き合っている俺達を見て頬を染めながら呟いている。

分裂って……。

ま、まあ、百合園さんなら分裂しそうではある。

ていうか、どんな超自然的な現象が起こっても、百合園さんだから、で済んでしまうような気がする。

それはこの際置いておいて、俺とイリスさんは完全に抱き合ってしまったている。

「た、立てますか？」

恥ずかしくなり、俺に抱き着いているイリスさんにそう問いかけた。

「ふ、普段はヒールが低めなパンプスを履いているのですが、今日は、その、背伸びを試みたくなくて、ヒールが高い物を履いてみたのです。ですけど慣れないとダメですね……」

俺に抱き着いたまま、照れたように笑みを浮かべて話すイリスさん。

その言葉を聞いて視線を下げると、イリスさんは踵が高めの白い靴を履いていた。

ああ、だから今日は妙にコケるのか。

納得しつつ、白いワンピースに白い靴を履いているイリスさんを見て、まるで白百合のようだと思った。

「よく似合ってますよ」

そうイリスさんに言うと、イリスさんの顔がみるみる赤くなった。

「あ、ありがとうございます……」

恥ずかしそうにそう言ったイリスさんは、俺の肩に頭を預けてきた。

「あまねお姉ちゃんに褒めてもらいたくて、おめかししてきたんです……」

そして甘い声でそう囁くと、俺の頬にチュッとキスをした。

ちょ、ちょっと待って。ここ電車の中なんですけど。

「み、見た……？」

「み、見た……」

「い、今、チュって、チュって……」

こっちを見ている女の子達が顔を燃えるように真っ赤にさせながら眩している。

他の乗客達も顔を赤らめながらこっちをチラ見している。

イリスさん、ねえイリスさん。完全に見られてますよ。



電車から降りてホッと溜息を漏らした。

顔が熱い。

結局電車を降りるまでイリスさんと抱き合っていたからな。

そしてそれを乗客達からずっと見られていた。

「アリスちゃんは公園に向かったと思われます」

俺と手を繋いだままのイリスさんは、片手で手帳を確認しながらキリッと表情を引き締めて声を上げた。

最初は普通に手を繋いでいたんだけど、いつの間にか指を組むようにしっかりと繋がれている。

こう言うの、恋人繋ぎって言うんだよね、確か。

正直凄く恥ずかしい。

やめて欲しいなんて言ったらイリスさんを傷つけちゃうよなあ。

まあ、恥ずかしいだけで嫌ではないけど。

「じゃあ行きましょう！」

手帳を片手で器用にポシエットにしまったイリスさんが、声を張り上げると俺の手を引いて歩き出した。

「あっ」

でもコケた。

そんなイリスさんを片手で抱き留める。

手を繋いでいるから抱き留めやすい。それにコケそうだと思っていたからなおさらだ。

それはともかく――。

「足、大丈夫ですか？ 痛くないですか？」

靴ずれを起こしていないか心配だ。

「大丈夫です！」

キリッと表情を引き締めて声を張り上げるイリスさん。

本当かなあ？



駅の改札口を抜け、大勢の人が行き交っている大通りに出た。

相変わらずイリスさんと恋人繋ぎをしながら歩道を歩く。

そんな俺達を、すれ違う人達がみんなチラ見してゆく。

恥ずかしいけど、でも悪いことをしているわけじゃないし。

そう自分に言い聞かせるしかなかった。

定期的にコケるイリスさんを抱き留めつつ、公園に到着した。

大通りと繁華街に面したその公園は、広くて綺麗だ。

公園の中に入ると、それまで聞こえていた喧騒が遠くなり、まるで世界が変わったように思えた。

公園の中心には噴水があり、その周りに広がる芝生広場と、その芝生広場を扇状に区切っている石畳の園路。

夏休み中だけど平日だからか、子供を連れたお母さんや若い人が目立つ。

「わー！」

そんな公園の園路を銀髪のおバカさんがタツタカ走ってゆく。

見た目は文句なしの美少女なのに、両手を上げて口を開けて走る様は本当にバカっぽい。

「ま、待ちなさい！ 走ると危ないって言ってるでしょ！」

声を張り上げながらおバカさんを追いかける金髪の可愛い女の子。

うん、こっちはまともだ。

「ふふ、アリスちゃん楽しそうです」

走る二人を見ていたイリスさんは、嬉しそうに目を細めて呟いた。

バカっぽいのはこの際置いておくとして、確かに楽しそうだ。

「どうします？ 見つかるであれなんで、少し離れた場所から見守っていた方がいいと思うんですけど」

そうイリスさんに問いかけた。

おバカさんは遊ぶのに夢中なようだし、ありすはおバカさんの世話を焼くので精一杯のようだし、近づいてもたぶん気付かれないとは思うけど。

「あまねさん、実はさっきから言いたいことがあったんです」

そう言って俺を見たイリスさんは、なぜかムツとしていた。

え？ 俺なんか怒らせるようなことを言いました？

「二人きりの時は私を妹として扱ってくれるって約束しましたよね？ それなのに私をイリスさんなんて他人行儀に呼んで、丁寧語で話して、約束と違います」

プンプンと怒りながら話すイリスさんは、言い終ると上目使いで俺を睨んだ。

そう言えばそんな約束をしましたね。

でも年上の女性を妹として扱うって……。

だけど約束しちゃったしなあ。

「わ、わかったよ、イリスちゃん」

顔が引き攣るのを感じながらイリスさんに答えた。

「はい！ あまねお姉ちゃん！」

本当に嬉しそうに笑いながら声を張り上げたイリスさんは、恋人繋ぎをしている俺の手をギュウツと強く握り、俺の肩にコテツと頭を預けてきた。

うう、ありす達は何時頃までデートするんだろう。

あまり遅くなる前に帰宅して欲しい。じゃないと俺の身が持たないかもしれない。

女の子になったら修羅場だった件 - 第五十九話 ありすとアリスがあまねとイリスになった件

口の周りをベタベタに汚しながら、もっちゃもっちゃとパスタを食べる百合園さん。

「ちょっと！ 口の周りを拭きなさいよ！」

百合園さんの対面に座っているありすが、百合園さんに向かって声を張り上げる。

「このパフタおいひいれす！」

口の周りがベタベタなのにまるで気にしていない様子の百合園さんが、ありすに向かって満面の笑みを浮かべて声を上げた。

「あー、もう！」

見かねたのか、席を立ったありすが百合園さんの隣に座り、ベタベタな口の周りをナプキンで拭いた。

スプーンとフォークを持っている百合園さんは、特に抵抗することも無く、ありすから口の周りを拭かれている。

二人がいるのはイタリアンレストラン。

公園でひとしきり遊んだ二人は昼食を摂ることにしたようだ。

そして俺とイリスさんも同じレストランにいる。

しかし驚いた。あのありすがあそこまでかいがいしく百合園さんの面倒を見るなんて。

公園で遊んでいた時もずっと百合園さんに世話を焼いていたし、パスタを食べている今現在、百合園さんの口の周りを拭いてあげている姿はまさにお姉さんだ。

「やっぱりありすちゃんにも、あまねさんの血が流れているんですね」

嬉しそうに二人を見つめていたイリスさんが、俺を見るとにっこりと笑って呟いた。

ありすのことならなんでも知っているつもりだったけど、今のありすは俺の知らないありすだ。

それが凄く嬉しくて、でも少し寂しくて。

ありすの成長を目にして寂しいと思うのが、俺のダメな所なんだよなあ。

「喉が渴きました！」

唐突に声を上げる百合園さんと、ジト目で溜息を漏らすありす。

「わ、わかったわよ。何が飲みたいの？」

百合園さんと自分のコップを持ったありすが、溜息交じりに百合園さんに問いかける。

「アリススペシャルです！」

「はあ？」

「アリスが好きなジュースを完璧な割合で配合した究極のドリンクです！」

「なにそれ。そんなの知らないわよ」

「お姉ちゃんなら知ってます！」

「私はあんたのお姉ちゃんじゃないし」

キリッと表情を引き締めて必死に訴える百合園さんと、呆れたようなジト目で呟くありす。

とそこで不意にイリスさんが席を立った。

「アリスちゃんが私を呼んでいます」

そう言って二人の方へと向かって歩き出したイリスさんを見て、焦って席を立った。

「い、イリスさん、行ったらダメですって」

イリスさんの手を掴み、小声で問いかけたけど、イリスさんが止まらない。我を忘れていたようだ。

どうしようと思い、そこであることを思い出した。

「イリスちゃん、お姉ちゃんの言うことを聞きなさい。言うこと聞かないと、めっ、だからね」

羞恥に駆られつつイリスさんに言い聞かせる。

ハッとしたイリスさんが立ち止まり、俺を見るとポッと頬を染めた。

「は、はあい、お姉ちゃん」

嬉しそうに返事をしたイリスさんは、俺に近寄るとそのままギュッと抱き着いてきた。

ちょ、イリスさん、ここお店の中なんですけど。

「ね、ねえ、あの二人姉妹らしいよ」

「お姉ちゃんの方が幼くない？」

「ていうか、妹ちゃん銀髪なんだけど」

「ま、まあ、世の中には色んな姉妹がいるから」

「にしたってさすがに無理があるような……」

そばの席に座っている女の子達が、俺達をチラ見しながらヒソヒソ声で話して

いる。

俺とイリスさんが姉妹で、しかもイリスさんが妹って設定は、確かに無理があると俺も思う。



食事を済ませた二人は、映画を観に行く、と思いきや――。

「ちょ、ちょっと、そろそろ映画館に行かないと！」

ありすを映画に誘ったのは百合園さんなのに、肝心の百合園さんはふらふらと商店街に吸い寄せられてゆき、ありすが映画の時間を気にして焦るというカオスな状況になっている。

「あ！ あの服お前に似合いそうです！」

「お前って言うな！ お前にお前呼ばわりされたくないんだけど！」

百合園さんにお前呼ばわりされて怒るありす。

「じゃあなんて呼べばいいですか？」

その百合園さんの問いかけに、ありすがキョトンとした。

言われて気付いたけど、そう言えば二人が名前呼び合っている所を見たことが無い。

でもそれはそうだろう。二人の名前が「ありすとアリス」なんだから。

二人とも友達を名字で呼ぶようなキャラじゃないし、かと言って名前で呼ぶと自分の名前を呼ぶことになっちゃうし。

だから“あんた”とか“お前”とか“バカ”とかになっちゃうんだろうな。

困り顔で悩むありす。

名前で呼ぶと区別が付かないから名字で呼ぶしかないけど、それは嫌なようだ。

「そうだ！ 良いことを思い付きました！」

不意に百合園さんが声を張り上げ、ありすがビクッと震えた。

「な、なによ、良いことって……」

ジト目のありすが百合園さんに問いかける。

「二人きりの時だけ、お互いにお姉ちゃんの名前を借りるって言うのはどうですか？」

その百合園さんの提案に、ありすの目が点になった。

お姉ちゃんの名前を借りるって、よくそんな発想が出てくるな。

「もう、アリスちゃんったら」

二人の様子を黙って見つめていたイリスさんが、嬉しそうに頬を染め、俺の腕をツツツした。

「お、お姉ちゃんの名前を借りるって、じゃあ私は……」

「あまねです」

呟いたありすに答える百合園さん。その答えを聞いたありすの顔が、一瞬で真っ赤になった。

「わ、私があまね……」

「そうです。そして私はイリスです。これならわかりやすいですし、お互いに嬉しいです」

お互いに嬉しい。その百合園さんの言葉を聞いたイリスさんは目を見開いた。

お姉ちゃんに無関心なフリをしていた百合園さんが、イリスさんの名前を借りて嬉しいと言ったのだ。

まさにツンデレがデレた瞬間である。

口元を手で覆ったイリスさんは、赤い瞳からポロポロと涙をこぼし、細い肩を震わせながら必死に声を押し殺している。

そんなイリスさんの肩に手を回した俺は、そっと抱き寄せた。

俺に抱き寄せられたイリスさんは、何も言わず俺の肩に顔を埋めた。

よかったね、イリスさん。あなたの妹はあなたのことが大好きみたいですよ。

「じゃあお互いに呼んでみますか」

お姉ちゃんが嬉し泣きしているなんて知る由も無い百合園さんが、そうありすに問いかけた。

「ま、まあ、いいけど……」

ジト目で頬を染めているありすが、腕を組み、唇を尖らせながら答える。

「あまね」

そう百合園さんがありすに呼びかけ、ありすの顔がボンッと真っ赤になった。

「な、なな、なによ、イリス」

真っ赤ながらも、どうにか百合園さんに呼びかけるありす。

イリスと呼ばれた百合園さんは、頬を染めて視線をそらし、恥ずかしそうに指で頬を搔いた。

二人の間に流れる気まずそうで、でも妙に甘酸っぱい空気。

「え、映画、そろそろいこっか、イリス」

「そ、そそ、そうですね、あまね」

恥ずかしそうに会話を交わした二人は、お互いに視線をそらして頷き合い、そして――。

「し、心配だから手を繋いであげる」

「あ、ありがとうございます」

ありすが右手を差し出しながら声を上げ、頷いた百合園さんがそっとありすの手を握った。

お互いに真っ赤な顔で、お互いに視線を合わせようとしなない二人は、でも息ピッタリに歩き出した。

二人とも可愛いなあ。

そんなことを思いつつ、俺の肩に顔を埋めてえぐえぐと泣いているイリスさんの頭を優しく撫でた。

女の子になったら修羅場だった件 - 第六十一話 愛人の定義を間違っている件

対峙する金と銀。

夏休みも終わり、始業式の今日、金のありすと銀のアリスが廊下で鉢合わせしてしまった。

大勢の生徒達が固唾を飲んで二人を見守っている。

「ダブルアリスが衝突したってことは……」

「ほぼ確実にあまねさんが仲裁に入る」

「ああ、新学期早々あまねさんのお姉ちゃん成分を堪能できるなんて……」

静寂の中、ヒソヒソと聞こえる声。

みんな俺が仲裁に入るのを期待しているようだ。

「ソラ、あんた学校にまでその帽子被ってきたの？」

「当たり前だ！ 私はプロの昆虫ハンターだからな！」

「だよねえ。プロのハンターだよねえ」

大勢の生徒が固唾を飲んで静まり返っているのに、まるで緊張感の無い三人。

まあ、ありすと百合園さんが対峙した所で、どうせ大したことにはならないからな。

なにせ手を繋いでデートするくらい仲が良くなっちゃったんだから。

「ねえねえくうちゃん、私ね、実は透視能力者なの」

「ええええ！？ 本当かあ！」

唇に人差し指を当て、片目を閉じて話す砂庭さんに、驚愕の声を上げる夜乃宮さん。そんな二人をジト目で見ている高梨さん。

「むむむ！ 見えました！ 凜ちゃんは制服の中にヒヨコのTシャツを着ています！」

「んな！？」

ビシッと高梨さんを指さして声を張り上げた砂庭さんに、高梨さんがビクッと震えて顔を引き攣らせた。

「え、江奈！ あんたそれ透視じゃなくてただの予想でしょ！」

「透視です！ 凜ちゃんは間違いなくヒヨコのTシャツを着ています！」

「だ、だから、あまねからもらったTシャツだから嬉しくて始業式に着てくるって予想してただけでしょ！」

砂庭さんの言葉に、顔を真っ赤にさせて反論する高梨さん。

高梨さん、砂庭さんにまんまと乗せられて本音を言っちゃってますよ。

その、喜んでもらえて嬉しいです。

「さあくうちゃん、確認してみよう！」

「そうだな！ 当たったら江奈は超能力者だな！」

「ちょ！？」

砂庭さんと夜乃宮さんのやり取りを聞いた高梨さんが、自分を抱き締めて身を引いた。

「凜！ Tシャツを見せろ！」

「や、やめ！ ちょ！ ダメ！ ダメだって——ひゃああああ！」

夜乃宮さんが高梨さんに跳びかかり、逃げようとした高梨さんだけど、小さくてすばしっこい夜乃宮さんから逃げられず、そんな高梨さんに跳び付いた夜乃宮さんは、高梨さんの制服の中にズボット頭を突っ込んだ。

「あ！ほんとだ！ ヒヨコのTシャツを着てる！ 江奈は凄い！ 本物の超能力者だ！」

「い、いいじゃない！ 別に着たっていいじゃない！ Tシャツは着るための物なんだからあ！」

ヒヨコのTシャツを着ていることを夜乃宮さんに暴露された高梨さんは、燃えるような真っ赤な顔に涙目で悲鳴染みた叫びを上げている。

いや、まあ、うん。着たって別にいいというか、着てもらうためにあげたわけだし。

そう思いつつ、ジト目で砂庭さんを見たら、口元を手で押さえながらプンプンと笑っていた砂庭さんが、俺の視線に気付いてピースをした。

砂庭さん、楽しそうですね。

「みりす」

百合園さんの声が聞こえ、そう言えばありすと対峙していたんだと思い出し、視線を向けた。

「みりすってなによ」

腕を組み、ふんと鼻を鳴らしたありすが、百合園さんを見つめながら声を上げた。

「水無月ありすだから、略して“みりす”です」

「ふうん」

百合園さんの言葉に、特に反抗する様子も無く声を上げるありす。

「私は百合園アリスだから、略してユリス。そうお互いを呼びませんか」

百合園さんの言葉を聞き、なるほど、と思った。

二人はありすとアリス。名前が同じだ。

デートの時、お互いを姉の名前で呼ぼうと言っていたけど、それは二人きりの場合だろうし、みんなの前で姉の名前を使うわけにもいかないだろう。

だから百合園さんは新しい呼び方を考えてきたんだ。

みりすとユリスか。

わかりやすいし、いいんじゃないかな。

「別にいいわよ、ユリス」

「あなたならそう言ってくれると思っていました、みりす」

すんなりと受け入れたありすと、そんなありすににっこりと笑いかける百合園さん。

「そろそろ始業式が始まるから、講堂に移動しないと」

「そうですね」

ありすの言葉に素直に頷く百合園さん。

「ほら」

ありすが百合園さんに向かって右手を差し出した。

「あんた危なっかしいから、講堂まで連れて行ってあげる」

「えへへ、ありがとうございます」

ありすの言葉に嬉しそうに笑った百合園さんは、差し出されているありすの手を取った。

手を繋いだ二人が歩き出し、集まっていた生徒達が無言で道を譲る。そして呆然としながら二人を見送った。

ケンカが始まるとばかり思っていたであろう生徒達。だが犬猿の仲だったはずの二人が、仲良く手を繋いで行ってしまったのだ。

生徒達にしてみれば、前代未聞の珍事件だろう。

夏休みをと共に過ごした仲間なら、特に驚くことでもないんだけど。

現に――。

「みりすとユリスだって」

「それいいねえ。二人を呼ぶ時、どう呼べばいいか一瞬迷っちゃうこともあったし」

「みりすとユリスか！ わかった！ 今度からそう呼ぶ！」

三人は二人の変化にまったく驚いていない。

でも他の生徒達にとっては前代未聞の珍事件なわけで、学校中が大騒ぎになってしまった。

それと騒ぎの種がもう一つ。

以前ショッピングモールに行って保母さんのコスプレをした時、何者かが隠し撮りをして、その写真が廊下に張り出された事件があった。

それと同様の事件が今回もあったのだ。

――あまねお姉さまの夏休みと分裂する百合園アリス！

そんなタイトルと、白く大きな紙に貼られた大量の写真。その写真には、俺と百合園さんとイリスさんが写っていた。

分裂って……。

まあ確かに百合園さんとイリスさんは似ているけど、身長が違だし、表情も違だし、それに百合園さんの方がだいぶ幼い。

パッと見似ていると思っても、よく見れば別人だとすぐにわかる。

それにいくら百合園さんだってさすがに分裂はしない。

だから分裂うんぬんで騒ぎになったわけじゃない。

騒ぎになった理由はもっとずっと単純だ。

写真に写っていたイリスさんのあまりの美しさに、二大美少女を超える美女が出現した、とそっち方面で騒ぎになったのだ。

それと俺とイリスさんが手を繋いでいる写真や、イリスさんが俺の頬にキスをしている写真も貼られていて、水無月あまねに愛人発覚、という噂が立ってしまった。

ちょっと言わせてもらいたいんだけど、愛人って言うのは、結婚している人が別の異性と関係を持った時に使う言葉じゃないんですかね。

俺は結婚なんてしていないし、そもそも恋人すらいない。しかも今の俺は心はどうあれ体は女で、イリスさんも女性。

とにかく突っ込みどころが多過ぎると思うんですけど。



始業式も無事終わり、さて帰ろう、と言うことで自分の席に座って帰り支度をしていたら、高梨さん達が近寄って来た。

俺の席の前に立ち、俺をジト目でジーツと見おろす高梨さん。その隣に立っている砂庭さんはえぐえぐとワザとらしく嗚咽を漏らし、泣いたフリをしている。

そして俺の膝の上に乗った夜乃宮さんが、リズムを刻むように体を揺らしながら足をパタパタさせている。

「あまねちゃん、これはどういうことでちゅか？」

ジト目の高梨さんが、持っている紙をヒラヒラと振りながら問いかけてきた。

高梨さんが持っているのは、廊下に貼り出されていた写真の一枚。

俺とイリスさんが手を繋いでいる写真だ。

絶対に何か言われると思っていました。でも何も言われなかったからそのまま知らんぷりして帰ろうと思っていたんだけど、やっぱりダメだったか。

イリスさんとのデートのことは、三人には言っていなかったんだよね。

黙っているつもりだったけど、写真でバレてしまった。

どうしよう。

「いちゆのまに親密になってたんでちゆかねえ？ 凜ちゃん聞いてないでちゆねえ」

ジト目で俺を見おろしている高梨さんが怖い。でもどうして赤ちゃん言葉なんだ。

「うう、あまねちゃん酷い！ 一緒にお風呂に入って一緒に寝た仲なのに、あれは全部遊びだったんだね！」

泣きマネをしている砂庭さんがワザとらしく声を上げる。

遊びって、あんたら実際うちに遊びに来たんでしょ。遊び以外のなんだって言うんだ。

「ナマコも面白かったけど、やっぱりミヤマだよなあ」

足をパタパタさせながら呟く夜乃宮さん。

夜乃宮さんは俺の愛人問題に興味が無いようだ。

いや、愛人じゃないけどね。

「ぷぷっ」

それまで泣きマネをしていた砂庭さんが、口元に手を添えて嘔き出した。

「なーんて、ちゃんとありすから聞いたわよ。ああ、みりすか。とにかく、夏休みの終わりまでお疲れさまでした」

そう言って高梨さんがにっこりと笑った。

なんだ、ありすから聞いていたのか。知っていて俺をからかったわけだ。

別にいいけど、あんまりからかうとヒヨコのTシャツ返してって言っちゃうぞ。

「お、怒った？」

俺の雰囲気では何かを察したらしい高梨さんが、顔を引き攣らせながら問いかけてきた。

「べえつにい」

別に怒ってはいないけど、からかわれたお返しに、思わせぶりに声を上げてプイツとそっぽを向いた。

「あわわわわわわわわわわ！」

俺がふて腐れたと思ったらしい高梨さんが慌てふためいている。

一方ふふふと笑っている砂庭さん。

やっぱり砂庭さんに演技は通用しないか。

「冗談だよ。今度一緒に遊びに行こうね」

そう言って高梨さんに笑いかけると、高梨さんは涙目ながらもパアッと満面の笑みを浮かべた。

高梨さんって割と単純だよなあ。

そこがまた可愛いんだけど。

女の子になったら修羅場だった件 - 第六十二話 ギャルの本来の意味はみんな割と知らない件

キッチンに立つありす。その後ろ姿を見ていると、自然と顔が綻んでしまう。

『アイツのお弁当、お姉ちゃんが作ってあげてるでしょ？ お姉ちゃんにばかり負担をかけたくないから、アイツのお弁当は私が作るよ』

昨日の夜、ありすがそんなことを言い出した。

俺の負担を減らしたいと言うのも本音かもしれないけど、アイツさんに弁当を作ってあげたいのだろう。

ちなみにアイツさんとは百合園さんのことだ。

当然ながら、俺はありすの意見に賛成した。

しかし、ありすの成長を感じてから、その成長速度がどんどん上がっているように思える。

それは喜ぶべきことであり、寂しいと思うのは間違いだとわかってはいるんだけど、お兄ちゃん、やっぱりちょっと寂しい。

こんな時、奏くんならどう思うだろう。



しょんぼりしながら俺の隣をトボトボと歩くありす。

昨日の夜から始めたお弁当制作は、ありすの思うようにいかなかったようだ。

失敗作は俺や母さんが食べ、一番上手くできた物を持ってきたようだけど、でもしょんぼりトボトボしているのを見れば、納得できていないのがわかる。

初めて作ったにしてはけっこう上手くできたと思うんだけどな、お兄ちゃんは。

失敗作だって見た目がちょっと悪かっただけで、味はそんなに悪くなかったし。

「ごめんね、お姉ちゃん……」

やや俯き加減で歩いていたありすが、溜息交じりに呟いた。

え？　なんで俺に謝るんだ？　お弁当制作が上手くいなくて落ち込んでいたんじゃないのか？

「お弁当を作るのがあんなに大変だなんて知らなかった。その他にもお姉ちゃんはお掃除やお洗濯もやってるし。それに引き替え私は……」

そう呟きながら盛大に溜息を漏らすありす。

てっきりお弁当制作が上手くいなくて落ち込んでいるのかと思っていたけど、俺のことを思ってくれていたのか。

ありすは優しい良い子だなあ。

「人には向き不向きってものがあるし、それに目的も色々だよ」

「え？」

ありすの頭を撫でながら語りかけると、顔を上げたありすが俺を見た。

「みんなの喜ぶ顔が見たいから。それも目的ではあるけど、でもお姉ちゃんの場合は自分のためでもあるんだ」

「自分のため？」

「そう、自分のため。お料理やお掃除やお洗濯は、お姉ちゃんが自分を表現するための手段なんだ」

「自分を表現するための手段……」

俺の言葉を小声で繰り返すありす。

俺には特技と呼べるものが無かった。

自分ができることは何か。自分が表現できるものは何か。

そう考えた時、本当に何も無くて落ち込んだ。

俺だって自分だけの何か欲しかったんだ。

でも何も無い。何をしたらいいのかもわからない。

なら誰でもできることから始めてみよう。

そう思って始めたのが料理や掃除や洗濯、つまり家事だ。

父さんが単身赴任でほとんど家にいないから、母さんの負担を少しでも減らしたいって思いもあったし、母さんが父さんの所に行っても、ありすに不自由させないようにという思いもあった。

自分を表現する手段であり、誰かのためにもなる。

地味だけど一石二鳥だ。

「ありすが思っているほど、お姉ちゃんは聖人君子じゃないってことだよ」

ありすのためであり、母さんのためでもある。母さんの負担を減らせば父さんのためにもなる。それは間違い無い。だけどそれだけじゃない。

家事は俺と言う存在を表現する大切な手段なんだ。

「自分を表現するための手段。考えたことも無かった……」

正面を見つめ、独り言のように呟くありす。

「私にできること。私にだけできることって何かな……」

そのありすの呟きは、自分に問いかけているようだった。

悩むのは悪いことじゃない。悩んだからって必ず答えが見つかるわけじゃないけど、望んでいた答えとは違う別の何かが見つかるかもしれないからね。



校門のそばに人だかりができていた。

校門のそばで人だかりと言うと、真っ先に思い浮かぶのは百合園さんだ。

また何かやっているのかと思い、ありすと一緒に近寄った。

すると人だかりの中心には予想外の人物がいた。

集まっているのは女子生徒ばかり。その中心にいたのは夜乃宮さんだった。

「おはよ、あまね」

ジト目で俺に挨拶をする高梨さん。その隣には砂庭さんがいて、にこにここと笑いながら手を振っている。

笑っている砂庭さんだけど、その笑顔が引き攣っているように見えると言うか、疲れているように見えると言うか。

高梨さんはともかく、あの砂庭さんが疲弊するなんて何事だ。

「お、おはよう。で、これはなんの騒ぎ？」

挨拶を返しつつ高梨さんに問いかけた。

「見ていればわかるよ」

ジト目でボソッと呟く高梨さん。そしてあははと乾いた笑い声を上げる砂庭さん。

見ていればわかる？

首を傾げながら夜乃宮さんを見た。

「ね、ねえソラちゃん。ギャルになっちゃったって言うのは本当なの？」

夜乃宮さんを取り囲んでいる女子生徒の一人が、恐る恐ると言った様子で夜乃宮さんに問いかけた。

「そうだぞ！」

オオクワガタのアップリケが付いた黒い帽子を被っている夜乃宮さんが、両手を上げて元気に声を張り上げた。

そうだぞ、って夜乃宮さんは海で遊んで日焼けをただけで、ギャルになったわけじゃないだろ。

「ど、どうしよう。ソラちゃんがギャルになっちゃったよお……」

「純真無垢なみんなのソラちゃんはもういないの……？」

「夏休みが、夏休みがソラちゃんを狂わせちゃったんだ……」

呟く女子生徒達と聞こえる嗚咽。そしてジト目で溜息を漏らす高梨さんと、笑顔を引き攣らせる砂庭さん。

なんだこれ？

「ソラはギャルになったわけじゃない、って何度説明しても、後から後から聞かれて。さすがに面倒になって本人に任せたらご覧の有り様よ……」

ジト目で呟く高梨さんが、ふふふと乾いた笑い声を上げた。

ああ、なるほど。

褐色に日焼けをした夜乃宮さんを見た生徒達が、ギャル化したのかと思って心配して集まってきているのか。

昨日はあまり騒ぎになっていなかったけど、水面下で噂が広まっちゃったんだろ。そして今日それが爆発しちゃったってわけだ。

夜乃宮さんは不本意かもしれないけど、とにかく愛らしい夜乃宮さんはみんなのマスコットの存在だからな。

そんな夜乃宮さんがギャル化したという噂を聞き付けた生徒達が次々と押し寄せ、ギャル化したわけじゃない、と高梨さんや砂庭さんが説明していたけど、際限が無いから嫌になって説明を夜乃宮さん本人に任せただけだ。

結果、場がカオスになっちゃった、と。

砂庭さんが疲弊するくらいだから、すでに相当数の生徒達の相手をしたんだろう。

「あまね、なんとかして……」

そう言って高梨さんが泣き付いてきた。砂庭さんも乾いた笑みを浮かべながら両手を合わせている。

よしよし、よく頑張りました。

「くうちゃん、おいで」

そう声を上げると、夜乃宮さんを取り囲んでいた女子生徒達が一斉に振り返った。

「あまねさんだ……」

「あまねさんが来たよ……」

「あまねさんがいたのに、どうしてソラちゃんが……」

俺を見て悲しそうに呟く女子生徒達。

「あまねだ！」

俺に気付いた様子の夜乃宮さんが、俺に向かってタカタカと駆け寄って来た。そして跳び付いて来た。

そんな夜乃宮さんを抱き留める。

「くうちゃんはギャルになっちゃったの？」

「そうだぞ！」

俺の問いかけに満面の笑みを浮かべて即答する夜乃宮さん。そして周囲から聞こえる嗚咽が大きくなった。

「ギャルってどういう意味？」

「若くて元気な女って意味だぞ！ 辞書にそう書いてあった！」

夜乃宮さんの返答を聞き、やっぱり、と思った。

若くて活発な女の子。それがギャルの本来の意味であり、夜乃宮さんが言ったことは正しい。

夜乃宮さんが常に持ち歩いている昆虫図鑑。

いったい何度読み返したのかボロボロになっているその図鑑を見て、夜乃宮さんは本を読むのが好きなんだな、と思っていた。

恐らく図鑑だけではなく、書籍や辞書なんかもよく読んでいるのだろう。

昆虫系で言うと、俺もファンブル昆虫記の日本語訳を読んだことがあるけど、とても優しく詩的で美しい文章で表現されていた。

そう言ったものを好んで読んでいるから、だから夜乃宮さんの心はとても綺麗なんだ。

「そうだね、ギャルは若くて元気な女の子って意味だね」

「そうだぞ！」

俺の問いかけに満面の笑みを浮かべて大きく頷く夜乃宮さん。

ああ、愛おしい。

守りたい、この純粋な笑みを。

そんなことを思いつつ、夜乃宮さんの頬に自分の頬をぴとつくつけた。

まるで赤ん坊のようにスベスベで柔らかい夜乃宮さんの肌。

嬉しそうに笑った夜乃宮さんが、スリスリと頬擦りをしてくる。

とそこで、ワッと歓声が上がった。

「そうだった！ 私がバカだった！ そばにあまねさんがいるのにソラちゃんが道を踏み外すわけがなかった！」

「明るく元気な女の子がギャルなら、ソラちゃんは誰よりもギャルだよ！」

「そうだよ！ ソラちゃんは誰よりも立派なギャルだよ！ 天使と書いてギャルと読むんだよ！」

わーわーと黄色い歓声を上げながら、俺達に向かってパチパチと拍手をしている女子生徒達。

大袈裟だなあ。

「お姉ちゃんはやっぱり凄いね……」

ポツリと聞こえた声に視線を向けると、俺を見つめているありすが微笑んでいた。

笑ってはいるけど——。

「ありす？」

そのありすの微笑みは、とても儂くて、そして今にも消えてしまいそうで、心に妙な不安が広がった。

女の子になったら修羅場だった件 - 第六十三話 電話をしただけマシな件

昼休み、いつものように中庭の東屋で弁当を食べることにした。

ところが、ありすが用事があると言い出した。

絶対に変だ。

そう思った俺は、ありすの様子が気になると高梨さんに告げ、ありすを追いかけることにした。

デートの時もそうだけど、心配しすぎかもしれない。

だけどありすの儂げな微笑みがどうしても気になった。

それに、もしもがあってからでは遅いんだ。



ありすが向かったのは、^{ひとけ}人気の無い校舎裏の非常階段のそば。

そしてそこにいたのは――。

「呼び出しておめん」

待っていた人物に声をかけるありす。

「別にいいですよ」

ありすの言葉に答えたのは百合園さんだった。

「これ、あんたの分のお弁当」

そう言って、ありすは手作りの弁当を百合園さんに差し出した。

「わあ、あまねさんからですか？ ありがとうございます」

俺が作ったと思っているらしい百合園さんが、満面の笑みを浮かべて弁当を受け取った。

百合園さんの勘違いを訂正しようとしないうち。

どうして。あんなに一所懸命作ったのに。

「どうしてみんなと一緒に弁当を食べないんですか？」

その百合園さんの問いかけに、ありすは答えなかった。その代わり非常階段に腰を降ろした。

「何か悩み事ですか」

そう呟いた百合園さんは、ありすの隣に腰を降ろした。

何も言わず、ただ正面を見つめているありすと、そんなありすを特に気にせず、楽しそうに弁当の包みを開け、さっそく食べ始める百合園さん。

「私には何も無いんだよね。お姉ちゃんと違って、私には何も無い……」

そうありすがポツリと呟き、ドキッとした。

呟いたありすの表情が、まるで今にも泣き出しそうなほどに悲しそうだったんだ。

何も無いって、ありすは可愛いじゃないか。うちの学校の二大美女の一人なんだぞ。そしてそれは望めば誰でも手に入れられるものじゃない。

平凡な俺と違い、ありすは十分すぎるほど非凡だ。

「なんですかいきなり。哲学にでも目覚めたのですか」

弁当をパクパクと食べている百合園さんが、口をもごもごさせながら声を上げた。

「最近、お姉ちゃんが眩しいの。昔から素敵なお姉ちゃんだったけど、最近どん

どん魅力的になってるの。それが眩しくて、そして私には何もなくて、何も無いことに気が付いて……」

縮こまるように膝を抱えて震える声を上げるありす。

何を言っているんだありすは。

ありすは優しいし良い子だし可愛いし、良い所を上げればキリがないだろ。

それなのに何も無いだなんて……。

「へえ」

間の抜けた声を上げながら、弁当をパクパクと食べる百合園さん。

「お茶はありますか」

口をもごもごさせながら百合園さんが声を上げた。

「え？ あ、うん」

首を傾げたありすは、頷くとバッグから水筒を取り出した。

「お茶が飲みたいです。さっさと注いでください」

「はあ？」

百合園さんの横暴な態度に、ありすのこめかみにビキッと血管が浮き上がった。

「なんですか、文句あるんですか。私は相談に乗ってあげているんですよ？ お茶を用意するぐらい当然のことです」

「くっ」

無駄に偉そうな百合園さんの態度に、悔しそうに呻きを上げたありすだけど、こめかみに血管を浮き上がらせたままコップにお茶を注いだ。そして引き攣った笑みを浮かべて百合園さんを睨みながらコップを差し出した。

「うむ、それでよいのです」

偉そうに頷いた百合園さんは、ありすが差し出しているコップを受け取り、注がれているお茶をコクコクと飲んだ。そしてふっと満足気に息を漏らした。

ちなみに弁当は綺麗さっぱり平ら^{たい}げてしまったようだ。

「あまねさんは何歳でしたっけ？」

「はい？」

百合園さんの問いかけに、訝しむような顔で声を上げるありすが。

「あまねさんは何歳か聞いているのです」

「双子なんだから私達と同年だよ」

「何歳か聞いているのです」

「だから、私と一緒に十六歳だよ」

しつこく聞いてくる百合園さんに、やれやれと言った様子のありすが答える。

「赤ちゃんだった頃を除くと、だいたい十四年ってところですか」

「なにがよ」

百合園さんの呟きを聞いたありすが、ジト目で問い返した。

「あまねさんが努力し続けた年数です。そしてそれは同時に、あなたを守り続けた年数でもあります」

その百合園さんの言葉にありすが目を見開いた。

「何も無い？ あなたがそう思うのは勝手ですけど、それってあまねさんを侮辱していますよね。努力に努力を重ねてあなたを守り続けてきたあまねさんと、そんなあまねさんに守られ、甘え続けてきたあなた。あまねさんが急激に魅力的になったのは、地道に続けた努力が実り、それが成果として花開いただけです。一方あなたは何もしていない。何もしていないのに何も無いと嘆いています。アホですか？」

淡々と語る百合園さんと、その言葉を黙って聞いているありす。

百合園さんからアホかと言われたのに、ありすの表情にはまるで怒りが見えなかった。それどころか百合園さんの言葉を素直に受け入れ、納得しているように見えた。

「それと、あなたは何かを得てどうしたいのですか。あまねさんと肩を並べたいのですか。並んだらどうするのですか。あまねさんに勝負でも挑みますか。挑んで勝ちたいのですか。あなたを守り続けた人を踏み台にして、あなたは何を指すのですか。何も無いからと言ってあまねさんに勝負を挑み、負かした先にいったい何があるのですか」

その百合園さんの言葉に、ありすはふうと息を吐き出した。そして肩を落とし、まるで憑き物が落ちたような笑みを浮かべた。

「それもそうだね」

そのありすの呟きに、百合園さんがふっと笑った。

「焦って道を見失うなんてよくあることです。でもどんなに迷ってもあなたはあなたですよ」

「あんたが言うと説得力が凄いね。なにせあんたは道を見失えばなしだもんね」

「道を見失うことにかけては一流ですよ、私は」

「それ、自慢できることじゃないでしょ」

会話を交わし、楽しそうに笑い合う二人。

「そっか、十四年かあ。それがお姉ちゃんが努力してきた年数で、私を守り続けてくれた年数。考えたこともなかったなあ」

「私はそれと同じくらいの年数を、お姉ちゃんを悲しませるために使ってしまいました。そう考えると何もしてこなかったあなたの方がまだマシですね」

お互いに笑い合っていた二人は、お互いに呟き、そしてお互いにジト目で溜息を漏らした。

「それはそうと、ダメ元であんたに相談してみたけど、まさか悩みが晴れるとは思わなかったよ。なんにも解決していないけど、少なくとも凄く良い気分。だから一応お礼を言ってあげる。特別にね」

百合園さんを見くだすような目で、はんと鼻を鳴らし、偉そうに話すありす。

「お礼を言っている人の態度ではないと思いますが、一応お礼として受け取っておきます。特別に」

ジト目でそう言った百合園さんは、持っている箸でコンコンと弁当を叩いた。

「あとこのお弁当、六十点です」

その百合園さんの言葉に、ありすの顔が一瞬で真っ赤になった。そしてこめかみにビキッと血管が浮き上がった。

百合園さん、ありすが作った弁当だって気付いていたのか。

「食べるだけのクセに偉そうに……」

「言わないと進歩しませんからね」

苦虫を嚙んだような顔で呟くありすと、ふふんと鼻で笑って声を上げる百合園さん。

「まあいいわ。そのうち泣くほど美味しいお弁当を作ってみせるから」

「それは楽しみです。ちなみに私の評価の上限は百点ですが、あまねさんのお弁当は五百点です。プリンを合わせると千点です。先は長く険しいですよ」

「六十点が千点を目指すって、ほんとに長く険しそうだね……」

怒ったりボヤいたり呆れたり、そして笑い合う。

そんな二人を見つめていた俺は、その場からそっと離れた。

少々俺を持ち上げ過ぎな気もするけど、二人とも晴れやかな顔をしていた。

いがみ合っていた二人だけど、いがみ合っていたからこそ、何度も何度もケンカ

をしてきた二人だからこそ、本音を言い合えるんだ。

そう考えると、二人が過ごしてきた今までの時間は無駄ではなかったんだな。



その日の夜、無性に寂しくなった俺は、奏くんに電話をかけてしまった。

普通に電話に出た奏くんは、当然ながらいつも通りの奏くんだった。

どうしたのかと聞かれ、奏くんの声を聞きたくなると素直に答えた。

『そうか。あまねがお兄ちゃんに会いたいと言うのなら、お兄ちゃんは会いに行くぞ』

そんな冗談を真面目な声で言う奏くんは、やっぱり奏くんだった。

「うん、会いたいな。お兄ちゃんに会いたいよ」

奏くんの冗談に乗ったフリをして、笑いながらそう言った。

正直、奏くんに会いたいと言うのは本音だ。

ありすが急激に成長していて、でも俺の心はその成長に追い付けなくて。

寂しがってはいけないとわかっているのに、無性に寂しくて。

このままだと俺はありすの足を引っ張ってしまいそうで、それが怖い。

その後、適当に世間話をして電話を切った。

奏くんの声を聞いたら少し落ち着いたような気がする。

以前の俺だったら、きっと誰にも相談せず、自分をごまかしていたと思う。

結局ありすのことを相談できなかったけど、電話しただけ前よりマシになったのかな。

女の子になったら修羅場だった件 - 第六十四話 だが断る件

俺は今、猛烈に困っている。

困っているけどそれを周囲に悟られないよう、しゃんと澄まして自分の席に着いている。

どうしよう、困った。本当に困った。

何をそんなに困っているのかと言うと――。

登校した時、内履きに履き替えるために自分の靴箱を開けた。

そして手紙を見つけた。

靴箱の中に入っている手紙。

そう、ラブレターである。

勘違いじゃない。ラブレターかと思ったら実は違ったとか、そんなことはない。

なにせ中身を確認したのだから。

手紙は確かにラブレターであり、俺に送られた物であり、そして差出人は男だった。

自慢じゃないけど、俺はこれまで一度だってラブレターをもらったことが無いし、告白したこともされたことも無い。

はっきり言って、どうしたらいいのかさっぱりわからない。

あ、いや、わかっていることが一つだけある。

それは告白されたら断わると言うことだ。

だって俺の心は男なんだ。それなのに男と付き合えるわけが無いだろ。

断ることは決めているけど、問題は どうやって断るかだ。

俺だって男だからな。経験は無くとも、告白にどれほどの勇気が必要かくらいは理解しているつもりだ。

だから無視はしたくない。

相手の呼び出しに応じ、その想いをしっかりと受け止め、そのうえでキッパリと断らなければ。

できれば相手を傷つけないように。

それが難しいんだよな。

断ればどうしたって傷つけることになる。

だからと言って、変に遠回しに断ったり、思わせぶりな態度を取るのはダメだ。そんなことをすれば、余計に傷つけてしまうことになる。

つまりキッパリ断るのが肝心だ。

でもキッパリ断るってどうやるんだ。

だが断る！ って一度でいいから言ってみたいけど、そんなこと言えるはずもない。

まずは「ごめんなさい」と謝る。ここは決定でいいだろう。問題はその後だ。

どうしてダメなんですか、と食い下がられた時、どう言い訳をするか。

好きな人がいるんです、と言うのが一般的な決まり文句だろうけど、好きな人って誰ですか、と聞かれたら困ってしまう。

なら、今は恋愛に興味が無いんです、と言うのはどうだろうか。

恋愛に興味が出るまで待っています、って言われたら困っちゃうなあ。

恋愛対象が男性では無いんです、と正直に言ったら.....これは絶対にダメだ。きつともっと大変なことになってしまう。

参った。上手い断り方が思い付かない。

放課後に中庭で待ち合わせだから、時間はまだある。それまで上手く断る方法を考えなければ。

だからそれは一先ず置いておくことにして、問題がもう一つあるのだ。

それはラブレターを送ってきた相手。

おとひめかえで
三年の乙姫楓先輩。

名前だけ見ると女の子のように思えるけど、れっきとした男だ。そして有名人でもある。

乙姫先輩は生徒会の副会長なのだ。

生徒会長を支える影の実力者として有名であり、人格者として有名であり、秀才として有名であり、家がお金持ちなことでも有名であり、イケメンとしても有名。

ちなみに身長が高くてスタイルも良く、おまけに運動も得意らしい。

あとメガネをかけている。

副会長と言ったらメガネだろう、やっぱり。

そんな人から告白されたら、普通の女の子なら泣いて喜ぶと思う。

だが俺は男だ。

たとえ玉の輿に乗れると言われても、男と交際することはできない。

でもなんでまた俺なんだ。俺より可愛い女の子なんて五万といるだろうに。

「あまね」

聞こえた声にドキッとした。

見ると俺の席の前に高梨さんが立っていた。隣には砂庭さんもいて、そして夜乃宮さんが俺の膝の上に乗ろうとしている。

どうやらいつの間にか休憩時間になっていたようだ。

そう言えば、女の子って告白されたら友達に相談するケースが多いんだよな。

女の子に告白しようと呼び出したら、友達も一緒に付いて来た、なんて話をよく耳にしたし。

高梨さん達に相談するべきだろうか。

でも断わることは決めているし、それに相手が相手だからな。

副会長からラブレターをもらったなんて言えば、自慢話と取られかねない。それにできれば穏便に事を済ませたい。

やっぱり黙っておいた方がいいかな。

「あまね、朝からちょっと変な気がするけど、何かあったの？」

その高梨さんの問いかけにギクツとした。

落ち着け、平常心だ。

「ナニモナイヨ」

しゃんとした態度を崩さず、にこっと自然に笑って答えた。

「あまね、なんでロボットみたいになってるの？」

ジト目になった高梨さんのその呟きに驚愕した。

自然に振る舞っているつもりなのに、今の俺はロボットみたいになっているのか。

「ははーん、さては誰かに告白されたとか？ しかもその相手が凄い人だとか？」

ニヤリと笑って声を上げた砂庭さんに、顔から血の気が引くのを感じた。

やめて、やめて砂庭さん。俺の心を読まないで。

「ええ！？ あまねに告白！？」

高梨さんが驚愕の声を上げ、教室内がザワッとザワついた。

「あはは、冗談だよお」

そう言ってクスクスと笑う砂庭さん。

本当に冗談なんですか。俺の心を見透かしているんじゃないですか。

「受けるも断るもあまね次第だ。そしてあまねが受けると言うのなら私は応援する。あまねが選ぶ男に間違いなんて無いからな」

俺の膝の上に乗る、足をパタパタさせている夜乃宮さんが声を上げた。

うぐっと呻きを上げる高梨さんと、うんうんと頷いている砂庭さん。そしてザワついている周囲。

秘密にしておくつもりだったのに、なんだか完全にバレちゃったように感じる。

これで相手が副会長だと知られたら、きっと大騒ぎになってしまうだろう。

乙姫先輩。あなたに悪気は無いと思うけど、むしろ俺に好意を抱いているんだろうけど、あえて言わせてもらう。

ほんと余計なことをやってくれたな。

女の子になったら修羅場だった件 - 第六十五話 ヒヨコじゃなくてアヒルな件、と言いつらい件

放課後になり、待ち合わせ場所である中庭へと向かった。

「あまねに告白する勇者とか誰なのかな」

「自分に相当自信が無いと無理だと思うから、運動部のエースとか、あと生徒会の副会長辺りかなあ」

「副会長ってメガネか！ アイツはかなりのメガネだな！」

廊下を歩く俺と、その俺の後を付いて来る三人。

こっそり中庭に向かおうと思っていたんだけど、俺が告白されるのがバレバレで、付いて来てしまったのだ。

ていうか、砂庭さんの推測の中に副会長が入っているし、砂庭さん、あなたやっぱり人の心を読めるんじゃないですか？

「お姉ちゃんに告白するとか何様だよ。ブツ飛ばしてやる」

「あまねさんに告白するとか何様ですかね。ブツ飛ばしてやります」

当然のように付いて来ているありすと百合園さん。

それだけじゃない。

「あまねさんに告白とか勇気あるね」

「下手をすとうちの学校の生徒の七割くらいを敵に回すんじゃない？」

「ダブルアリスと高梨ファミリーを敵に回すとか、相当ヤバイよね」

会話を交わしながらゾロゾロと付いて来る大勢の生徒達。

俺と同じ二年生だけじゃない。一年生や三年生も集まっているようだ。

走って逃げようにも、相手が多過ぎて逃げ切れる気がしない。

「会長、どう思います？」

「うふふ、さあ、どうでしょう」

集結している生徒達の中に生徒会長までいる。

「あまねちゃんに告白とか、そんな風紀が乱れた生徒は殺すしかないな」

「風紀委員長、やっちゃってください」

竹刀を肩に担いで殺気を放っている風紀委員長。

ほとんどの生徒は物見遊山だろうけど、風紀委員長を筆頭に明らかに殺気立っている生徒がチラホラと見受けられる。

副会長、あんた冗談抜きに殺されるかもしれないぞ。



中庭に集まった大勢の生徒達。

もしかしたらうちの学校のほとんどの生徒が集まっているのかもしれない。

そして俺の正面に立っているのは――。

「や、やってくれたわね……」

俺のやや後ろにいる高梨さんが、頬を染めて呟いた。

「これはさすがに応援したくなっちゃうねえ」

高梨さんの隣に立っている砂庭さんが、頬に手を添え、楽しそうに声を上げている。

「なかなかだ！ あれはなかなかの男だ！」

そして元気に声を張り上げる夜乃宮さん。

「ま、まあ、あそこまでやるなら、告白ぐらいは許してあげてもいいかな」

ありす、ありすよ、相手をブッ飛ばすんじゃなかったのか。

「正直一本取られました」

こちら相手をブッ飛ばすと言っていたのに、感心してしまっている百合園さん。

俺の正面に立っている人。生徒会の副会長である乙姫楓先輩は、黄色いヒヨコの被り物を頭に付けていた。

全校生徒に近い大勢の生徒達に注目されている中、頭に黄色いヒヨコの被り物を付けて、真顔で立っているのである。

その度胸は確かに賞賛に値する。

だけど――。

副会長、俺が好きなのはヒヨコじゃなくてアヒルなんだ。

俺がヒヨコ好きだと勘違いしているのは高梨さんだ。

副会長は恐らくその辺りの情報を手に入れ、ヒヨコの被り物を作ったのだろう。

「水無月あまねさん！」

「は、はい！」

副会長が突然声を張り上げ、驚きながら返事をした。

「ヒヨコの国へようこそ！」

その副会長の言葉と同時に、副会長の両手から小さなヒヨコのぬいぐるみがモロモロと湧き出した。

次々と地面に落ちるヒヨコのぬいぐるみが、コロコロと転がってゆく。

そして真顔から一転してドヤ顔になる副会長。

手品ですか。ヒヨコのぬいぐるみを仕込んでいたんですか。

「くっ、可愛い！」

「副会長もやるねえ」

「凄い！ あれは超能力か！」

小さなヒヨコのぬいぐるみを次々と生み出す副会長に、後ろの三人は大喜びだ。

一方ありすは――。

「被り物だけならまだ笑えたけど、あそこまで頑張られると……ちょっと可哀想」

可哀想なものを見るような目で副会長を見ながら呟くありす。

ありすは俺がヒヨコ好きではなくアヒル好きだってことを知っているからな。

ていうか、砂庭さんも知っているんだけどね。

「ふん、女の子を物で釣るなんて最低……ヒヨコがいっぱいですね」

ヒヨコで俺を釣ろうとしている副会長を見て、鼻を鳴らしてプイッと顔をそらした百合園さんだけど、副会長の両手からモロモロと生み出る大量のヒヨコをチラリと横目で見てへらりと笑った。

百合園さんが懐柔されかかっている。

「せいや！」

掛け声をかけた副会長は、勢いよく制服の上着を脱ぎ捨てた。

現れたのはTシャツ。

黄色いヒヨコが描かれたそのTシャツには、「あまねちゃん、僕を可愛がってね、ぴよぴよ」と可愛い丸文字が書き込まれていた。

それを見て思わず手で口元を押さえてしまった。

副会長、あなたはいったいどれだけ頑張って準備したんですか。

俺がヒヨコ好きだと信じて。

「あ、あのTシャツ可愛い！」

「あれは可愛いねえ」

「副会長は面白いヤツだな！」

副会長が着ているTシャツを見て大喜びの三人。

「うう、可哀想で見えてられない……」

真実を知っているがゆえに泣きそうになっているあります。

「あのぴよぴよTシャツ欲しいです！」

そしてほぼ懐柔されてしまった様子の百合園さん。

集まっている大勢の生徒達も、歓声を上げたり拍手をしたりしている。

これは予想外すぎる展開だ。

人前で話すのは生徒会長が主で、副会長が喋っている所って、実は見たことが無かった。

だから副会長はクールで知的な美形、と勝手に思い込んでいたんだけど……。

まさかヒヨコの被り物をして、ヒヨコを生み出すマジックを披露し、アホなTシャツを着て笑いを取るような人だったとは。

それにより、集まっている大勢の生徒達はもちろんのこと、高梨さん達やあります

や百合園さんの心まで掌握してしまった。

どうやら俺は、副会長を甘く見ていたようだ。

「今回はダメだったようですね」

指でクイツとメガネを上げた副会長が、ふっと笑いながらそんなことを言った。

「え？ ダメだった？」

思わず聞き返してしまった。

すると指でクイツとメガネを上げた副会長がフツと笑った。

「あなたを笑顔にすることです」

ヒヨコの被り物を頭に付け、ヒヨコのTシャツを着て、周囲にたくさんのヒヨコのぬいぐるみを転がして、そんな状態でカッコ良さげなことを言う副会長。

「愛する人を笑顔にできないようでは、告白などもってのほか。今回はいさぎよく引き下がります」

そう言って制服のポケットから袋を取り出した副会長は、その場にしゃがみ、転がっている大量のヒヨコをせっせと拾い、袋に入れている。

颯爽と立ち去れば決まっただろうに、せっせとヒヨコを片付けている姿はなんとも間抜けだ。

まあ、生徒会の副会長だもんね。生徒の模範になるべき人が、散らかすだけ散らかして立ち去るわけにもいかないか。

「手伝います」

副会長に近寄った俺は、しゃがむとヒヨコを拾い、副会長が持っている袋に入れた。

予想はしていたけど、そばで見ると確信した。

ヒヨコの被り物や、ヒヨコのTシャツ、それにヒヨコのぬいぐるみは手作りだ。

こんなにたくさん作って。

まるで誰かさんみたいだ。

誰かさんよりも作りは雑だけど。

「あ、ありがとうございます」

頬を染め、クイクイとせわしなく指でメガネを上げながら、微かに震える声でお礼を言う副会長。

大勢の生徒の前であれだけのことをやっても平然としていたのに、俺が近づいただけで緊張しているようだ。

それがなんだかおかしかった。

ヒヨコを拾い終った副会長は、脱ぎ捨てた制服の上着を着直すと、俺を見て姿勢を正し、礼儀正しくお辞儀をした。

ヒヨコの被り物をしているから、態度が真面目なほど笑えてくる。

「それではまた」

そう言って副会長は去って行った。

大勢の生徒達から拍手喝采を浴びながら。

「お勧めですよ、彼は。あまねちゃんの恋人に相応しい実力を持った男だと思いますけどね」

突然そばで聞こえた声に驚きつつ視線を向けると、隣に立っていたのは――。

「こうしてお話をするのは初めてですよ、水無月あまねちゃん」

そう言ってにっこりと笑ったのは、何を隠そう我が校の生徒会長、朝霧真琴先輩あさぎりまことだった。

長い黒髪に切れ長の瞳。

可愛さや美しさなら二大美少女に及ばないかもしれないけど、相手が二大美少女ならの話だ。

朝霧先輩は美人なことで有名であり、しかも優秀なうえに性格も良いともっぱらの評判だ。

こんな素敵な人がそばにいるのに、副会長はなぜ俺を選んだのか。

まあ、人には好みがあるからな。そして副会長はちょっと変わった人っぽいし。

「これはあなたと乙姫くんの問題ですから、私が首を突っ込むべきことではないですよ。と言いますか、私は別件であなたとお話をしたかったんです」

にっこりと笑いながらそう言った朝霧先輩は、スッと俺に身を寄せて来た。

そして――。

「高梨凜花さん。彼女が次期生徒会長選に立候補してくれたら、とっても嬉しいんですけどね」

俺の耳元でそう囁いた朝霧先輩は、パチッと片目を閉じてウィンクした。

「そう言うわけで、いずれまた」

そう言って俺に向かって手を振った生徒会長は、踵を返すと去って行った。

生徒会長は高梨さんに目を付けているのか。

そう思い、振り返って高梨さんを見た。

「副会長、面白い人だったね。それとあのぴよぴよTシャツ、文化祭とかで販売してくれないかな」

「だねえ、面白かったねえ。ぴよぴよTシャツはいらないけど」

「なかなかの男だった！」

砂庭さんや夜乃宮さんと笑顔で会話を交わしている高梨さん。

実は俺も思っていた。高梨さんほどの人がこのまま表舞台に立たずに埋もれてしまってもいいのか、って。

でも中学時代のことが原因で、もう表舞台に立つ気は無いんだと思う。

だけどあまりにもったいない。

「あの副会長、親戚にちょっと似てて癪に障る」

「親戚ですか？ 頭にヒヨコの被り物を付ける親戚がいるんですか？」

ジト目で呟いているありすと、首を傾げながら問い返す百合園さん。

砂庭さん、夜乃宮さん、百合園さん、ありす、そして俺。

今なら高梨さんを支えるメンバーが揃っている。

生徒会長が高梨さんを買ってくれていると言うのなら、一度しっかりと話しておくべきかもしれない。

女の子になったら修羅場だった件 - 第六十六話 希少と言うより変質者な件

「あの副会長、ちょっと奏くんに似てるよね」

俺の隣を歩いているありすが眩き、そしてクスッと笑った。

「悪くないと思うよ、あのメガネ」

そう言って俺を見たありすは柔らかな笑みを浮かべた。

周囲をオレンジ色に染める夕暮れの中、帰宅するためありすと一緒に通学路を歩いている。

誰かさんに似ているから癪に障る。百合園さんに向かってそう言っていたありすは不機嫌そうだった。

でも今は嬉しそうだ。

どうして嬉しいんだ。副会長は俺に告白しようとしたんだぞ。

今回は身を引いてくれたけど、でもまた挑戦する気満々のようだし。

何度告白されても断るけど、でも、もし俺が告白を受け入れたら、ありすはそれでもいいのか。

バカか俺は。何を考えているんだ。ありすは俺のためを思っているんだ。

副会長は真面目で礼儀正しく、それでいて度胸と愛嬌を兼ね備えた凄い人だと思う。

以前のありすなら、俺を独占したくて問答無用で副会長を否定していたことだろう。副会長の文句を言いまくっていたことだろう。

でも今のありすは頭ごなしに否定することなく、俺のためを思い、副会長を認

でも夜乃宮さんは嘘を吐くような子じゃないし。

「そのオオクワは、キミは水無月あまねのお友達のくうちゃんだね、って言ったんだ！　なんでわかったって聞いたら、くうちゃんは優しい子だから昆虫界で人気者なんだよって言ってた！」

パタパタと両手を振って必死に説明する夜乃宮さん。

ほほう、よく喋るクワガタだな。

その巨大なクワガタは、俺のことを知っていて、しかも夜乃宮さんの愛称である“くうちゃん”も知っている。

そして夜乃宮さんが被っているオオクワガタのアプリケが付いた黒い帽子。

俺はある人にこう言った。

『くうちゃんって子が昆虫が好きで、特にクワガタが好きなんだ。だからクワガタのバッチみたいな物があつたらお土産に買っていきたいんだけど』

俺はその人にそんなことを言い、その人は俺の話を黙って聞いていた。

あくる日、地元に戻る間際、その人はクワガタのアプリケが付いた黒い帽子と、カブトムシやクワガタを象ったピンバッチを俺にくれた。

友人が作ってくれた物なんだが、くうちゃんにあげて欲しい。

そう言って。

「あまね！　これを見てください！」

そう言ってその場で回った夜乃宮さんは俺に背中を見せた。

夜乃宮さんはデフォルメされた可愛らしいクワガタの形のナップザックを背負っていた。そのナップザックにはこれまたデフォルメされた様々な昆虫の缶バッチが付いている。

「くうちゃんは良い子だからこれをあげるって！　知らない人から物をもらってはダメなんだぞって言ったら、お兄ちゃんは人じゃなくてクワガタだから大丈夫だよっ

て！ あとくうちゃんにあげるってあまねと約束していたんだって言ってた！ だからもらった！ お礼を言ったら、やっぱりくうちゃんは良い子だねって言ってた！」

俺にナップザックを見せながら大喜びの夜乃宮さん。

これはもう間違い無い。

「お、お姉ちゃん、これって……」

顔を引き攣らせて呟くありす。

ありすも気付いたようだ。ニメートルのオオクワガタの正体に。

「ね、ねえくうちゃん、そのオオクワガタはどこに行ったの？」

身を屈めて夜乃宮さんに問いかけた。

俺にナップザックを見せていた夜乃宮さんは振り返って俺を見た。

「あまねは帰ったぞって言ったら、ありがとう、って言って走って行ってしまった！ クワガタは飛べるのに走って行ったんだ！ 凄い速さでだ！ そのオオクワを追いかけて来たんだけど、そしたらあまねを見つけたんだ！」

両手をパタパタと振って必死に説明する夜乃宮さん。

「な、なるほど……」

その言葉を聞いて頷いた。

巨大オオクワは俺を探していて、夜乃宮さんはオオクワを追って来た。そして夜乃宮さんは俺を見つけた。

と言うことは――。

「近くにいる！」

そう声を上げて辺りを見回した。

巨大オオクワを追っていた夜乃宮さんが俺の元にたどり着いたんだから、先行

していた巨大オオクワはすでに近くにいるということだ。

その俺の予想通り、電柱の陰から黒いモノがはみ出していた。

「あ！ いた！」

俺と一緒に辺りを見回していた夜乃宮さんが、電柱の陰からはみ出ている黒い物体を見つけ、指をさしながら声を張り上げた。

「クワックワックワッ、どうやら見つかってしまったクワ」

クワクワと笑いながら電柱の陰から現れた巨大なクワガタ。

巨大なクワガタと言うより、クワガタの形をした怪人としか思えない。

「オオクワさん！ さっきはありがとう！」

怪しすぎるクワガタ怪人に向かって無警戒に駆け寄った夜乃宮さんが、クワガタ怪人を見上げながらお礼を言った。そしてその場でクルリと回ってクワガタ怪人にナップザックを見せると、嬉しそうに体を揺すっている。

「お兄ちゃんがオオクワだとバレてしまったクワね」

溜息交じりに呟いたクワガタ怪人は、その場にしゃがもうとしたのか腰を曲げた。ところが全身を覆っている外皮のせいでしゃがむことができず、プルプルと震えている。

「くうちゃん、オオクワは希少クワ。中でもお兄ちゃんは世界最大のオオクワなんだクワ。もし人に見つかってしまったら確実に捕獲されてしまうクワ。だから秘密にして欲しいクワよ」

しゃがむのを諦めたのか、中腰でプルプルと震えながら夜乃宮さんに語りかけるクワガタ怪人。

「うん！ わかった！ 秘密にする！」

クワガタ怪人にナップザックを見せていた夜乃宮さんは、振り返ってクワガタ怪人を見上げ、大きく頷いた。

人に見つかったら確かに捕獲されると思うけど、それはたぶん変質者としてだと思ふ。

「お兄ちゃんは今からあまねの家に遊びに行くクワけど、くうちゃんも一緒に行くクワか？」

「うん！ 行く！」

勝手に話を進めるクワガタ怪人。

いやまあ、別にいいけど。

しかし、まさか奏くんが来るとは。しかも夜乃宮さんが喜びそうな変装をして、お土産まで持って。

たぶん俺が電話をして、そして会いたって言ったから来たんだろうけど、俺が気にしないよう、夜乃宮さんにお土産を届けるという理由をわざわざ作ったんだろうな。

ほんと、器用なんだか不器用なんだかわからない人だ。

女の子になったら修羅場だった件 - 第六十七話 初めて妹に甘えてみた件

夜乃宮さんが家に遊びに来ることを奏くんが勝手に決めちゃったけど、結果として助かった。

奏くん色々話したいことがあったから。そしてそのほとんどがありすのことだ。だからありすがそばにいたら話すに話せなかつたらろうし、かと言ってありすに少し離れて欲しいと言うのも嫌だったし。

だけど夜乃宮さんが家に遊びに来たことで、ありすの意識がそっちに向いたのだ。

しかも、どうせなら泊まっていた方がいいんじゃない、と母さんが言ったことで夜乃宮さんが泊まることになった。

そして今現在、ありすは夜乃宮さんとお風呂に入っている。

だから奏くんを俺の部屋に呼び、二人きりで話すことができた。

「ありすが成長しているのに、それを素直に喜べない自分が情けない、か」

クワガタの被り物を脱いだ奏くんは、俺の話聞き、そう呟いた。

「甘えてくるありすを甘えん坊だなんて思っていたクセに、結局それが嬉しかったんだ。そして成長するありすを見て、甘えん坊なままでいて欲しいって思っている自分がいて、それに気付いて……」

それってありすの成長を邪魔しようとしていることに他ならない。

「ふむ」

床に置いたクッションの上に正座をしている奏くんは、俺の話聞いて頷いた。

ちなみに俺はベッドに腰かけている。

「ありすに甘えてもらいたいが、それはありすの成長を阻害することになってしま
う、とあまねは思っているわけだな」

「……うん」

奏くんの言葉に頷いた。

「あまねはお兄ちゃんのことをどう思う？」

「え？」

奏くんの問いかけに首を傾げた。

「急に聞かれても困るかもしれないが、お兄ちゃんのことをどう思っているか、だい
たいでいいから答えて欲しい」

どう思っているって。

「こんな話、奏くんくらいにしか言えないよ。そのくらい頼りにしてる。親戚だけど、
でも、本当のお兄ちゃんだと思ってるよ」

「ふむ」

俺の言葉を聞いた奏くんは真顔で頷いた。

「じゃあお兄ちゃんは自分をどう思っているか言ってみるか」

奏くんが自分をどう思っているか？

「伊織もそうだが、あまねもしっかり者だからな。それは素晴らしいことだと思
うが、お兄ちゃんとしてはちょっと寂しかった」

寂しい。その言葉を聞き、奏くんが？ と思った。

「だからお兄ちゃんは甘えることにした」

「え？」

甘える？ 奏くんは甘えてなんかいないと思うけど。

「お兄ちゃんがかき氷を作って伊織にあげる。かき氷をもらった伊織がそのかき氷を食べる。はた目から見れば伊織が甘えているように見えるかもしれない。でも実際は、伊織がお兄ちゃんをかまってくれているんだ。お兄ちゃんが勝手にやっていることに、伊織が付き合ってくれているんだよ」

そう言って奏くんは笑った。

「ありすはこれまであまねに甘えてきた。そしてあまねからもらったたくさんの愛情を糧に成長しようとしている。なら、お返しにあまねがありすに甘えてもいいんじゃないか？」

「ありすに甘える？」

ありすに甘えるって、そんなことをしたら結局ありすの足を引っ張ることになっちゃうんじゃないのか。

「あまね、縛ることと甘えることは違うと思うぞ」

その奏くんの言葉に、確かにそうかもしれないと思った。

甘えることと縛ることは違うかもしれない。でも俺がありすに甘えたら、結局俺はありすの心を縛ってしまいそうで、それが怖い。

そもそも甘えると言っても、どうやって甘えたらいいのかよくわからない。

「誰かに甘えるのが怖いのかな」

その奏くんの言葉にドキッとした。

「あまねは根っからのお姉ちゃんだからな。甘えられることに自分が存在する意義を見い出している。その一方で、誰かに甘えるなんて考えたことも無い」

甘えられることが自分の存在意義。

確かにそうかもしれない。

ありすが必要としてくれることが、俺にとっての存在意義なのかもしれない。

だから俺は、成長して俺から離れようとしているありすを縛りつけようとしている

んだ。

自分の存在意義を守るために。

「あまねが甘えてきたら、きっとありすは喜ぶと思うぞ。それに、あまねがありすに甘えれば、ありすの心を縛るところか成長に繋がると思うぞ」

「え？」

俺が甘えるとありすが成長する？

「あまねがありすに甘えれば、ありすにとってそれはきっと何よりも嬉しいことだろう。遥かに遠いと思っていた偉大な姉の背中が近くに感じるだろうな。そしてそれは自信となり、成長へと繋がるとお兄ちゃんは思うぞ」

俺がありすに甘えると、ありすにとって自信になる？

そうだろうか、正直よくわからない。

でも奏くんがそう言うのだから、そうなのかもしれない。

「どうやって甘えればいいのか。よくわからなくて……」

そう奏くんに問いかけると、にっこりと笑った奏くんが立ち上がった。そして俺の隣に座ると、俺の頭を撫でた。

「ありすがどこか遠くに行ってしまうそうで寂しい、とでも言ってみたらどうかな」

その奏くんの言葉を聞き、思わず目を見開いた。

どこか遠くに行ってしまうそうで。

それはありすが姉に対して思っていたことだ。

姉がどこか遠くへ行ってしまいそうで、ありすは怯えていたんだ。

そうか。今の俺は、あの時のありすと一緒なんだな。

怯えていたありすは全力で俺に甘えた。その結果が今のありすだ。

甘えたからってありすはダメにならなかった。それどころか成長した。

なら俺も……。

「ありがとう奏くん。ちょっとだけわかったような気がする」

俺の頭を撫でている奏くにそう言うと、奏くんはにっこりと笑って頷いた。

「甘え過ぎるのはよくないことだ。だがあまねはもっと甘えた方がいい」

そしてそう言った。



俺は奏くんと一緒に寝ても別にかまわないんだけど、奏くんは男で今の俺は女だ。

それでも相手が奏くんなら間違いなんて起きないと思うんだけど、奏くんは一階にある和室で寝ることになった。

それと——。

「せっかく泊まりに来たんだから、くうちゃんはお姉ちゃんと一緒に寝たいでしょ？なら私は自分の部屋で寝るよ」

俺の部屋で夜乃宮さんと三人でトランプのババ抜きをしていたありすが、そんなことを言い出した。

奏くんに相談する前なら、きっと俺はありすの意見に同意していたと思う。

でも決めただ。ありすに甘えてみるって。

「三人で寝ようよ」

そうありすに言うと、ありすがキョトンとした。そして困ったような顔になった。

「でも、お姉ちゃんのベッドに三人で寝るのはちょっと厳しいんじゃない？」

そのありすの意見はもっともだけど、ここで引き下がるわけにはいかない。

「ギュウギュウでもいいでしょ？」

そうありすに言うと、困り顔のありすが首を傾げた。

「どうしたのお姉ちゃん」

どうやらありすは俺に違和感を覚えているようだ。

ドクンドクンと激しく鼓動を刻む心臓。

このまま自分の意見を押し通してもいいのか。

やっぱり日を改めて――。

いいや、ダメだ。そんなことをしたら、俺はきっとありすに甘えるタイミングを見失ってしまう。

ここで引いちゃダメだ。

ありすと一緒に寝たいの！

そう言おうとしたその時だった。

「私も三人で寝たいぞ！」

声を張り上げる夜乃宮さん。

「そうそう！ ありすと三人で寝たいとお姉ちゃんも思います！」

夜乃宮さんに便乗し、ありすに向かってそう言った。

「ま、まあ……別にいいけど」

俺と夜乃宮さんから一緒に寝たいと言われたありすは、困惑したような顔で、でも少し嬉しそうに頬を染めて頷いた。



ババ抜きは夜乃宮さんが一等賞だった。

トランプを配り、ババが夜乃宮さんに当たった時以外、夜乃宮さんはとにかくババを引かないのだ。

まるでババがどこにあるか知っているかのように。

次に神経衰弱をやったけど、これまた夜乃宮さんが一等賞。

ゲーム開始直後は三人ともなかなか当たらないんだけど、途中から夜乃宮さんの独壇場になってしまう。

まるで魔法でも使っているかのように次々と当てるのだ。

夜乃宮さんに聞いたら、「一度見たら忘れない」と凄いことをサラッと言い放った。

ババ抜きの時も、どのトランプがババかがわかってしまえば、どれだけトランプを掻き混ぜてもどこにあるかわかってしまうようだ。

どうやら夜乃宮さんは桁違いの記憶力を持っているようだ。

そんなこんなで一通り遊んだ俺達は寝ることにした。

夜乃宮さんを真ん中に、左にありす、右に俺。

ありすが言った通り、いくら夜乃宮さんが小さいとはいえ、俺のベッドに三人で寝るのはけっこうキツかった。

でもそれは俺にとっては好都合だった。

情けない話、ありすに甘えるのは緊張する。ありすと二人きりだったら怖気づいていたかもしれない。

俺に抱き着き、俺の胸に顔を埋めながらくうくと愛らしい寝息を立てている夜乃宮さん。その確かに感じる温もりが、俺に勇気を与えてくれた。

夜乃宮さんが泊まりに来てくれて本当によかった。

「ありす、まだ起きてる？」

「うん」

夜乃宮さんを起こさないよう、静かに声を上げると、ありすが返事をした。

「今日のお姉ちゃん、ちょっと変だと思った？」

「うん」

俺の問いかけに返事をするありす。

「お姉ちゃん、ありすから嫉妬してもらいたかったんだ」

「え？」

俺の言葉にありすが声を上げた。その声には戸惑いを感じた。

「副会長からラブレターをもらって、呼び出されて、告白はされなかったけど、ありすに嫉妬して欲しかった。お姉ちゃんは私だけのものだって言って欲しかった」

その俺の眩きに、ありすは何も答えなかった。

激しく鼓動を刻む心臓。

やっぱり俺は間違っているんじゃないのか。

わからない。正しいのか間違っているのかわからない。

でも甘えるって決めたんだ。

「お姉ちゃん、ありすがいないとダメみたい」

息を吸い込み、そう声を上げた。

それからしばらく経っても、ありすは何も言わなかった。

女の子になったら修羅場だった件 - 第六十八話 言葉を超える想いな件

遠くから聞こえる小鳥のさえずり。

眩しさを感じ、顔をしかめて寝返りを打った。

あれ、俺は眠っていたのか？

昨日の夜、初めてありすに甘えてみたけど、ありすは何も答えてくれなかった。

心配で不安で眠れない、と思っていたけど、いつの間にか眠ってしまっていたようだ。

「おはよう、お姉ちゃん」

聞こえるありすの声。次いで頬にチュッと柔らかなモノが当たった。

ドキッとしつつホッとした。

声からしていつものありすだ。

昨日答えてくれなかったのは、すでに眠っていたからだったのかもしれない。

ゆっくりと目を開け、でも視界がボヤけてよく見えず、何度か瞬きをした。

次第に鮮明になってゆく視界。

「……ん？」

ありすの笑顔が見えて、そして妙に肌色が多いと思って、そして——。

ベッドに腰かけているありすは一糸纏わぬ姿、つまり全裸だった。

え？ なんで？ ここ風呂場じゃないよね？ なんで全裸なの？

混乱しながら身を起こし、自分の部屋であることを確認するために周囲を見回した。

間違い無い。ここは風呂場じゃなくて俺の部屋だ。

「あれ？ くうちゃんは？」

とそこでくうちゃんがないことに気づき、思わず呟いてしまった。

「くうちゃんなら下に降りたよ。オオクワさんとお話がしたいって」

そのありすの言葉に視線を向け、視界に映った肌色に慌てて視線をそらした。

なんで全裸なんだ。着替えの途中だったとしても、普通は全裸でベッドに腰かけたりしないだろ。そもそも下着まで脱ぐ必要は無いだろうし。

「ねえお姉ちゃん。何も言わずにパジャマを脱いで」

「え？」

ありすに問いかけられ、驚いてありすを見そうになった。

パジャマを脱げって……。

混乱する思考の中、鼓動が一気に速まり、勝手に息が荒くなる。

「お姉ちゃん」

「は、はい」

少し強めのありすの声にビクツとしながら返事をした。

「ありすがいないとダメなんでしょ？ なら、ありすの言うことを聞こうね？」

まるで聞き分けのない子供に言い聞かせるような、そんな優しくも強いありすの声。

昨日の夜、ありすは何も答えなかった。それはすでに眠っていたからだと思った

けど、どうやら聞いていたようだ。

ならどうして何も答えてくれなかったんだ。そしてどうして全裸で、どうして俺にパジャマを脱げだなんて……。

「お姉ちゃん、言うこと聞かないとありすが脱がせちゃうぞ？」

「え？ あ、ちょ、ちょっと待って」

脱がせると言われ、焦ってパジャマの上着のボタンを外しにかかった。

脱がせられるなら自分で脱いだ方がいい。

上着を脱ぎ、ズボンに両手をかけ、そこで躊躇した。でもありすの視線を感じ、ズボンを脱いだ。

「ぬ、脱ぎました……」

下着姿となり、右手で胸元を、左手で下腹部を隠し、ありすから顔をそらしたまま声を上げた。

「全部だよ、お姉ちゃん」

「ぜ、全部って……」

ありすの言葉に思わず問い返してしまった。

「じゃあ、ありすが全部脱がせてあ——」

「ぬ、脱ぎます！ 脱ぐからちょっと待って！」

ありすの言葉に焦った俺は、声を上げながらブラジャーを外した。そして右腕で胸を隠しながら左手で下着をズリ下げた。

見られている。ジーンと見られている。恥ずかしくて死にそうだ。

顔が燃えるように熱くなっているのを感じながら、一糸纏わぬ姿となった。

「手で隠しちゃだめ」

「で、でも……」

「だあめ」

手で隠すなと言われ、泣きそうになりながら両手を降ろした。

もう好きにしてください。

ギシッとベッドが軋み、ありすが俺に近寄って来るのを感じ、思わず目を閉じた。

ありすは一体なにを考えているんだ。

ピトッと肌と肌が触れ合うのを感じ、体が勝手にビクッと震え、これまた勝手に身を引きそうになった。

でもまるで逃がさないと言うかのように、ギュウツと強く抱き締められた。

密着するありすの肌。

死ぬほど恥ずかしいと思っていたのに、その羞恥心がなぜかスッと消えた。

代わりに心に広がってゆく安堵感。

「ここにいるよ」

俺を強く抱き締めながら、俺の耳元で囁くありす。

「こうするとよくわかるでしょ？ ありすはここにいるよ。ありすはちゃんとここにいるよ」

聞こえるありすの囁きに、ああそうか、と思った。

ありすは俺のために全裸になり、そして俺に全裸になるように言ったんだ。

俺が不安に駆られ、寂しがっていることを知り、だからありすは俺を安心させるために肌と肌を触れ合わせる方法を選んだんだ。

どんな言葉よりも確かに感じるありすの温もり。

どんな叫びよりも確かに聞こえるありすの鼓動。

ありすは確かにここにいる。

俺のそばにいてくれる。

そうありすの全身が俺に教えてくれている。

「ありがとう、ありす」

そう言ってありすをギュウツと強く抱き締めた。

「うん」

頷いたありすは、ただただ強く俺を抱き締めてくれた。

ありすはもしかしたら一睡もしていないのかもしれない。

俺を安心させるためにはどうしたらいいか。俺の不安や寂しさを取り除くにはどうしたらいいか。

ずっとずっと悩んでいたんじゃないだろうか。

そして導き出した答えは、生まれたままの姿で抱き合うこと。

言葉で伝えるのは大切だ。言葉でなければ伝わらないこともある。だけど時には言葉以上に大切なものがある。

子供が母親に抱っこをせがむように、肌と肌を触れ合わせることで愛情を伝え、その愛情を確かめるんだ。

それは俺が欲していたもの。

俺はきっと、ありすに抱き締めて欲しかったんだ。

ありすはそれに気付いてくれた。

参ったな。どうやらありすは、俺が思っていたよりもずっと成長していたようだ。

「もう少し……甘えていてもいい？」

「うん、いいよ」

俺の問いかけに、ありすは甘く優しい声で答えてくれた。



着替えを済ませ、ありすと一緒に一階へと降り、リビングに入ると——。

「クワックワックワッ」

クワガタ怪人がクワクワ言いながら不思議なダンスを踊っていた。

「くわっ、くわっ、くわっ」

クワガタ怪人と向き合っている夜乃宮さんが、クワガタ怪人のマネをしながら可愛いダンスを踊っている。

何をどうやっても不気味なクワガタ怪人と、何をどうやっても可愛くなってしまう夜乃宮さん。

まあ、二人とも楽しそうで何よりだ。

それはそうとオオクワ怪人さん。ありすに甘えることができたよ。

不安だったし怖かったけど、今はとてもホッとしている。

オオクワ怪人さんにお礼を言いたいけど——。

「クワックワックワッ」

「くわっ、くわっ、くわっ」

二人とも楽しそうだから後にするか。

女の子になったら修羅場だった件 - 第六十九話 くうちゃんは可愛いに一票入れたい件

オオクワ怪人として、夜乃宮さんにお土産を届けるためにやって来た奏くんだけど、それは表向きの話。

俺が会いたって言ったから来てくれたんだ。

凄く嬉しかったし、とても助かった。だけどやっぱり申し訳ない気持ちもある。

だって遠くからわざわざ来てくれたんだ。

と奏くんに素直に言ってみた。

黙っていてモヤモヤするより、言ってしまった方がいいと思ったんだ。

すると奏くんはこう言った。

『今まで会いに来なかったのは、あまねが会いたって言ってくれなかったからだ。言われてもいないのに会いに来たら、まるでお兄ちゃんがストーカーのようだろう？』

俺の頭を撫でながら、冗談交じりにそう言ってくれた。

大したことじゃない、とか、気にするな、じゃなく、今までも会いに来たかったんだよ、って言ってくれたんだ。

普段はとぼけているクセに、ここぞと言う時はほんとカッコいい人なんだよな。

ただまあ、オオクワ怪人の姿で言われてもね。

それと――。

『一応お礼を言っとく』

奏くんが相手だとツンデレになってしまうありますが、珍しく素直にお礼を言っていた。

俺がありすに甘えたのは、奏くんの入知恵だと気付いたんだと思う。

まあ、奏くんが来た夜に俺があんなことを言ったら、そりゃあ奏くんになんか言われたんだと思うのも当然か。

『あまねのことを頼んだぞ、ありす』

ありすの頭を撫でながらそう言った奏くんは、ありすは俺を見た。そして俺の手を握り、顔を真っ赤にさせながらコクンと頷いた。

奏くんは迷惑をかけてしまったけど、でも、相談してよかった。

俺達が学校に登校するのを母さんと一緒に見送ってくれたオオクワ怪人は、用事も済んだから故郷の山に帰ると言っていた。

と言うのは冗談で、伊織ちゃんが心配するから早めに帰るとのことだった。

少し歩いては立ち止まり、振り返ってオオクワ怪人に手を振っていた夜乃宮さん。

オオクワ怪人のことが相当気に入ってしまったようだ。

オオクワ怪人もずっと手を振っていた。

奏くん、オオクワ怪人の姿で外をウロウロしていると変質者として捕獲されちゃうから気をつけてね。



学校へ到着すると、昇降口の横に人だかりができていた。

なんだろうと思って近寄ったら――。

「あまねさんだ！」

「あまねさんが来たよ！」

俺に気付いた生徒が声を上げ、次いで人垣が割れた。

人垣が割れたことで、その先にある掲示板が見えた。

「……ん？」

掲示板には紙が貼られていた。そしてその紙には――。

――みんなのあまねお姉さまにこれからどうして欲しいかについての投票結果。

と書かれていた。

その下には――。

- ・高梨ファミリーとこれまで通りイチャイチャして欲しい。二十五パーセント。
- ・イリスさまとのイチャイチャを生で見たい。二十パーセント。
- ・ダブルアリスのお姉ちゃんとして二人ともっとイチャイチャして欲しい。十五パーセント。

・水無月姉妹のイチャイチャをもっと見たい。十二パーセント。

・高梨さんとのイチャイチャをもっと見たい。十パーセント。

・砂庭さんとのイチャイチャをもっと見たい。八パーセント。

・くうちゃんは可愛い。七パーセント。

そんなことが書かれていた。そして一番下に――。

・副会長を応援したい。三パーセント。

と書かれていた。

なんだこれは。投票結果って書いてあるけど、誰かが調査でもしたのか。

高梨さんのグループ全員と仲良くするのが一番人気なようだけど、その下にイ

リスさんの名前があり、しかも単独では断トツの一位だ。

まあ、イリスさんの綺麗さは群を抜いているからな。百合園さんもうちのありすも、イリスさんと並ぶと子供っぽく見えてしまう。

しかし、この前まで百合園さんの分裂体とか言われていたのに、もう名前まで知られているのか。

そして“くうちゃんは可愛い”ってなんだよ。確かに可愛いけど、投票の趣旨が違くないか。

それはそうと、少数だけど副会長を応援している人もいるのか。

「ちょ、ちょっとこれ、あまねさんに見られたらまずいんじゃないの？」

「意識しちゃって高梨ファミリーとイチャイチャしてくれなくなったらどうしよう。それだけが楽しみで学校に来てるのに……」

「大丈夫だよ、あまねさんの器はそんなに小さくない」

「そうそう、これまでだって散々騒がれてきたのに平気だったんだから大丈夫だよ」

俺をチラ見しながらヒソヒソと会話を交わす生徒達。

ああ、まあ、注目されたり騒がれたりするのもだいぶ慣れたし、周りに迷惑さえかけなければ好きにやってもらっていいですよ。

そもそも百合園さんが屋上で拡声器を使って演説をしているのを見た時点で、色々腹をくりましたから。

「ぬぐぐぐ……百合園姉に負けた」

一方ありすはイリスさんが単独トップなのを知って悔しがっている。

「こ、こうなったら人目もはばからずにお姉ちゃんとイチャイチャするしかない！」

決意を固めたような顔で声を張り上げ、胸の前でギュッと両手を握り締めてうんうんと頷くありす。

そんなありすにきゃーきゃーと歓声を上げながらパチパチと拍手を贈る生徒達。

なんだかんだでありす派もけっこういるようだからな。

そして投票結果に興味なさげな夜乃宮さんは、奏くんからもらったクワガタの形のナップザックを手に持ち、それを見て嬉しそうに笑っている。

誰が主催者なのかわからないけど、俺も“くうちゃんは可愛い”に一票入れたいです。

女の子になったら修羅場だった件 - 第七十話 人に何かやらせたいならまずは自分がやってみる件

今朝、昇降口の横の掲示板に張り出された投票結果の話題で、校内は持ち切りのようだ。

中でも話題なのはイリスさんと副会長。

風の噂ではイリスさんのファンクラブが結成されたとかなんとか。

うちの高校の生徒でも無いのにファンクラブなんか作ってどうする気なのか。

新しい情報が無いとすぐに話題が尽きそうだけど。

もっとも、妹の百合園さんならいくらでも情報を持っているだろう。だけど二大美少女の一人であり、かつ破天荒で有名な百合園さんに声をかけられる生徒なんて、うちのありすか高梨さん達くらいしかないような気が……。

まあ、イリスさんに迷惑はかからないだろうし、妹の百合園さんは迷惑をかける側だし、放っておいても大丈夫か。

それともう一つの話題である副会長。

票が三パーセントしか入らなくてお通夜ムードになるんじゃあ、と思っていたけど、その予想に反して大きな盛り上がりを見せている。

高梨さん、砂庭さん、夜乃宮さん、百合園さん、ありす、そしてイリスさん。

強豪ひしめく過酷なレースの中で、ポツと出のメガネが三パーセントもの票を集めた、と驚かれているようだ。

ポツと出のメガネって、生徒会の副会長に対して失礼すぎじゃないですかね……。

それはともかく、俺に告白しようとしたのにマイナス評価にならず、たとえ三パーセントでもプラスだったのが話題の中心のようだ。

まあ、副会長に呼び出された時、風紀委員長を筆頭に殺気立っている生徒がけっこういたからな。

でも終わってみると賞賛の嵐。

殺気立っていた風紀委員長も泣きながら拍手をしていた。

そんなわけで、校内が投票結果の話題で持ち切りと言うことは、当然俺のクラスもその話題で持ち切りなわけで……。

俺の席の前に立っている高梨さんが、項垂れながら溜息を漏らしている。

そんな高梨さんの頭を撫でながら苦笑いを浮かべている砂庭さん。

投票結果を見たらしい高梨さんは、自分に十パーセントの票しか入らなかった現実を突き付けられ、落ち込んでしまったようなのだ。

「ふ、副会長と七パーセントしか差がないなんて……」

項垂れたまま呟いた高梨さんが盛大に溜息を漏らした。

副会長と七パーセントしか差がない。

そう言われると確かにちょっとあれだな。

高梨さんと副会長、どっちを選らぶと聞かれたら、俺は迷わず高梨さんと答える。

そう高梨さんに言ってあげた方がいいのかな？

「ま、まあまあ、高梨ファミリーが一位なんだからいいじゃない。それ以外にも個別で票が入ってるって凄いことだと思うよ」

苦笑いを浮かべたまま、高梨さんを元気づけようとしている砂庭さん。

イリスさんが単独で二十パーセントもの票を集めちゃったからな。砂庭さんもと

うやって高梨さんを元気づけたらいいのかわからないようだ。

「私達に黙ってデートしてたし……」

そうボソッと呟いてチラッと俺を見た高梨さんに、思わずギクッとしてしまった。

い、いや、あれはすでに終わった話じゃないですか。ありすから事情を聞いて納得したみたいなことを言っていましたよね？

そう思いつつ、膝の上を見た。

奏くんからもらったクワガタの形のナップザックを抱き締め、俺の膝に座って嬉しそうに足をパタパタさせている夜乃宮さん。

夜乃宮さんにそれとなく釘を刺しておくのを忘れた。

夜乃宮さんが俺の家に泊まりに来たことや、奏くんも泊まっていたことを、もし高梨さんが知ったら……。

夜乃宮さんならまだしも、奏くんが泊まっていたことを高梨さんに知られるのはまずいと思う。

怒られるくらいならまだいいけど、泣かれそうだ。

「く、くうちゃん、そのバッグ可愛いね。新しく買ったの？」

話題をそらすためか、夜乃宮さんが抱き締めているナップザックを砂庭さんが指摘し、サーッと顔から血の気が引くのを感じた。

まずい、まずいぞ、これはまずい。

俺が釘を刺していない以上、夜乃宮さんは素直に話してしまうだろう。

「オオクワさんにももらった！」

元気よく答える夜乃宮さん。その言葉を聞いて首を傾げる砂庭さんと高梨さん。そして心臓が破裂しそうになっている俺。

「おおくわさん？」

「そう！」

砂庭さんの問いかけに夜乃宮さんが大きく頷いた。

「オオクワさんは、特に悪でもないけど一応秘密な結社が作った怪人なんだ！」

瞳を輝かせて説明する夜乃宮さん。

奏くん、夜乃宮さんにどんなことを吹き込んだんだ。

「え？ 悪でもないけど一応秘密の結社？」

困惑したような顔で夜乃宮さんに聞き返す砂庭さん。その頭の上に大量のクエスチョンマークが浮かんでいるように見える。

「そう！」

ナップザックを大切に抱き締めた夜乃宮さんが、元気に声を上げながら大きく頷いている。

ジト目の高梨さんと、ハッとしてにっこりと笑う砂庭さん。

「よかったね、くうちゃん」

夜乃宮さんの話に合せることにした様子の砂庭さんが、にこにこ笑いながら夜乃宮さんの頭を撫でた。

「オオクワさんは故郷の山に帰っちゃったけど、また来るって言ってたから、その時お礼をするんだ！」

ああ、うん。故郷の山に帰るって言ってたね。

夜乃宮さんの説明を聞き、そっかあ、とか言って夜乃宮さんの頭を撫でている砂庭さんと、夜乃宮さんの愛らしさに流されてしまったのか、ポッと頬を染めてうんうんと頷いている高梨さん。

もうダメかと思ったけど、上手く話が流れてくれて心底ホッとした。

奏くん、夜乃宮さんに適当なことを吹き込んでおいてくれてありがとう。



昼休みになり、ちょっと用事があると高梨さんに伝えて教室を出た俺は、ありすのクラスに向かった。

誰がやったか投票の話題で危うく忘れそうになったけど、俺はある決意を胸に本日学校に登校したのだ。

生徒会長は高梨さんのことを買ってくれている。次期生徒会長選に立候補して欲しいと言っていたんだ。

俺としても、高梨さんにはぜひとも表舞台に立って欲しい。

砂庭さんもそれを望んでいると思う。

だけど今のままではきっと表舞台に立つことを嫌がるだろう。

中学時代のトラウマが高梨さんの枷になってしまっている。

それは砂庭さんも同じだ。

納得できる結果を出せなかった高梨さんと、そんな高梨さんを支え切れなかったと思って自責の念に駆られている砂庭さん。

この二人をやる気にさせるには言葉だけではダメだ。

今朝ありすがその身を持って教えてくれたこと。

あの二人を表舞台に引っ張り出したいなら、二人を説得するのではなく、俺がこの身を使ってあの二人を導く。

ありすのクラスに到着すると、教室の入り口でありすと百合園さんが待っていた。

「私は全然かまわないけど、本当にコレにも手伝わせるの？」

そう言ってジト目で百合園さんを見るありす。

「任せてください！」

ありすからある程度の説明を受けている様子の百合園さんが、ピンッと右手を上げて声を張り上げた。

そんな百合園さんを見て盛大に溜息を漏らすありす。

ま、まあまあ、確かに百合園さんには色々と不安要素があるけど、同時に途轍もない爆発力を秘めている。

それが良い方に向いてくれれば鬼に金棒で、良い方に向かうように俺が舵を取ればいいんだ。

「しかし驚きました！ まさかあまねさんが——むが！」

赤い瞳を輝かせて声を張り上げた百合園さんは、ありすに口元を押さえられてジタバタしている。

「まだ言うなって教えたでしょ？ あんまりバカだとお仕置きだよ？」

そのありすの問いかけに百合園さんの動きがピタッと止まった。

百合園さんの口元を押さえたままにっこりと笑うありすと、青ざめた顔でコクコクと頷く百合園さん。

俺は今から二人と一緒に生徒会長に会うつもりだ。

そして生徒会長に伝える。

生徒会の三役。生徒会長と副会長、それに書記。その中の書記に俺が立候補する意思があることを。

でもそのことを高梨さんや砂庭さんにはまだ伝えたくない。

俺が突然そんなことを言い出せば、下手をすると二人のトラウマをほじくり返すことになってしまうかもしれない。

しかも自分は裏に隠れたまま、高梨さんと砂庭さんを表舞台に押しやろうとしても、二人の心はきっと動かない。

だからこそ俺が先陣を切る。誰よりも信頼できる妹と、その最大のライバルを

引き連れて、これから生徒会長に会いに行く。

高梨さんのことを買ってくれている会長なら、きっと力になってくれるはず。

「よし、行こうか」

そう声を上げると、頷いたありすが百合園さんの口元から手を離した。

「楽しくなってきました！」

ありすの手が離れた途端、声を張り上げて飛び跳ねる百合園さん。そんな百合園さんをジト目で見ながら溜息を漏らすありす。

そして俺を見たありすが視線で訴えてきた。

本当にコイツを連れて行くのか、と。

ありすよ、実はお兄ちゃんも百合園さんを一緒に連れてゆくのはちょっと心配です。

でも俺が書記に立候補すると知れば、百合園さんは確実に首を突っ込んで来るだろうし、なら最初から首を突っ込ませておこうと思いました。

そんなわけで、二人と一緒に三年生の教室がある三階へと向かった。